賢者のいし

九龍天乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賢者のいし

【Ｎコード】

Ｎ７０９１Ｉ

【作者名】

九龍天乃

【あらすじ】

世界を支配していた六賢者が亡くなってから数百年後。

日本に住む純粋な日本人、左座誠人（さざまこと）はいたって普通の高校二年生。

ある日、彼は寄り道をした廃遊園地で特殊な能力を持つ者の戦場に居合わせてしまう。それからというもの、見られたという理由で能力者に命を狙われたり、超絶美少女能力者が護衛に着いたりと彼の周りに変化が訪れて来るが――

（不定期更新）

プロローグ1　学校より帰宅する……

数百年前、つまりは二十一世紀。
賢者と呼ばれた六人が、ほぼ同時に全員老衰で死亡した。
世界を支配していた彼らが亡くなったことで全世界は大混乱に陥るが、それもそう長くは続かず、数十年のうちに賢者達のいなかった頃までの世界体制に戻された。
これは国が採用している歴史の教科書に載っていることで、入試でも頻出の箇所である。
また賢者の残した研究は今も引き継がれ、最新技術のほとんどはその研究による成果であることも知っておいた方がよい。

問一・日本の旧首都はどこか。最も適当なものを図1のア～エから一つ選び記号で答えよ。また、その都市名を漢字で答えよ。

これくらいの問題、初歩中の初歩。出来なけりゃ高校になんて受かりやしない。世の中の常識だ。
答えはウ、首都名は“東京”だ。

「正解。ま、これは点数をとらせるための問題だろ？　問二から勉強してないと分からないと思うぞ」
「どれどれ……『問二・傍線部一より、二十一世紀初頭に起きた、アメリカの住宅金融問題に端を発した第二次世界恐慌をなんと云うか』、うえっ……わからない」
「わからないじゃねえよ、思い出せよ」
「むむむ……記憶にございません」
「はぁ。教えてやっているこっちの身にもなれよ。お前が一学期中

間で赤点のオンパレードを披露してしまって期末で取り返さないといけないっていうから、勉強を手伝ってやってんのに」
「……面目ない」
「左座（さざ）、お前はほんっ――――とに物覚えが悪いな」
「そんなに強調することもないだろ！　雀部（さかべ）！」

僕は今二人しかいない教室で、前の席の椅子に逆向きに座っている雀部健太郎から、日本史を教えてもらっている。
雀部は細面で、きりっとつり上がった力強い眉、顔の大きさの割りに小さい目を持つ男子。
顔は悪くないと思うがお調子者な性格なので、女子からは若干距離を置かれている。
毎日顔を合わせているが、やはりその身長にはいつも驚かされる。なんと二メートル越え。
制服のボタンを全て外しているのはその巨躯が原因で、本人によると窮屈だから、らしい。
僕には一生ない悩みだろう。
さらに悪いことに、勉強も平均以上に出来る奴だ。

「左座って、得意不得意がハッキリしすぎてるからな。記憶力はないけど、応用力ならあるよな。数学とか物理とかはいい点数だし」
くっ、馬鹿にしたかと思えばキチンとフォローする下げてから上げる……高等テクだと！？
上げてから下げるより遥かに難しいはず。
反撃の隙を与えないとはやはり、いけ好かない男だ。
けど、自分の中では一番重要な友達なのも確かだ。
「雀部は文系のくせに全教科ばっちり出来てるんじゃねえよ！」
「ありがとなー」

Ｏｈ、皮肉るつもりが褒め言葉にしかなっていない！
こいつに恥をかかせるには性格について突くしかない……けど僕はそこまでするほど心は荒んでいない。
今のところは。

「暗くなってきたな。そろそろ帰るか？」

雀部が、手にしている問題集ではなく窓から外の景色を見ていたので、僕もつられて外を見た。
確かに太陽は街の建物の間にほとんど沈みかけていて空は上の方が黒みがかっている。
腕時計を確認すると六時五十分を少し過ぎたあたりだった。
我ながら結構な時間勉強したものだ。

「うん」
「じゃあ行こうぜ。暗くなるとさ、ほら、あの事件があるだろ？」
「あの事件？」
「先生が言ってただろ。近頃この地域で連続無差別殺人事件が起こっているやつ。それのせいで俺の陸上部も今日は休みになって、だからお前の勉強に付き合ってやれたんだろ？」

ああ、そうだった。今朝のニュースで少しばかり知っている。
犯人の目的が一切不明で、被害者にも何の共通点もないので通り魔事件として扱われているアレだ。
ただ、被害者の多くは夜に襲われている。
また被害者の中で生き残っている人は……いない。

「ほら、早くしろ」

雀部は僕の頭を小突きながら急かす。

「わかったよ。痛いからやめてくれ」

僕は机の横に掛けていた薄っぺらい鞄を取って、雀部と一緒に教室を出た。

薄暗い学校は怖いので自然と僕の歩調も速くなる。

けれど元々の歩幅の大きい雀部の方が速い。

靴箱に着いて上靴を履き替える。

外に出たときにはもう雀部は鞄を肩にかけて歩き始めていた。

さすが陸上部、帰宅部の僕とは基礎の部分で運動能力が違うな。

一端僕は自転車置き場に自分の自転車を取りに行き、校門で待っていた雀部と合流する。

校門を出た僕と雀部は昨日のバラエティ番組やクラスの面白かった出来事などを話しながら歩いていた。

雀部は家が学校の近くにあるので歩きで、僕はそれに合わせるために自転車を手で押しながら歩いていた。

雀部は陸上部なのでこちらが自転車に乗っても走って付いてくることはできるだろうけど、それはなんだか気が引けた。

しばらくすると雀部の家に到着する。

気をつけて帰れよ、と言って雀部は家の中へ入っていった。

僕はそれに手を振って答え、少しの間だけ新築のモダンな三階建ての一軒家を見つめ、自転車に跨った。

歩行者のいない住宅地路地だ。車さえほとんど通らない。

雀部と別れて一人で帰っていた僕は、このまま真っ直ぐ家に帰るべきかと悩んでいた。

もう僕も高二だ。

家に帰れば親が『勉強しなさい、いい大学に受かるには今からでも遅いのだぞ』と言い寄って来る。

僕自身、どの大学に行こうかさえ決めていないのに、気が早いと思う。
妹もいるがそっちはそっちで兄に小遣いをたかって来る様な奴だ。
妹も高校受験生だけれど、僕ほど親にとやかく言われることは無い。
自転車をこぐ速度を若干遅くして、大きくため息をついた。

そうだ、やっぱり家に帰る前にあそこへ行こう。

家に帰る道から外れて、僕は自転車を別の場所へ走らせた。

プロローグ1　学校より帰宅する……（後書き）

ここでは初めての投稿ということで結構緊張していたり。
どんどん面白くなっていく……はず。

プロローグ2　逃走不可能

周りには建物はほとんど無く田畑が広がっている、車一台が通るのがやっとの大きさの道路で僕は自転車を走らせ続けている。住宅地を抜けてから十分ほど経つだろうか。

それにしても暑い。ペダルをこぐ力はあまり入れていないので、おそらく原因はこの制服のせいだろう。

夏も間近に迫っているというのにまだ冬服なのだ。いい加減に夏服に移行させてくれ、学校。

僕は暑苦しさを緩和させようと片手で制服のボタンを全開にした。風が腹部や脇の下へ潜り込んで来て気持ちいい。

内に篭っていた熱気をあらかた放熱させた僕はわずかに足を動かすペースを上げた。

ここだ。

僕以外にもここにこれがあると知っている人はいるだろうけど、入ってこようとまで思うのは僕だけのはずだ。

ここは、僕だけの場所。

誰も来ない一人だけの世界。

辺りはすっかり暗くなってしまったけれど、今日は満月、月明かりが照らしてくれる。

ぬっと黒く其処に佇んでいる巨大な人工物。それは……観覧車だ。

僕は廃棄された遊園地の出入り口に来ていた。

僕の背丈を優に越える真っ黒な正門には手首ほどの太さの鎖が巻きつけられていて、通常の大きさの数倍はある南京錠で固定されている。全体的にかなり錆び付いているとはいっても、人一人の力でどうにかなるようなものじゃない。

勿論、僕はここから入ろうとはしていない。

自転車をそこに置き、遊園地を取り囲む塀に沿って歩いて半周す

る。

「えっと……ここら辺に……あった」

塀の一部が壊れて、かろうじて僕が通れるぐらいの穴が開いている、というより開けた。昔の自分が開けた……と思う。ぼんやりとしか覚えていないから、はっきりとは言えない。

その穴を潜り抜けた僕は静寂な遊園地を見渡す。

完成しているけど動かない観覧車、乗る馬が一匹しかいないメリーゴラウンド、乗車場所のみがあるジェットコースター。その他の場所にも設置途中の遊具や資材が放置されている。

なんでもこの遊園地を建設していた会社と発注した会社が同時に倒産してしまったらしい。

そしてこの土地の所有権を持つ人間は、遊具を取り除く費用を考えると何もしない方がいいと判断したようだ。

僕は首を傾げる。

なんでこんなに詳しいんだ？　何処で知ったんだっけ。

それほど気にする事でもないので深く考えず、僕はメリーゴーラウンドに向かった。

メリーゴーラウンドを囲む錆び付いた柵の入り口に手を掛けて、少しだけ力を入れると、黒板を引っかいたような嫌な音を立てて開いた。

僕はたった一匹しかいない馬に腰掛けると、天井を見上げた。メリーゴーラウンドの天井には隕石でも落ちてきたかのようにぽっかりと穴が開いてしまっていたので、夜空が見える。

……これは僕がやったのではなくて、抜け落ちたという感じでもないので、おそらく仕様だろう。

中心の柱は天井とは接せずにそのまま突っ立っている。

この場合柱は一体何の役割なのだろう。邪魔なだけのような気がするけど。

と、何を考えているんだか。どうでもいいじゃないか。
再び視線を上へ。
蒼黒の空に、星はない。一つもそこに存在してはいない。
あるのはビー玉サイズの月だけ。
僕自身生まれてから星というものを見たことがない。
実際には、星は消えたわけではないらしい。肉眼で捉えられなくなってしまったから、見えない。
何故そうなったかというと、理由は一つだろう。
僕はおもむろに首を横へ動かした。
そこには、夜空をかき消そうとしているかのような巨大な、先ほどの月の何十倍もあるもう一つの月があった。
何度見ても驚いてしまう。感嘆とかじゃなくて、ただ単にそれがあるという事実に。
あれは昔、賢者と呼ばれる六人の人間――彼らは科学者たちだとも暴君だとも言われていて、伝説じゃ宇宙の力を自在に操れたとか――が造ったとされている。
どうやって造ったのか、どうして造ったのか、全くの不明。と教科書にあった。
おお、勉強の成果が出てる。

「あー、勉強したくなくてココに来たんじゃなかったっけ。何復習してんだか……」

自然と独り言が出たので、嫌気が差してため息をついた。
その時だった。

ゴウ！

と今まで味わったことのない強風が僕を包んだ。
近くにあった固定されていなかったベンチなんて枯葉のように飛

んでいってしまったのだから、咄嗟に馬にしがみ付いていなければ吹っ飛ばされていた。

「え？」

遊園地の周辺には山が聳えているため、こんな風がやってくるはずがない。

それに自分の股の下から風が掬い上げる様に移動するなんて、足元に大型ファンでもなければ起こらないはず。

僕はしがみ付いた姿勢のまま固まっていたけど、なにやら音が聞こえてきた。

いや、声だ。

“……が……だ……”

男の声だということはわかった。でも、遠いのかよく聞き取れない。

僕は馬を降りて、無意識に足音がなるべく小さくなるよう抜き足差し足移動し、柱に背中をくっつけるようにして聞き耳を立てた。

「……貴様をヤれば“賢者のいし”は私を含め残り二人となる。となれば、あと一人だ」

……ヤる？　……賢者のいし？

誰かと話をしているようだが相手が何も言い返さないのでどんな人か判断できない。

「能力も使わずに此処まで逃げ切れるとはさすがと言っておこう。だが、そうやって逃げられるのももうお終いだ」

能力？
何の話をしているんだ？　という好奇心がちらついて、僕は顔だけを出して柱の陰から声のする方向を窺った。
真っ黒なスーツを着た人と青白い光を纏ったロングヘアを持つ人がそこにいた。体格から判断するに、スーツの方は男、ロングヘアの方は女性だろう。

「連続無差別殺人事件？　だったか、貴様らの組織が情報統制を行ってくれたおかげでやりやすくなったよ。他の奴らを何人殺してもその事件にすり替わる」

殺した……？　まさかとは思うけど、まさかまさか……。

「いい加減諦めたまえ。一瞬で苦しまず殺してやるから、な？」

男は小さな子供に語りかけるような口調で、女性を挑発した。女性はこちらを背にしているため表情はわからず、言い返したりもしないのでどういう心境かは不明だ。
……なんて状況。
廃遊園地に人が来るなんてあり得ない、取り壊しに来た業者でもない限り。そして明らかに目前の二人はそうじゃない。
これはあれだ、映画なんかでよくある決闘シーンという感じだ。命を掛けたやつ。
ってか、男の話している内容を聞けば普通じゃないことぐらいわかる。無差別殺人事件の犯人のような口ぶり。
素でヤバイ。別に僕は死線を潜り抜けてきた手錬の戦士でもないけれどこの空気を感じ取れないほど鈍くはない。部外者である僕が居ていい場所じゃない。
もっと早く気付くべきだった。

「相変わらず無愛想だな」
男が片手を大きく上げ、素早く振り下ろした。
と同時に僕の頬に触れながら風が通り抜ける。
ピッ。
え？
風の触れた箇所から音がして、そこが無性に痒みを帯びた。顔を引っ込めて右手で触れてみる。
生暖かい液体がそこから指をつたって袖の中へ流れ込んできた。
痛い……痛い？　痛い！？
頬に刃物で切りつけたかのような鋭い痛みが走った。状況が状況なので声は噛み殺す。口内に貫通するような大きな切り傷ではないけれど血が流れ出るぐらいはあった。
風で切れた？　そんなことがあるのか？
と、とにもかくにもここから逃げなければ！
正門や裏門は閉まっている。敷地内に入ってきたときに使ったあの穴から外に出るしかない。
「ハッハァ！　よく避けたなぁ！」
男の笑いの混じった声が聞こえる。僕の存在はまだばれていない様子。にしても怖い笑い方だ。
メリーゴーラウンドを降り、開いていた柵の入り口から出る。
あとは穴まで一直線だ。一気に駆け抜ければ数秒で到着す――
――ドゴォ！
はっと僕は反射的に一瞬止まって後ろを振り返った。何の音だ、

爆弾でも使ったのか！？
やっぱりヤバ過ぎる。僕は走りだした。
穴への距離は五十メートル、いや四十メートル、いやいや三十メートルぐらいであって欲しい。
だんだん目的の場所まで近付く。
あの穴から出たら自転車のとこまで走ってすぐにここから離れる！　そしておそらく二度と来ない！
でももう一回ぐらいは来るかも、だって思い出の詰まった場所だから、でも今は逃げを優先。
ここが跡形も無くなくならない限りは……

……思い出って何だ？

僕がここを見つけたのはつい最近、思い出なんてあってたまるか。
あ、でもこの遊園地の塀に穴を開けたのは昔の自分だっけ？
は？　何の記憶だこれ？
だぁっ、混乱している場合じゃないだろ！
穴までもう十メートルぐらいか、足運びが遅くなっていたので喝を入れる。
こんな非日常的場所からはオサラバです！
……なんて僕の願いを神様は踏みにじったようです。
何か黒い物体が飛んできて、穴の傍に置かれていた資材に激突した。積み重ねてあった資材は上から倒れ落ち、唯一の出口を塞いだ。鉄パイプだけでなく幾つもの仮設トイレまであって、退かすことは出来そうにない。
足を止めて、僕は口をぽかんと開けた。駄目だこれは……。
「貴様はその程度なんだよ、リリアーヌ！」
男が大きな声で叫んだ。この場所に立っていては見付かってしま

う、僕は倒れた資材の陰に飛び込んだ。
僕が体勢を立て直した途端、カラガラと音を立てて資材の中から人が立ち上がる。それが僕の目と鼻の先でだったので、僕は驚いて地面に尻餅を突いた。
資材から出てきたのは女性の方だった。僕に背を向けて立ち上がった拍子にフワリと広がった長髪は瞬く間に元の位置に戻った。
覗き見ていたときは遠かったので気付かなかったけど、今見ると身長は僕より低い。大人の女性ではなくて少女だった。

「お前は誰だ」

それが僕に向けられた言葉だと判断するのに数秒必要だった。なにせ、こっちを一センチも振り返らずに小声で訊いたからだ。

「僕は」
「……黙っていろ」

僕が質問に答えようとした瞬間に遮ったのでムッとしたが、男が視界にちらりと入ったために僕は身を低くした。
本能が男よりこの少女の方が大丈夫と見極めたらしい。何が大丈夫なんだか。

「今のは痛かっただろう。抵抗しなければこんなことにはならなかったんだぞ」
「……」

少女は返事をしない。

「屠るくらい簡単なのだ。もう一度言おう、諦めろ」
「……」

少女はピクリとも体を動かさず直立している。

（死にたくはないな？）

少女が小さく呟いた。僕は意味がわからず聞き返そうとするがやはり遮断して、

（死にたくはないな？）

と同じ質問をした。

死にたくないのは当たり前だ。僕は、ああ、とだけ返した。

（……ならば手伝え。合図をしたら走れ）

「どこへ？」

（どこでもいい）

「出入り口は閉じていてここからは逃げられないんだぞ？」

（……何処でもいいと言っている）

少女がちょっとだけ首を動かして横目でこちらを見て威圧した。

その瞳はあの大きな月と同じ蒼色だった。

「お？　まさかそこに誰か居るのか？」

男は笑い出すのを堪えている感じだった。彼女は向き直ったけれどもやはり何も言わない……と思ったけど、

「戦闘時間を百八十秒に設定。カウントダウン開始」

少女が初めて男にも聞こえるような大きさで声を発した。

「三、」
「チッ。能力か」
舌打ちをして、男が右手を振り上げながらこちらへ突進してきた。
「二、」
少女が体勢を低くする。なるほど、合図はとはこれか。僕もクラウチングスタートの姿勢に。
「一、」
男が右手を振り下ろす。僕は地面を蹴る。
「零！」
真後ろで新幹線が通り過ぎたかのような轟音が。僕は言われたとおりに駆け出している。
左足が地面を捉えて前に加速し、続いて右足が地面へ。そしてまた加速。
もう一度左足を地面へ――ってあれ？　足が地面につかない？
背中に猛烈な圧力を感じているけれどまさか。目線を下へ移動させると……地面があった。ただし僕の足は接していない。
「まさかぁぁあああ！」
どうやら僕の体は空中にあるようだった。

プロローグ3　巻き込まれて

……空を飛んだのは初めての経験だった。ジェットコースターの、フワッと浮く感触とほとんど同じだ。
さて、問題は自由落下中の僕がどうやって安全に着地するか……それに尽きる。
五点着地なんて高度な受身技を備えてはないし、かといって足からそのまま着地したら骨の一本や二本持っていかれそう……。
なんて考えている間に地面は迫る。ああ、もう間に合わない。

「ぐうわっ！」

足から突っ込んでは駄目だという考えが浮かんできて、僕はぎりぎりで体勢を変えて背中から着地した。
それが偶然にも柔道の前回り受身みたいになって僕はコンクリートと砂の地面を何回か転がった。
背中を強打して肺の中の空気が押し出される。そして漸く僕の体は静止した。

「ゲホッゲハッ！　ううぐ……」

後頭部もしたたかに打ちつけてしまった。
体中痣だらけに違いない……明日は辛いだろうな、明日があれば。
僕は体をどうにか起こすと立ち上がって、骨が折れてるとか重症な箇所がないことを確認する。
ない。大丈夫だ。奇跡なんじゃね？
振り返ると先ほどまで僕のいた場所は謎の土煙に覆われている。
やっぱり爆弾か何かの類を使っているのか奴等は、ありえない、逃げるべき。どこから。何処からも逃げられない。んな馬鹿な。神

様は絶対一つぐらいは助かる道を用意してくれているはず。
落ち着こう……状況整理をしよう。
まずこの遊園地から逃げ出すことが出来るのはあの穴だけだったこと。その穴が塞がれてしまったこと。
男と少女が（恐らく）殺し合いをしていたこと。僕はその場に居合わせただけだということ。
そしてどちらかというと男より少女が味方になってくれそうなこと。
僕に残された選択肢は……一つじゃないか。
少女に味方して男を倒すこと。勿論、その後少女が僕を殺すこともあり得る。でもそれしかないと思う。
僕はもう運が悪い状態なのだから不幸中の幸いぐらいあってもいいはずだ。お守りを家に忘れたからって今日はどれだけツイていないんだ。
でも僕も男だ、腹を括ろう。お父さんお母さん妹よ、誠人は何があっても無事に帰還して見せます。帰れたら勉強もちゃんとします。
突如、土煙に切れ込みのような線が走って、パッと煙は弾け飛んだ。
そこに立っていたのは……男ただ一人。
えええ！　あの子やられちゃった！？
おいおいおいおい、まさかの生き残る選択肢ゼロ？　神様は酷い野郎だ……。
「小僧！　貴様は誰だぁあああ！」
「ひっ」
心底お怒りになっていらっしゃる。これでは万に一つも生き残る術はない。土下座程度じゃ許してくれはしないだろう。
「貴様も組織の者か！」

「……そ、組織ってなんですか？」

僕の声が震えている。涙目なのでもう一回怒鳴られたら泣きそうだ。

「そいつは違う……」

高い透き通る綺麗な声。ふっと僕の前に影が降り立った。大きな月がシルエットのように少女の体を浮かび上がらせる。

両手には鉄パイプが一本ずつ握られていて、逆光のためか顔は見えない。

救世主登場！　死んでなかったんだ！

「違う？　ただの一般人だとでも言うのか？　こんな場所にそんな人間が居るとでも？」

お言葉ながら僕がそうです。

「こんなヘタレ……組織にはいない……」

救世主様は結構他人の気持ちを考えないんですね。ヘタレと直接言われたのは初めてだよ。

「確かにそうだ。アハハハハハ」

男は腹を抱えて笑っている……こちらの気持ちも少しは考えて。

「ハハハ……ならば、殺しても構わないということだな？」

口調が重く鋭く変わった。……本気だ、本気で僕も殺す気だ。や

めてください。

「……逃げ回っていろ」

少女が僕にそれだけを告げると、すぐさま男に向かって突進した。

僕は痛くて堪らない体に鞭打って少女が走り出した方向とは直角に逃げ出した。ただし目線だけは少女を追っている。

「近距離戦闘しかできない貴様には私を倒すことなどできるはずがなかろう！」

男は余裕なまま、一歩も動かない。

「あとは貴様の戦闘継続時間が切れるのを待って嬲り殺しにしてやるさ。その小僧と一緒にな！」

少女が左手に持っていた鉄パイプを男へ思いっきり投げつけた。投げられた鉄パイプは回転せずに恐ろしいスピードで男に接近する。

「ふん！」

男が腕を横に払った。迫った鉄パイプが男に当たるかと思えたが、金属と金属がぶつかった音がして鉄パイプがあらぬ方向に飛んでいった。

手で弾いた？　いや、手は触れてさえいなかった。まるでそこに見えない壁があったかのような……。

少女はさらに右手に持っていたもう一本の鉄パイプを放つ。

距離は一投目より短い。僕は避けられないとふんだ。

だが男は右手を鉄パイプに向かって翳すと、今度は鉄パイプが粉々に吹っ飛んだ。

続けて男は右手を少女の方へ。少女は瞬時に地面を蹴って跳躍する。
少女のいた地面は見えない鉄球でも叩き付けられたかのように爆ぜた。あとコンマ〇〇一秒でも遅れていれば彼女のスプラッターな場面になるところだった。
少女は空中で一回転してメリーゴーラウンドの屋根に着地する。身体能力が超人級だ。
しかし……これは何だ？　漫画に出てくる超能力者の戦いでも見ているかのよう……あ。
そうか。これは、超能力者の戦いなのか。
なーんだ、そうかー……って何ぃ！　もっとヤバいぞこれは！
普通人の僕がいてはならないところじゃないか！
それに組織がどうのこうの……それに超能力者なんてのが一般的に知られていない点から鑑みるに……。
僕は走って観覧車の陰に隠れた。まずは息を落ち着ける。
やばいやばい。
“超能力者の秘密を知ってしまったからには口止めが必要だ”みたいな感じで助かっても殺されるのでは！？
久々の修羅場。
テストで大問一、二、三とわからない問題が続いたような、携帯を学校に持ってきたのがばれて生徒指導室に連れ込まれるような、いやそれ以上の危機的状況。命の危機。
そうだ、今のうちに逃げられる場所が本当にないかを確かめよう。もしかすると別に外へ出られる所があるかも。
なんてね。あのお守りがあればなぁ。
ガッ！　ギギギギッギギギイ！
「はっ？」

僕は音のした観覧車を見上げた。……観覧車が中心部から斜めにずれている。

Ｏｈ、ツイてねえ。

観覧車の上部は重力の力に負けて、僕に落下してきた。

プロローグ3　巻き込まれて（後書き）

次の話から少しの間、視点が変わります。
→のつもりでしたが……やめときます。

第一話　夢オチ、そして登校する。

「わぁ……何なの、あれ」
「今、建設中の、遊園地だろう。ほら、壁の内側に、観覧車が見えるだろ？」
「ホントだ！」

燦々と照っている太陽の光が窓越しに入り込んでくるけど、車の中は冷房が効いているので全然暑くない。
そのときの僕は近所に遊園地が出来るのだと思っただけで心臓の鼓動が高鳴ってしまった。
家族でおじいちゃん家から帰宅するところ。
おじいちゃんの家に行ったということは御盆だったのだろう。いつだったかなんて記憶にあるはずがない。何せ僕がまだ幼稚園児だった頃なのだから。

「ねえ、お父さん！　あそこが出来たらさ、連れてってよ！」
「……どうかなぁ。仕事とか、忙しいから、な」
「フフフ。あなた、いいじゃないですか。仕事ぐらい休みをお取りになったら？」

僕の隣に座っているお母さんが賛同する。

「仕事ぐらいって……それでお前らが、食っていけるんだから、休むことなんて、できないぞ……それが、父親の務め、だろう」
「あら。子供と遊んであげるのも父親の務めでしょうに」
「それは俺より、暇のあるお前が……」
「父と息子同士でしかできないこともありますわ。ね、誠人」
「僕、お父さんと遊園地に行きたい！　あ、えと、もちろんお母さ

んとも！」

危うくお母さんを抜かすところだった。僕は家族三人で遊園地に行きたいのだ。

「むむ……わかった。あの遊園地が、出来上がったら、な。時間は、如何にかしよう」
「やったー！　ありがとう、お父さん、お母さん！」
「決定事項では……」
「誠人にとってはもう、そうなってしまったようですよ」
「お父さん約束！　指きりしよう！」
「あ、ああ……」

運転中のお父さんは左手を後ろに回し、僕はお父さんの立っていた小指と僕の小指とを組み合わせてギュッと力を入れた。

「痛てて……力、強くなったな、誠人」
「どんどん大人になってるもん。僕、スーパーマンになっちゃうかもよ？」
「フフフ。ほんと、このまま私たちの手に負えないほどに成長したらどうしましょう」

お母さんは少し抜けた感じで言った。

「さぁ、俺には、わからん」
「僕は僕一人でも大丈夫！　大人だもん」
「あら。頼もしいわね」
「大人なら、遊園地に行かなくても、いいな」
「ええー！　遊園地には連れてってよー」
「ったく、子供ってのは……」

ふと、お父さんが身をのりだして後部座席にいる僕のほうを向いた。

「あ、危ないよ、お父……さん？」

「……できないことを平気で頼むからなぁ」

こちらを向いたお父さんには……顔が無かった。鼻の様な起伏はあるが鼻孔はなく、目も唇もなかった。ただ、口の代わりなのか顔のでっぱりの下辺りに黒い大きな穴が開いていた。

僕は怖くて無意識にお母さんに縋ったけど、上を見上げるとお母さんものっぺらぼうであった。

「ひっ」

口から小さく恐怖の声を漏らして僕は車のドアに手を掛ける。……開かない！？　何度引いても押しても無理だった。

「あらあら。誠人、どうしたの？」

「私達、両親の顔が、思い出せないのかい？」

いや、そんなことはない。僕のお父さんとお母さんは……あれ？思い出せない？

どんなに頭の中を探してもその部分の記憶だけが抜き取られたかのように、消えていた。

「そんな……！」

お母さん――いやそれ化けていた何か――が僕に手を伸ばす。お母さんは綺麗だと思うほど白い肌だけど、今は全く不気味だ。

「来ないで！」

奴の手を僕は跳ね除けた。一瞬だけ触れたその手は……氷のように冷たかった。

「フフフ。元気ね。本当はね、あなたはここにいては駄目なの」

「……お前は、帰りなさい」

顔がないはずなのに……二人が名残惜しそうな表情をしているかのように思えた。

●

――ピピピピ！

僕は布団の中から手を出して、安眠を阻害する音源を叩き潰した。勿論、音を止めただけで破壊したわけではない。

「ふむむ……」

目覚まし時計を叩いた手で時計を取り、重たい目蓋を開いて時間を確認した。

……もう起きる時間か。

ふう。久々にハードな夢二本立てを見てしまった。二つ目の奴はかなり恐怖映画みたいだったから、汗で寝間着が濡ぬれていた。ホラーは苦手なんだ。

僕はもそもそとベッドから芋虫のように這い降りる。フローリングの床がひんやりとして気持ちがいい。横に転がって部屋のドアに辿り着いた。僕の部屋にはベッドと机以外何もないので足を物にぶ

つけるとか、物を体の下敷きにして潰すとかはなかった。
予めドアを少し開けているためにドアノブを使わずとも開閉可能に……

「おい、起きろー」

突然ドアが勢いよく開いた。
そして、ドアの角が僕の顔面に激突した。目に火花が散る。最もダメージを受けた鼻の上部を押さえ、僕はもんどり打って痛みに耐える。

「床で踊って何してるんだ、誠人？」
「痛い……」
「……？」

この、眼鏡中年オヤジが！　ノックぐらいしろよ！
なんて人を朝から罵倒できるほどの気力と血圧を、僕は備えていない。

「下りて来いよ。母さんが朝ご飯作って待ってるぞ」
「わ、わかった……」

僕は痛む箇所を手で押さえながら立ち上がって、父さんの後に付いて行き一階に下りた。
一階のリビングでは母さんがテーブルに料理を並べ終え、一足先に朝食をとっていた。父さんと僕もそれぞれの椅子に座り、いただきます、と言って食べ始めた。
妹がいないのはいつもの事で登校時間三十分前にならないと起きてこない。まあ、中学校は家から近いのでそれくらいでも間に合うのだ。

今朝の朝食は洋風だった。牛乳、コンソメスープ、トースト、ベーコンエッグ、サラダ……とあるけど朝からこんなには食べれない。毎朝三分の一ほど残してしまうのは仕方がない。胃腸がまだ眠っているんだから。

母さんは僕の食べ残しを見て、柔らかく注意をする。僕は適当に返す。

そんなことでは大きくなれないぞ、と父さんが言うけどこの方たちは息子の低血圧を把握しているのだろうか。してないだろうね。

さて、そんなこんなで流れの早い朝の時間は過ぎてしまった。僕は鞄を取りに行くために一端二階に上がり、自分の部屋のドアを開ける。

それと同じくして僕の部屋の向かいにある妹の部屋のドアが開いた音がした。

僕は振り返って目を擦っている妹に対して、

「おはよう」

と爽やかに言えば、妹は、

「朝から挨拶するな。ウザい」

とひねくれた返事をしてこちらを睨みつける。反抗期か。僕にはなかったけどね。

こんな奴を相手にする暇はないので僕の部屋に入って鞄を持つ。部屋を出る前に忘れ物がないか確認する。

何か忘れている気がするけど……あ、そうだ。

僕は勉強机の引き出しを開けた。そこに入っていた結構な厚みと重さのある“お守り”と書かれた物を掴んで、鞄の中に突っ込んだ。

これがないと運が味方する可能性がゼロになる。昨日だけでなくその前にも何回か忘れていったことがある（そしてことごとく不運

な目に……）ので多分そうなのだ。
昨日……？　いや、あれは夢だったな。
今日もお守りの効力にあやかり……待てよ。見方を変えれば、常に身に着けておかないと持ち主を不幸にする呪いのアイテムだとも考えられる。
どちらにせよ、持って行ったほうがいいのは変わらないんだけど。
時間に余裕がなくなってきたので小走りで玄関に向かい、自転車の鍵を取り靴を履いて、いってきますのご挨拶。

「いってらっしゃい」
「おう」
「……」

各々の返事（一人言葉を発していないけど意識がこっちに向いているので返事とする）を聞いて僕は外に出た。
いつもの場所に置いてあるシティサイクルで、僕は学校へと登校する。

「怖いですね……」
「そうだね」

父親は会社の制服に着替えてソファに座り、母親はその横に座っている。
子供たちが居なくなったリビングで夫婦はテレビのニュースに注目していた。
そこには“廃遊園地での崩壊事故”とテロップが映っている。
『……老朽化した観覧車が自重に耐え切れなくなり倒壊したと見て

警察が事故原因を調べています。小林さん、この事故についてどのようにお考えですか』

『そうですね。まず土地の管理者が建設途中であった遊園地の……』

第二話　転校生

僕の学校は私立天明園（てんめいえん）学院高等学校である。
創設してからは長い歴史があるけれど、一年前に校舎の建て替えが行われたので全くもって古びたところはない。しかも大学にあるような最新設備も整えている。時代の移り変わりって簡単なものだなあ、なんて年をとった人たちは言うのだろうか。
今年の高等部二学年では一年のときの文理選択で理系、文系の人数がキリの悪い数字になったらしく、一クラスだけ理系文系合併クラスが誕生してしまった。
僕が在籍しているのは合併クラスで、理系の僕と文系の雀部が同じクラスにいるのにはそういうわけがある。

教室に着いた僕は机に突っ伏して眠っていた。席の場所はクラスの後方、廊下側。
あの夢のせいで浅く眠ることしかできなかったらしく、現在猛烈な眠気に襲われ、抗わずにいる。自分には無駄に神経質なところがあるので机の上でなんて眠れない。
目を閉じているだけ、と言うほうが正しい。それでも幾分かはマシになるだろうと思う。
不意に僕の体が揺さぶられた。体に触れる手の感触……この大きくてごつごつした手は雀部（さかべ）のものだ、間違いない。見てわからないのか、僕は寝ているんだ。

「左座、起きろよ」

ゆさゆさ。

「左座ー」

ゆさゆさゆさゆさ。

「俺が暇だろー。起きろよ」

ぺしっ。

雀部が僕の頭を叩いたところで上体を起こすことなく僕は叫んだ。

「寝てるんだよ！」

数秒だけ雀部は沈黙したけどまたすぐに僕の体を動かし始めた。

「起きてるならそう言え」

「……ウザ」

「あ？　何か言った？」

「何も言ってないよ」

「怒ってる？」

「怒ってない」

「でもウザいって呟いただろ」

「聞こえてるんじゃないか……」

しぶしぶと頭を起こし、僕の眠りたいんだから放っておいてくれ的空気を読まないクラスメート、雀部のために話し相手になってやることにした。

同じ組の生徒は全員揃っているようで、クラスではそれぞれ数人のグループを作って話をしている。そろそろ朝礼の時刻だろう。

ボーとした頭でそれだけ考えて僕は隣の席に座る雀部に向き直った。

「おい、その顔のやつ、怪我でもしたのか」
「怪我……？」

雀部が僕の顔を指差して言ってくるので頬に触れてみると、ちょっとした痛みがして手を引いてしまった。今度は気をつけて触ってみると顔に傷パッドが張られていた。

「ほんとだ、怪我してるみたいだ」
「おいおい。知らなかったのかよ……」

雀部が呆れるように言う。お前に言われたくはない。

「ところで、今朝のニュース見た？」
「いや。見てないけど」
「まじで？　じゃあ、あの事故のこと知らないのか？」
「事故？」
「山の方にさ、放置されてる遊園地があるじゃん」
「うん」
「あれのさ、観覧車がぶっ壊れて落下したらしくて。テレビじゃ老朽化がどうのこうのって言ってたけど俺は違うと思うね」
「へえ……そんなことがあったんだ。危ないなー」

僕は興味が湧かないので感情の篭っていない相槌を打つ。

「ほら、理由訊かないのか。俺がそう思う理由」

雀部が顎に手を当ててなにやら自信ありげな態度をとった。僕はイラッとくるのを呑み込んで、

「……なんで？」

と訊いてあげた。雀部は待ってましたといった感じでニヤリと笑う。

「フ。聞いて驚くな……その理由とはっ」

次に雀部の言葉が発せられようとしたちょうどその時、教室のドアがガラリと開いた。

僕のクラスの担任、女性教師の橘内（たちばな）先生が入ってきたのだった。脇には出席簿を抱えている。

「話を止めて席に着きなさい。はい、黙想！」

合図がかかると瞬く間に教室中が静まり返る。僕も目を閉じて黙想をする……ふりをして隣の雀部を見ると不満げな顔で何かを呟いていた。

四十代になろうかという年なのに独身の橘内先生は高校生相手でも彼氏を絶賛募集中らしい。

先生の持つ男に勝る凄みが男を遠ざけていることに、いつになったら気付くのか。……気付いても変わりそうにないけれど。

「委員長！」

「……起立！」

学級委員長の号令に、ガッと皆一斉に立ち上がる。起立から礼、着席までまるで軍隊のように統率されていた。橘内先生は出席簿を教卓に置いてため息をついた。

「ええっと、まず一つ重大なことを言っておく」

橘内先生が重くゆっくりとした調子で口を開く。過去に数度この口調になったことがあるけど、その後ろくな事が起きなかった。前は黒板が汚かったと言うだけでクラス全員に説教と、レポート課題が出された。

これから起きることを想像して僕はごくりと生唾を飲み込んだ。

しかし、うれしいことにその予想は外れることになる。

「このクラスに転校生が来る。そこの廊下まで来ている」

クラスが、どよとざわめきたつ。僕も先生の言ったことが信じられずに隣の雀部を見た。同様に雀部も驚いた表情をしていたけど直ぐに『女子か、女子か？　美人か、可愛いのか？　男子はないだろ？　空気読めよ橘内』と呟き、彼の世界に突入してしまった。

「先生、女子ですか！？」

窓側の男子が手を上げて、大半の同級生が訊きたいであろう事を代表して問う。

「私はいつでも少女の心持だぞ」

「ボケはいいですから」

「ちっ。黙れ、貴様ら」

橘内先生は露骨に舌打ちをして言った。しんと静まり返るのには一秒と費やさない。

「調子に乗ってんじゃないぞ、ガキ共。転校生ぐらいなんだ。それくらいではしゃいでんじゃねえ」

生徒に向けてガキとは……先生の言葉使いとは思えない。

「……女子だ」

目線を窓に向けながら橘内先生が告げた。男子がオオウと雄叫びの様な歓声を上げ、女子はアァーと残念がる。

「入ってきたまえ」

「失礼します」

クラスがさらに騒然となった。音の発生源は男子が主ではあるけど女子も十分に声を出していた。

「まじか……？」

雀部が口をあんぐりと開けて愕然としている。

それもそのはず、転校生は、いや、なんと言ったらよいか、美人というか、可愛いというか、群を抜いて、その、綺麗だった。

背中まである長い黒髪。体格のラインはしなやかなのに、どこか鍛えられている感じがする。西洋人と東洋人の中間のような絶妙なバランスの顔立ち。美人の定義をいいとこ取りしてきた様でいて、幼さもわずかに残す。

転校生の容貌は完璧であった。

「この子の名前は夏神紫杏（かがみしあん）。アメリカからの帰国子女で、三歳の頃からアメリカにいた。名前は日本人だがハーフだそうだ。ご両親の希望で日本の生活を経験して欲しいとのことだ。転校生ではあるが……留学生に近い。仲良くしてやれ。じゃあ、夏神、自己紹介を頼む」

夏神という転校生は頷いて、先生が教壇から降りると今度は夏神

がそこへ上がった。

「今日からこの天明園学院に転校しました夏神紫杏です。先生がご紹介なされたとおり、私はハーフです。ですが、普通の日本人とかわらずに接していただけるとありがたいです。小さい時から外国にいましたので日本の文化に慣れないところもあると思いますが、これからどうぞよろしくお願いします」

アメリカに長い間居たというからてっきり片言か何かだと思ったけど、日本語は完璧だった。どこか冷めた言い方で、不安や期待を含んだ感じがしないのは帰国子女だからだろうか。

「わかったよ！」

「困ったことがあったら言ってくれ！」

初めて会ったというのに、がっしりと男子達のハートを掴んだらしい。隣の雀部もなにやら叫んでいるけど聞きたくない。

「可愛いな！　な！　おい、左座！　あんな子、手を出さない方がおかしいよな！　わかるぜ！」

聞こえた。

「……犯罪には走るなよ」

「なに言ってんだ、左座ぁ！　夏神って子、お前ばかり見てたぜ。いや、参った参ったなんという早業なり。学校に来る前に知り合いになるとは！」

「は？　俺、転校生に会ったのは今が初めてだぞ」

「何！？　ということは夏神はお前に気があるのか！　一目惚れか！」

「……あー、うるさい黙れ」

僕は雀部の変な推理が心底嫌になった。僕は嘘はついていないし、おそらく転校生が僕を見ていたというのは雀部の気のせいだろう。

……本当はデカ過ぎる雀部を見ていたのでは？

と言えば雀部は絶対、図に乗るので口に出さなかった。

「自己紹介も終わったから……あの席に座って頂戴」

「はい」

先生が指差すのは……僕！？　あ、僕の後ろの席ってことか。どうりで朝、僕の後ろに見知らぬ席があると思った。

凛とした表情で転校生がこちらに、正確に言えば僕の後ろの席に歩いてくる。

僕は転校生の顔を見上げる。すると、見下ろす彼女の目と僕の目が合った。一瞬どきりとした。けどすぐさま頭に靄のような物がかかった。

ん……？　どこかで見たことがある気が……するだけで思い出せない。この頃、こんな事が多いなあ。

第三話　昼休み

さすが帰国子女といったところか。
英語の授業では当てられた質問にすぐさま答え、本場の完璧なる発音に先生まで唸った。
クラスの連中は転校生夏神（かがみ）に、それぞれ尊敬とうらやみと欲望（男子限定）の眼差しを向けていたけど、僕は転校生を直視する気になれなかった。彼女の眩しさで目が焼きついてしまいそう。世界が違うんだ、住む世界が。
……それに、英語だけならまだしも、古典、数学、世界史……午前中の授業で転校生は当てられた質問に答えられなかったということはなかった。
古典なんかは英語圏にいたんだからわからないだろうというクラスの雰囲気があったのだが、それをことごとく裏切ってくれた。

「古典をムコウでも勉強していたのですか？」

という古典の先生の質問に、

「源氏物語ならば原文をすべて読み終え、訳をすることも可能です」

という、は？　な返答。源氏物語がどれくらい長いのか知ってるのか。
ありえぬ。一般的な日本人でも全巻読んだ奴はそうそういない。
……。
帰国子女だからって頭の良さをひけらかしていいわけがない！
空気読んでくれ！　能ある鷹は爪を隠してくれ！　一気に精神的ダ

メージを受けた輩は僕だけではないはずだ！
とか、自分の能力のなさを置いておき、一方的に思いながら僕は頭を抱えていた。
僕がいる場所は校舎の屋上だ。
人の落下防止のために高いフェンスがあり、ベンチが二つ、小さな花壇もある。
僕のほかには誰もおらず、ベンチの一つに僕は座っていた。
僕がここにいる理由は……察してほしい。転校生の周りに人の壁ができて教室の僕の席が占拠されてしまったからだなんて、人に訊かれても説明したくない。
購買で買ってきた焼き蕎麦パン、たこ焼きパン、メロンパン、特製シュークリーム、コーヒー牛乳を横一文字隊形に並べ、僕は腕を組んだ。

焼き蕎麦パン……この学校の購買では最もオーソドックスなパンだ。味は保障されている。
たこ焼きパン……購買の人気ナンバースリーに入るこのパンは急がなければすぐに売り切れる。ボリュームたっぷりで、味もよろしい。
メロンパン……これはもう普通すぎる。いい意味で。
シュークリーム……特製であるからか巨大だ。メロンパンよりも大きい。食べ方を間違えると大事故が起きる。
コーヒー牛乳……紙パックのスーパーでも売っている二百五十ミリリットルサイズ。

さてさて、どの順番で食べていこうか。
メインディッシュはたこ焼きパンでいいだろう。そしてデザート気分でシュークリームを食べよう。
とすると……焼き蕎麦パンから食べるかメロンパンから食べるかということだけど、やはり、焼き蕎麦パンからかな？

焼き蕎麦パンを手に取り、周りを包むラップを一部破いて食べやすく持ちやすい形態へ移行。ぱくりと一口。うん、いつも通りおいしいです。
たこ焼きの方もうまいです。
メロンパンは普通です。いい意味で。
喉が渇いた。コーヒー牛乳を。
シュークリーム、うまい。甘いなー。
……話し相手がいないのでパン四個とコーヒー牛乳など十分と経たぬうちに食べ終わってしまった。
今教室に戻ったとしても、どうせ席は取り戻せまい。あと二十分程度待って昼休みが終わらないと無理だろう。
「はぁ……暇だ」
一眠りするか、とベンチに仰向けに横たわる。

●

天明園学院高校を見下ろせるほどあるビルの屋上から、双眼鏡で学校内を覗いている人物がいた。
左手に持つあんぱんに齧り付き、少し咽て、その反動で手からあんぱんがこぼれて地面に落下していった。
「げほっ。ああー……勿体無い。ごほっ」
人物の体躯は小さく、百四十センチをぎりぎり超えるか超えないかといったところである。見た目が子供のようで、着ているスーツがあまりにも不似合いだ。
髪はブロンドのセミロングで、高い場所にいるからか風に靡いていた。

「……屋上に目標（ターゲット）発見。だらしない、食べたゴミぐらい片付けなさいよ」

平らで大き目の手すりに置いてある缶コーヒーを片手で開け、彼女は一口飲んだ。

「げえっ、ブラックを買ってしまったか！　苦いの嫌いなのに……」

そっと、口を付けたコーヒーを元の場所に戻した。

ため息をつき、双眼鏡を手すりに置いて腕時計を確認する。時計の示していた時間にいささか顔をしかめ、スーツの襟に装着されているマイクで連絡を取る。左耳にはイヤホンをしていてコードはスーツの中から出ていた。

「目標とまだ接触できないの？　彼は屋上にいるわ。他には誰もいないし、チャンスじゃないの」

……返事が来ない。

数十秒待っても連絡が入らない。予期はしていたが、まさかその通りになるとは運が悪い。

彼女はもう一度ため息をついた。

（あの子は潜入任務には向いていないって何度も言ったのに、組織はなに考えてるんでしょう。しかし、よりにもよって……）

彼女は双眼鏡を手に取り、再び屋上にいる目標――左座誠人を見つめる。

（目標があの時の少年とはね……もしかしてこれも“賢者の遺（し）

志”なのかしら？）

第四話　下校する、三人で。

「……ぐうっ……！」
「どうした左座」

机の端を力いっぱいに握り締め、自分の中の憤りに耐える。
放課後、雀部は今日も部活が休みなので僕と一緒に帰ろうとしているのだった。けれど、僕が机から離れようとしないので心配になったのかもしれない。

「……ここは僕の席だ、僕の席だぞ！　なのに何故、追い出さなければならない！」
「ああー、仕方ねーだろ。でも、夏神の前の席になったお前は幸せだ。あの子に前から配られてきたプリントを手渡しできるしな！」

休み時間に僕はクラスの連中によって教室を追い出されたのだ。転校生目当ての輩は僕に対してだけ、暴徒のようだった。

「雀部はこの席に座っていないからわからないんだ。これが未来永劫に続く……とは言わなくても、しばらく続くと思うと憂鬱になる」
「……？　何処が悪いんだ？」

お前は馬鹿か。

「天使のように可愛い子だぞ。天国に一番近いといってもいい」
「今日みたいなのが続くようなら、本当に天国に行ってしまうよ」

教室には昨日同様に、二人だけだ。終礼からさほど時間は経っていないのだけれど、他のクラスメートは、そそくさと逃げるように

帰った転校生を追いかけていったのだった。
……あれ？
「そういえば雀部は夏神さんを追わないのか？　お前なら真っ先に行きそうだけど」
「ふっ。俺はそこらの一般人とは目の付け所が違うんでね」
「……どういう意味？」
聞きたいかね、と鼻を高くして、雀部が自信満々に答える。別にどうでもいいんだけどな。
「彼女の机の中を見たまえ」
「偉そうにするな」
「今日の授業で使った教科書やノートなどが入ったままだ。彼女が置き勉をするだろうか、まさかそれはないだろう。完璧優等生な彼女が……ありえない。だとすれば、彼女は一端逃げたのだと考えられる」
完全に推理小説にでてくるような名探偵を気取っている。ロングコートや帽子、虫眼鏡……そんなのがあったら確実に装備してそうだ。
「逃げた？」
雰囲気があまりにも完成しすぎているので、僕は思わず乗って、聞き返してしまった。
「そう。もしそのまま自分の家に帰ったらどうだろうか。皆が皆ついて来るわけではないだろうが、一部の人間は興味に後押しされ、彼女の家まで来てしまうだろう。そして家の場所が知られ、他人が

いつでもやって来れるような状況になってしまう。学校であれだけの人気なのだ。プライベートでは静かにしたいはず。他人に、少なくともすぐに、転校初日に家の場所を知られてしまうことは避けたいだろう。自分に付いてくる人間を全員撒いてから、帰宅するのが安全だ。早くに教室を出て、誰もいなくなってから教室に戻り、帰宅……つまり彼女はこの学校内もしくは、その周辺にいるはずだ。時間が経てば戻ってくる。そこを私が！」

呆れて頬杖をついて僕は窓から遠くの景色を眺めた。

それはお前の勝手な都合のいい考え方だとか、優等生に対する偏見だとか、一般人が簡単に大勢の追跡を振り切れるわけないだろとか、それだったら転校生は結構な自意識過剰だなとか、つっこむ所やタイミングはあったのだけど、もはやあえて何も言わないでおこう。

ふと、無音であった廊下からコツコツコツ、という足音が。次第に大きくなってくる。どうやら近付いているらしい。

雀部が視界から消える。

目にも留まらぬ高速の動きで、雀部が廊下に飛び出していた。そして何かを確認すると同じ速度で戻ってきた。

「私の推理どおりのようだ、左座君」

まさか、教室に転校生が帰ってきた。

本日の元凶である転校生は今朝見たのと変わらない。転校生の容姿は何かの間違いであって欲しかったものの、悔しいけれど彼女が可愛くないとは言えませぬ。

雀部の変態じみた視線をもろともせず（そういうのに慣れているのだろうか）、無言で彼女の席に座った。

手に持っていた鞄は空で、そこに几帳面に方向性などを考慮しながら荷物を詰め込んでいく。

僕の使っているのは抱鞄だけれど、彼女は前の学校から使っているのかネービーとグレーの色の肩にかけるタイプのものだった。
学校から支給されるこの鞄は相当使い勝手が悪いので、別の鞄を使う生徒がほとんどだ。このクラスで使っているのは僕ぐらいだ。学校鞄が来年から見直されるらしいけど、もっと早くやってもらいたかった。
さっさと荷物を入れた転校生は、席を立って教室を出て行く……はずだった。僕の予想では。

「あなたが左座誠人さんですよね」

正直驚いた。隣の雀部も同じく。なにせ、転校生が自分から口を開いたことはこれが初めてだったからだ。
ギクシャクしながら僕は、

「……え、あ、あ、ああ。うん。そそ……そうだけど」

動揺を隠しながら（のつもりで）答えた。……隠しきれていないけれど、このときはこれが精一杯だった。

「一緒に帰りませんか？」
「うぎゃぁぁあああ！」

雀部の絶叫が学校中に染み入る。声がうるさくて僕は反射的に両手で耳を覆い隠した。

「ありえん！　左座！　お前一体どんな手を使いやがった！」
「雀部さん？　よければもご一緒に」
「え、いいの？　うっしゃぁああ！」

彼女にとってすればモブキャラの一人であるはずの僕や雀部の名前を覚えているとは、一体どういうことだろう。僕なんて二年になったいまでもこのクラスの全員の名前を覚えたわけじゃないのに。

おっと、自分と比べてしまった。転校生と僕ではスペックが違うのだから仕方がないよそれは、うん。

そんなこんなで転校生と三人で下校することとなった。

第五話　まさかの展開1

「か、夏神ちゃん、いや、夏神さん。えと……」
「ふふ。呼び方はどのようなものでも構いませんけど」
夏神の柔和な笑みに射抜かれた雀部は何故かよろけて顔を両手で覆い隠した。乙女か。
いちいちモーションが大きい。
「紫杏ちゃん！　って呼んでいいかな」
「はい」
夏神が微笑みながら答える。
「あ、あと、友達になってください！」
九十度に腰を曲げて、深々と頼み込む。
「はい。喜んで。雀部さんが友達第一号ですね」
ひゃっほう、とか叫びながら雀部は住宅地路地を飛び跳ねまくる。そしてやって来た車にクラクションを鳴らされ、運転手に怒鳴られた。
隣の夏神を見ると、楽しそうだった。そういえば……学校では一切笑っていなかったな。
雀部は……言うまでもなく。ニヤニヤが収まらずに変態にしかみえない。
しかし雀部のハッピータイムも終わりだ。何故なら、雀部の家に到着してしまったのだ。

名残惜しい雀部は家に入らず、

「やっぱり、紫杏ちゃんの家まで護衛します。近頃この一帯は物騒ですから！」

「いや……それはちょっと……引きます」

「ああ、うん、そうだよね。ごめんな。じゃ、じゃあまた明日学校でー」

大きく手を振る雀部を後にして、僕は歩き始めた。それについて来るように夏神も隣に並ぶ。

さて。僕は雀部のように会ったばかりの人に対して気軽に話しかけることができるほどの技量を持ち合わせていない。

優等生のほうも結構人見知りタイプなのか、数分間まったくの無言のまま歩き続けていた。

僕としてはすぐにでもこの気まずい雰囲気から逃げ出して自転車で駆け抜けたいのだけど、夏神はどこまでも僕と一緒に歩む。

空気を読んで、「家はこっちだからそれじゃ、また明日」とか言って別れてくれればいいものを。

……さすがに耐え切れないよ。

「あの」

「何でしょう」

「家はどこにあるんだ？　いや、そういう意味じゃなくて、歩いて行くには遠い場所に家があるんだなぁと思って」

夏神は首をかしげて、

「知りませんけど」

と悪びれた素振りもなく言った。

「知らないって……」

そうして会話が再び断絶。

ここは二人が通るには広すぎる。車が二台ぎりぎりで通れるかといった狭い道路ではあったけど、こうも広く感じることは初めてだ。

なんだか広い空間に二人だけで、ぽつんと取り残されてしまったかのような感覚。錯覚。

自転車で片道二十分程度の道のりだけれど、歩いて行けば一時間ほどはかかってしまうこの道。遠い。

学校を出てもう四十分ほど。日は暮れて、街灯がぽつぽつとあるだけなので辺りは暗い。

二人のはずなのになんで孤独を感じるんですか。寂しいです。

隣をちらりと見やる。

夏神は夜空を見上げていた。僕もつられて見上げる。

月が二つ。それ以外には何もない。星は見えない。

大きい月と小さな月。

大きな月は小さいほうの何倍もある。満月は過ぎたとはいえ昨日のことなので今夜も大きいまま。

「ねえ。左座君」

「え。何？」

「月って好き？」

「いや……別にどうでもいいって感じ」

唐突に聞かれても自分は曖昧に返すしかない。

「……そう」

夏神は上げていた顔を下げて、視線を前に向けた

まずった。好きだって言って、ここで少しでも好感度を上げておくべきだったか。って好感度を気にするとか……雀部みたいなことを考えるとは。

「おーい、誠人」
「どこへ行く気なの？」
「あれ？　父さん、母さん」

気づかなかった。僕はもう家に着いていたらしい。呼び止められなかったら僕はどこまで歩いていただろう。
両親は玄関に並んで立っていた。いつもより遅くなったから心配したのだろうか。僕は高校生だと言うのに。

「あ、夏神さん。ここ、僕の家だから……」
「そうなの？」

隣にいる夏神に気づいた二人はこっちまで駆けて来て、僕の予想外の行動をとった。

「あなたが、夏神紫杏ね？」
「はい」
「ようこそようこそ。さあ、こっちです」

父さんがドアを開けて家の中へ手招きする。
あれれ？

「えっと、父さん？　何で夏神さんのこと知ってるんだ？　しかも家に招くっていうのは……」

父さんは自分の額を手でぴしゃりと叩いて、

「そういえば、伝えるのを忘れてたな。夏神さんはうちにホームステイということだ」

……何だって！？

「……何だって！？」

僕は雷に打たれた気がした。そして硬直した。

ええええええええええええええええええええ！？

まさかっ！　こんな展開があるものか！

全身から変な汗が噴出してきた。まるでサウナにいるかのような量で、顎から水滴が落ちるほどだった。

「かっ！」

首を横に振って自転車を所定の場所に置き、僕の頬をつねってみた。

痛い。

いや、これではまだ夢ではないという証拠にはならない。

玄関にあるコンクリート製の柱を思いっきり蹴りつけてみる。

……っ！

脛を打って悶絶。

ゆ、夢じゃないだって？　どーゆーことだっ！

「誠人、何をしているんだ？　早く入らないか。いまから歓迎パーティを始めるぞ」

「え、あ、うん」

第五話　まさかの展開１（後書き）

久々の更新なので二つ分。
暇な時間がなくなってきているので更新は遅くなるかと。

第六話　まさかの展開２

「では。夏神紫杏さんのホームステイ初日を祝して、乾杯！」

父さんがそうは言うものの、まったく盛り上がらず。いつも適当な料理しか作らない母さんも今日は力を入れたらしくご馳走だ。

「いただきます」

と乾杯を無視し、僕と妹と夏神は食べ始める。

母さんは乾杯の形はしたが、元々ノリのいい方ではないので「いただきます」で食べ始めた。

一人だけテンションのちがう父さんは取り残され、恥ずかしそうに椅子に座る。

「あのさぁ。ホームステイで人が来るっていうの聞いていないんだけど」

妹が隣に座っている母さんに向けて言う。

「そうそう。僕も聞いてないよ」

「ごめんね。言うのを忘れていたのよ。でもうれしいでしょう、こんな美人さんだなんて」

「ああ、うれしいなあ」

父さんが答える。その後自分に対してではないと気づいて、恥ずかしさを紛らわすためにビールを一気にコップ一杯分飲み干す。

「夏神さん、これからよろしくね」

「一時の間だけとはいっても、その間は家族のようなものだからな」
「はい。こちらこそ」
「夏神さんの話が聞きたいわ」
「私の、ですか」
「帰国子女なんでしょう。向こうでの暮らしとか聞きたいわ」
「わかりました」

なんだかんだで今日の夕食は会話が弾んだ。

夕食後、僕は夏神を二階に案内した。使われていない空き部屋がひとつあるのだ。そこが夏神の部屋になるらしい。
ドアを開けてやるとそこにはベッドやタンスなどの家具が一式揃っていた。確か庭にある物置に入っていた家具だ。

「じゃあ、僕はこれで。荷物は父さんたちがもう運んだっていうから、部屋の中にあると思うよ。わからないことがあったらいつでも訊いて」
「ありがとう」

夏神が部屋に入るのを確認した後、僕は自分の部屋に逃げ込んだ。
電気をつけ、ベッドに飛び込む。布団に顔を突っ込んで叫んだ。

わああああああああああああああ！
これはどういうことだ！　なんという幸運！　とてつもない美少女が家にいる！

「くくく……」

雀部は相当羨ましがるだろうな。いやまてよ……よくよく考えればこれは幸運か？
席が近いというだけであれほどの迷惑を被ったんだ、もし同じ家に住んでいるなんてことがばれたら……どうなる？
ぞわっと一瞬鳥肌が立った。もしかすると……やめやめ！

首を振って僕は心の中を一旦リセットする。落ち着こう。
しかし……不自然じゃないか、転校してきた美少女が自分の家に泊まるだなんて。何か裏でもあるのか？　心当たりは……ないなぁ。
顔を上げてベッドの上で胡坐をかき、両腕を組んで目を閉じる。なんか引っかかるなあ。なんだろ？
ああそうだ。夏神を前にどこかで見た気がするような……しないような。うーん。

●

「予定とは少し違いましたが、目標と接触しました。そしてこちらは予定通り、目標の住む家に潜入成功。今夜にでも行動を起こします」
『今夜って……早くない？』
「悠長なことを言っている場合ではありません。すぐにでも目的を達しないと、奴が始末しに来る可能性があります」
『一応私が見張ってるからしばらくは大丈夫だとは思うけれど』
「命が掛かっているということをお忘れなく」
『そうだったわねー……忘れちゃいそうだった。だって結構あの子私のタイプだし、そ』
「……通信終了します」

第七話　まさかの展開３

僕はカーテンを開いて外の景色を眺めていた。
飯は食べた、風呂には入った、寝巻きに着替えた、歯を磨いた。本日は見たいテレビ番組はなし、宿題もなし。
布団もセッティング完了。寝る準備万端。悩むことはやめにして、今日はもう寝よう。
ぐっすり眠れるだろうな。とか思いつつ今日のイレギュラーを忘れようと、無意識に努める僕がいた。
でも忘れさせてくれないのがこの世の理なのかね。

コンコンとドアをノックする音。

「夏神です」
「あ、どうぞ……」

入ってきた夏神はパジャマ姿で、そのパジャマには某クマのキャラクターが沢山居座っていた。
ちょっと予想外の格好で僕は不意打ちを食らったけれど、平静を装ってベッドに腰掛けた。

「何の用だい？」
「その……あの……」

夏神はドアを閉め、内側から鍵をかけた。そして電気を消す。月明かりが窓から入り込んで部屋を照らす。……どへっ。おいおいおいおいおいおいおい。
なにやら夏神はもじもじしている。こ、これはどういう展開ですか、どこぞの小説のようなありえん状況です。

僕の前まで歩いてきた。夏神は、あろうことか僕の体を押し倒した！

夏神の吐息が僕の顔に掛かるほどに、顔と顔の距離が近い。思わず僕は生唾を飲み込んだ。

ひんやり。

首の辺りが冷たい。まるで金属が僕の首元にくっついているかのような冷たさだ。

「左座誠人。動くな。こちらが許可しない限り、発言を禁ずる。もしこれを破った場合、お前の首と胴は永遠に離れたままとなる」

「え？」

突然、夏神の表情が消え、口調も刺々しく殺気が混じったようだった。

「どういうこと？」

「しゃべるなと言っている。これが目に入らないのか」

夏神の右手に……ドスみたいな短刀が握られ……て？　って、え？　まさかさっきのひんやりした感覚は。

「……！」

鈍く銀色に輝く刃は偽物とは思えないほど存在感を放っている。

僕は声を出そうとしたけど、出ない。出してはいけない。

「お前に訊かなければならないことがある。もし大声を出して助け

など求めたら……わかっているな」
僕は口を閉じたまま首を上下に振る。
「よし」
夏神は僕を押さえつけるのを止めて、近くの椅子に座った。僕は彼女が握り締めていた肩を摩る。右肩がじわじわと痛い……本当に女の子の力なのか？
夏神は無表情で、でも威圧感は変わらずに、訊き始めた。
「お前は言葉を発せずに私の質問に答えろ。まず一つ目。お前は昨晩の出来事を覚えているか？」
昨晩のこと、昨夜、昨日……何かあったか？　何も思い当たるところはない。どういうことだろう、学校から自転車で帰るところまでは覚えているんだけど。
僕は首を横に振った。
「あれ程の事に遭遇しておいて覚えていないだと？　……あまりのショックに忘れてしまったということも考えられなくもないが……」
夏神は足を組んで、顎に手を置いて少し思考する仕草をした。
僕は何のことを言っているのかを訊くことさえできず、ただ黙ってベッドの上に座っているしかない。
「それでは次の質問だ。ここからそう遠くない山中に、廃棄された遊園地があるのは知っているか」
別に何か気に障ったわけでもなしに僕の体が跳ねた。測らなくて

も脈拍が相当上がっているのを感じる。
これは、僕が驚いたのだろうか。にしては心当たりがない……あそこは僕の、子供っぽく言えば秘密基地のような場所だ。それだけで、何か隠すことがあるわけではない。
首を縦に振る。

「あの場所のことは知っている、か……」

僕の視線が床に向いていたので元に戻すと、夏神がライオンさえも怯えあがってしまいそうな眼光で僕を睨んでいた。
自然と体が夏神から距離を取ろうと、ベッドの端まで移動してしまう。
その途端に夏神が椅子から立ち上がって、つかつかと僕へ向かってきた。
夏神が手を動かした瞬間、僕は切られてしまうのだと思って反射的に手で防御体勢をとって目を閉じた。
そんなことで短刀を防げるわけはないのだけれど、わかっていてもやってしまった。
しかし、攻撃は来ない。
目を開くと、夏神は短刀を持っていない方の手で携帯をいじっていた。
なんだ、殺されるわけじゃないのか……？　わずかな安心とともに、ちょっぴり恥ずかしい。
何度かボタンを押して夏神は携帯を耳に近づけた。

「こちらアプロディテ。問題が発生しました。目標が……逆向性部分健忘と思われる症状が出ているようです。昨夜の記憶について消えているようですが、どうされますか」

携帯から相手の声が漏れてきてはいるが、なんと言っているかま

では把握できない。
アプロディテ？　コードネームなのだろうか。ともすれば夏神は……何かの組織の方？

「了解。かわります」

と言って、夏神は僕に携帯を渡してきた。どうも理解できないけど……逆らうことは止めたほうがいいだろう。
僕は携帯を受け取って耳にあてがう。

『ヒャッホー、左座君元気ー？　うちの娘が無礼なことしませんでしたかね？　ごめんね。まだ躾がなっていなかったみたい』

てっきり、野太い渋い声の男だろうと思っていたから不意打ちを食らった。ドラマとか映画とかでは指令を出しているような役の人は、大体がそういう声だったから。
でもこの声は明らかに女性だった。某スパイ映画で出てくる主人公の上司みたいに老女じゃない……アニメ声的な……。
そしてここにある雰囲気をぶち壊しにする口調も、期待外れ……と、この状況で何を期待してんだか。

『え？　シカト？』

こちらは声を出すなと言われているのでどうしようもない。

『ああ、我が娘がちょっと何か言ったのかな？　大丈夫ですよ。小声で話すくらいで彼女は左座君を殺したりしませんから。まあ、大声出したらどうなるか知りませんけどー』

「えっ……はあ、はい」

とりあえず、相槌を打っておく。横目で夏神の様子を確認するがこちらを見下ろしているだけで、どうこうしようという感じはない。

『左座君もいろいろとわけがわからないでしょうけど、とりあえず一つ確認しておくわね』

「はい……」

『本当に昨夜のことは覚えていないのね？』

「なんのことだか……わからないです」

『ふーん。じゃあ、思い出させるしかないわ。携帯電話を顔から離しなさい。大きな声出したら駄目よ？』

言われたとおりに近づけていた携帯を離した。

何か起こるのだろうかと携帯の画面を見つめていたのだけど、別に変化は……

「えっ……うわぁっ……ぷ」

声を出し終わる前に夏神に口をふさがれてしまった。

僕は画面に何かが映ったり、変な音が出たりするのだろうと予想していたので、あまりのことについ声が出てしまう。

携帯電話の画面とボタンから二本の、そう、指ほどの太さの白い触手のようなものが、生えてきたのだ。

一体どうやったらこんなことが出来るのだろうか。

マジックとも思えない、ならば触れられるのだろうか……でも、僕にはそんな勇気はありません。

携帯をベッドの上に手放して距離を取るために後ずさると、夏神と衝突した。そして瞬時に僕を羽交い絞めにし、ベッドに押し倒す。

「危ないものではない。声は出すなよ？」

携帯から生えた触手は伸びて近づいてくる、僕は動けない、声が出ない。額に汗がにじみ出る。
ついに伸びてきた触手が僕の顔にまで近づき、頬に触れた。
……何の変化もない。一応、触れられている感触はあるけれどもそれだけだ。
夏神は羽交い絞めを解いて携帯のほうへ向かう。
携帯から出ている触手のもう一本を掴んで自分の額へとくっ付けた。

「準備完了です」
（はい、ＯＫねー）

先ほどの女性の声が聞こえる。けれどもこれは聴覚を通じてのものじゃない、頭の中に直接響いているような感じ。テレパシー？
（じゃ、リリちゃんの記憶を借りて左座君にショックを与えて、昨夜の記憶を呼び起こさせるから）

夏神が頷いてこっちを見る。

「どういうこと？」
「体験してみたほうが早い」
（説明するのが面倒くさいのでちゃっちゃとやっちゃいましょう）

えーと、全くもって意味がわから、ない……んです……けれ……
あ、れ。

第八話　プロローグ，１（前書き）

視点が変更されます。二話ほど。

第八話　プロローグ，1

……ここまで強いとは。

私が予想していたより、実戦で見ていたのより遥かに高い戦闘力。いつもあいつを見ていたはずだが……力を隠していたなど気付かなかった。

誰よりも近いにもかかわらず、ボロを出す可能性が最も高かったのにもかかわらず、気付けなかった私に全責任がある。

『リリ！　大丈夫なの！？』

無線機に繋いだイヤホンから上司の声が聞こえる。この人まで任務中に私の本名を使うとは何を考えているのか。ニックネームである分、あの男よりましではあるが。

戦闘服の襟の部分にマイクが付いているのでそれに向けて私は返事をする。

「……大丈夫です。現在目標は自分の後方に位置」

『このまま行くと……山中に追い込む気かしら。でもそんなことをすれば自分が包囲されることぐらい予測しているでしょうに』

「……」

彼女の推測には頼れない。信じて、今まで何度危険な目にあったことか。

こんな状況だと己の勘というものにしか頼ることができない。勘は何の根拠もない推測ではあるが、実際に生死を分かつのは勘の鋭さで勝った方だ。

これは今まで戦い続けてきて私が獲得した真理である。

私はある男を追っている。

本名、舞草兵駕（まいくさひょうが）。私の所属している組織の元構成員であり、私の元パートナーである男。私だけでなく組織をも裏切った殺人者。コードネームは海藤玄馬（かいどうげんま）であった。

殺人者なのは私とて同じ。しかし私たちの組織が暗殺するターゲットはすべて犯罪者である。

海藤……いや、舞草は何の罪もない一般人をその強大な力を持って殺戮している。連続無差別殺人事件と報道されている事件がそれだ。

何の目的があるのかはわかっていないが無視しておいていいことではない。

私は舞草を追っていた。

そう、追っていたのだ。つい先ほどまでは。

今では立場が逆転してしまい、舞草に私が追われている。

最初に舞草の潜伏場所を発見したのはよかったが、襲撃のタイミングを読まれていた。罠を張られ、私と他のメンバーとが引き離されてしまった。

孤立した私一人を狙って舞草は襲ってきたのだ。

衝撃波を生み出すことが奴の能力だと思い込んでいた私はその際に反撃に出たのだがやられてしまった。見ての通り敗走中なのが私だ。

何故危険を冒してまで私に攻撃を仕掛けてくるのかと思ったが、どうやら奴の狙いは私自身らしい。でなければ合理的な舞草がそのような行動に出るとは思えない。

ならば奴は逃げている私を追い詰め、止めを刺そうとするだろう。そこで返り討ちにすればいい。
舞草の性格が演技だったということもあるが、私の勘はそうではないと判断した。

私は駆け抜ける。
今日は不気味に存在するあの月も両方満月だからか視界が良好だ。
不規則に並んでいるように見えて実はある程度並んで立っている木々を避けながら山を登っていく。
舞草が時折後方から衝撃波を放ってくる。だがそれは私の横に立っている木を吹き飛ばすだけで直撃はない。
衝撃波に正確性がないのは演技でもなんでもなかったらしい。そうでないなら既に当たっている。

気にかかるのは接近戦で起きたあの不可解な現象。私の短刀の刃が圧し折られた……違う。消去(けしさ)られた現象。
アレの説明が付かない限り不用意な接近戦は控えた方がいいだろう。
持ち合わせている武器はサバイバルナイフが一本、ワイヤーが数メートル分、ドア爆破用の爆薬が数百グラムとその信管。
心もとないのは確かだがどうにかするしかない。
私の能力のクールタイムは過ぎている……が連発しての発動は不可能なので使いどころは考えねばならない。
首だけで後ろを振り返る。舞草との距離は変わっていない。余裕のある今のうちに迎撃策を用意するしかないだろう。
尊敬の出来ない上司だが彼女なら私の居場所を逐一把握しているはずだ。仲間が来るまでの時間を稼げば私の勝ちとなる。そのためには舞草を一定時間足止めする必要がある。
どこがいいだろうか、などと私が作戦を練っていると突然、木々が無くなって視界が開けた。

……しまった。崖だ。

前方不注意だった。止まれずに崖から落下する。崖は直角より鋭く切り立っており、しがみ付く場所などは無い。

あれだけあった木が下には全く無く、人工的に作られた場所のようだった。クッションとなるものはなにもなく、叩きつけられれば即死するのは火を見るより明らか。

能力を使うしか……ない！

「戦闘時間を一秒に設定。カウントダウン開始……」

間に合え。もう十メートル程度しかない。

「三、二、一、零！」

両足で地面に着地する。足が数センチほどコンクリートにめり込んだが私はどうということはない。だがぎりぎりだった……。

殺気を上方から感じて、ハッとして上に首動かした。

視界に捕らえたのは手を振りかぶったまま落下してくる舞草。やはり舞草も崖から飛び降りて追撃してきている！

私は足がめり込んでいることなど気にせずに力をいれ、蹴った。予想どおり宙には飛ばずに地面と平行に飛んでしまった。でも、これでいい。

背中が風圧を受ける。衝撃波が地面に命中したときの余波に押され、予測着地地点より離れる。

私は体勢を捻り、足を地面に擦り付けるようにして慣性で動く自分の体を停止させる。

「決まったと思ったが……さすがだよ。伊達に私の相棒であったことはある」

自分を他人より上だと決めつける……私の嫌う点に変化はない。

「何故自分が狙われているのか、わかっているか？」

……舞草は私が能力を使ったことに気付いていないようだ。クールタイム分の二十秒を稼がせてもらう。

「簡単なことだよ。貴様を殺れば“賢者のいし”は私を含め残り二人となる。となれば、あと一人だ」

賢者の石？　違うな……賢者の石は確かに存在するが私や舞草を指すものではない。

石、医師、意思、遺志……しっくりくるのは後者の二つか。だがどういう意味だ？

「能力も使わずに此処まで逃げ切れるとはさすがと言っておこう。だが、そうやって逃げられるのももう御終いだ」

もうすぐ二十秒経つ。目的は達成した。あとは舞草の能力さえわかれば反撃に出ることも可能だ。

「無差別連続殺人事件？　だったか、貴様らの組織が情報統制を行ってくれたおかげでやりやすくなったよ。奴らを何人殺してもその事件にすり替わる」

自分の先日までいた組織だというのによそよそしい。初めから仲間意識などなかったということだろう。

「いい加減諦めたまえ。一瞬で苦しまず殺してやるから、な？」

「……！」

口調が同じだ。私がまだひよっこの頃に……私をあやしていたものと。

私は腰に装着しているナイフを引き抜こうとしたが、ここはまだ動くべきところではない。反射的に動きそうになった体を押しとどめる。

「相変わらず無愛想だな」

まだ兄貴面か……！

舞草が腕を大きく振り上げた。特有の攻撃モーションののち繰り出される一撃は装甲車でさえ一発で破壊する。

振り下ろす直前に私は横っ飛びに飛んだ。

舞草の攻撃は速過ぎるが故に放った後の方向を変化させることが難しい。かわすには当たるか当たらないかというタイミングで射線から離れるのが最も有効な避け方だ。

ヒュオ！

と私の戦闘服を衝撃波が掠めた。服に切れ込みが入り、穴が開く。

「ハッハァ！　よく避けたなぁ！」

舞草のこんな声を今まで聞いたことはなかった。戦闘を楽しんでいるかのような、狂戦士にでもなったかのような高笑いの混じった声。

舞草はさらにもう片方の手を私に向ける。次なる攻撃。
放たれた衝撃波は初撃の様なピンポイント攻撃ではなく、広範囲に向けられた逃げ辛いものだ。
辛うじてもろに喰らってしまうのだけは避けられたが、代わりに地面が吹き飛び、その高速の石礫を数発受けてしまった。
こう一方的にやられているのでは能力を探ることも反撃の機会を得ることもできない。
どうする？
手持ちの武器で相手を探ることの出来る回数は限られる。一二回が限度だろう。
しかし出し惜しみして死んだのでは元も子もない。
舞草を中心として、衝撃波を誘いやすい距離を走るように様子見しながらナイフを引き抜き、ナイフの柄にワイヤーを括り付ける。
さらに体を屈めて足元の石を一つ拾い上げる。
右手にナイフ、左手に石を持ってチャンスを窺う。舞草は攻撃を放ち続けているがその正確度の無さから命中することはない。無駄なことを繰り返すのも変わらない。
一体何処からが演技の海藤で、本性の舞草なのか……判別するには余りにも海藤といた時間が長かった。
私はかぶりを振って、頭の中にいる優しい海藤を思考から追い出した。
舞草を睨みながら左手の小石を横投げで投げつける。能力を使用していないので当たっても死にはしないだろうが、舞草は能力を使用してそれを防いだ。石の砕ける音がした。
その隙にもう一歩ほど舞草に近付く。地を蹴って加速し、舞草の後方へ回り込む。
本命である右手のナイフを舞草へ、私の一番命中率の高いアンダースローで放った。ワイヤーが一直線の軌道を描く。
舞草は振り向きざまに能力を発動させる。
その時、音は無かった。衝撃波で防いだのなら小石のときと同じ

く音が出るはずだ。ただ、ワイヤーの先についていたはずのナイフは消滅し、舞草が無傷であったという結果のみ。

……掴めそうだ、あいつの能力が。あともう一手あれば――

――めりっ。

「がっ！？」

胸の内側から聞きたくも無い音が全身に響いた。

当たった……そん、な？

ちらりと見えた舞草の顔は……不敵に笑っていた。

第九話　プロローグ，2

私には心の中で疑問を言葉に変換する暇さえ与えられなかった。
舞草の衝撃波を正面から胸に受けた私は一瞬視界が真っ白になり、意識をほんの僅かな間だけだが失ってしまっていた。
覚醒したときにはもう遅く、背中から何かの物体に激突した。受身も取れずに全身叩きつけられ、更には上から大量の何かが覆いかぶさってきたのだ。
顔面と胸にそれが当たるのだけは避けられたがどうもこの状況は最悪である。
出ようと思えばそれほど重くは無いので手で退かせられるだろう。しかし先に一撃喰らってしまった以上、圧倒的にこちらが不利。出た瞬間に死ということもある。
望むなら私に被さって来たこの物体――質と重さ、形状から判断して鉄パイプ――がどれぐらいの規模で広がったのかが知りたい。
数メートルにしか広がっていないなら隠れていても同じ、逆に広範囲であれば近付いてきた舞草の不意を突く事もできるか。

「貴様はその程度なんだよ、リリアーヌ！」

……五月蝿い。

一度大きく深呼吸する。
ズキリと胸が痛む……肋骨が折れたようだ。折れて肺に突き刺さっていないようだから、ただ罅が入っただけかもしれない。
舞草のカウンターが即死級の威力を持っていなくて助かった。
怪我は……一箇所か。案外ダメージは少なかった。実際は擦り傷や切り傷は数えられないほどあるが、あえてカウントすることはな

い。
手持ちの武器を再確認。ほぼ減っていないワイヤーと爆薬数百グラム、信管、導火線。
直接武器となるナイフを失ったのは痛い。ワイヤーで絞殺することも考えるが舞草と私の力の差がありすぎるために、不可能だろう。
さて、どうする。
私が思いあぐねていると、

「はぁ……はぁ」

という他者の荒い息遣いが聞こえてきた。

舞草か！？

……にしてはおかしい。舞草は息切れするほどに能力を使用しただろうか。組織にいた頃の体力はその程度ではなかったはずだ。
聞こえてくる方向も変だ。私の後方から。
一瞬で舞草が移動したということは考え難い。高速に動けるなら今までに私を仕留めるチャンスはいくらでもあった。
とするならば私と舞草以外に、もう一人いるということだ。戦闘時における呼吸法が出来ていないので一般人か。人の気配には敏感であると自負していたのに、今の私は一般人の存在に気づかないほど追い詰められていたのか……。
もしかすれば舞草の仲間ということも……考えられなくも無い。だが、この状況から脱するには利用するしかあるまい。仲間でないのであれば鈍感な舞草は、おそらくこの第三者には気付いていないだろう。
これは賭けだ。私の勘が生き残るのに値するものなのかどうかの。
私は勢いよく立ち上がった。
鉄パイプがガラガラと私の上から落ち去っていく。三人目は私を

目視しただろう。

どちらからも攻撃は、こない。

舞草の姿は思いの外、遠くにあった。数字として見ると五十メートルほどはある。

「お前は誰だ」

三人目は即答しない。

この間は答えることを躊躇しているのではなくて事態が呑み込めていないものだろう。

「……僕は」

「黙っていろ」

私は何か発言する前に制した。舞草がやや速い歩調で近付いてきている。三人目を有効に使うには、その時まで三人目の存在に気付かせてはならない。

「今のは痛かっただろう。抵抗しなければこんなことにはならなかったんだぞ」

「……」

私は返事をしない。

「屠るくらい簡単なのだ。もう一度言おう、諦めろ」

「……」

舞草の歩みは余裕を見せて、ゆっくりとしたものだ。距離もほと

んどつまらない。

（死にたくはないな？）

私は小声で後方の人物に問いかけたが、黙ったままだ。

（死にたくはないな？）

もう一度。

今度は反応があり、ああ、という相手の肯定が取れた。これで三人目はただの一般人であることがハッキリした。

（……ならば手伝え。合図したら走れ）

「どこへ？」

確かに、それは訊いてくるだろう。本当ならば舞草に突っ込んで行ってもらうのがベストなのだが、一般人がそんなことはしないだろう。

今重要なのは三人目が存在しているということであり、それ自体が“囮”として十分な威力を持つ。

（どこでもいい）

「出入り口は閉じていてここからは逃げられないんだぞ？」

（……何処でもいいと言っている）

私は少し首を動かし、横目で三人目を見据えた。

顔は良く見えないが男子の制服を着ていることはわかった。学生なのか。

「お？　まさかそこに誰か居るのか？」

ハッとなって首を元に戻す。ばれただろうか……いや、舞草の嘲っているような声音からしてからかっているのだろう。だがこれ以上近づかれれば三人目が見つかるかもしれないし、私の能力発動する隙もなくなるかもしれない。

「戦闘時間を百八十秒に設定。カウントダウン開始」

わざと舞草に聞こえるよう大声で言う。後ろの奴はこれが合図であると気付いてくれるだろうか。

「三、」

「チッ。能力か」

舌打ちをして舞草がこちらに突っ込んでくる。

「二、」

ギリギリだ、ギリギリまで舞草を引き付けなければ。

「一、」

舞草が振り上げていた腕を下ろした。そして能力である衝撃波が放たれようとする。

「零！」

舞草の視線が別の方向にずれた。囮は成功したのか。若干舞草の能力発動が遅れた。

狙い通り……私は地面に転がっていた鉄パイプを二本拾い上げ、

その場から飛び退く。
直後に叩き込まれた一撃。
本気の攻撃だったらしく、前のものとは比べ物にならないほどの風圧。私の体が自然と飛ばされて行く。
あの少年は、と飛ばされながら探してみると地面を転がっている。どうやら無事だったようだ、よかった……。
着地すると私はすぐさま物陰に隠れ、舞草の様子を伺う。

「小僧！　貴様は誰だぁあああ！」

あの少年はやはり見つかったか。もし隠れてくれていればもっと優勢な状況ができたのだが、これ以上は望まないでおこう。

「貴様も組織の者か！」
「……そ、組織ってなんですか？」

今にも舞草が少年を殺してしまいそうだ。仕方がない、行かなければならない。
私は地面を蹴り、空中で一回転しながら少年の目前に着地した。

「そいつは違う……」
「違う？　ただの一般人だとでも言うのか？　こんな場所にそんな人間が居るとでも？」
「こんなヘタレ……組織にはいない……」
“お前みたいなヘタレ、組織にはいないぞ？”
挑発の意味をこめて、過去の舞草の言葉を使って否定する。
「確かにそうだ。アハハハハハハ」

舞草は笑う。

「ハハハ……ならば、殺しても構わないということだな？」

口調が重く鋭く変わった。挑発に乗ってくれたか、これで少しは有利になるだろう。頭にきた方が負けるのはどの勝負事でも一緒だ。

「……逃げ回っていろ」

私はそれだけを告げると、すぐさま舞草に向かって突進した。

「近距離戦闘しかできない貴様には私を倒すことなどできるはずがなかろう！」

舞草は余裕なまま、一歩も動かない。

「あとは貴様の戦闘継続時間が切れるのを待って嬲り殺しにしてやるさ。その小僧と一緒にな！」

私は左手に持っていた鉄パイプを舞草へ思いっきり投げつけた。一撃で仕留めることができるよう、私の最大の力を込めて。

「ふん！」

舞草が腕を横に払い、発生した衝撃波で投げた鉄パイプを弾き飛ばした。

その間に私は舞草にさらに接近し、もう一度鉄パイプを投げつける。

舞草は右手を鉄パイプに向けて翳す。すると鉄パイプが粉々に砕

け散った。
まだだ。これはまだ衝撃波によって攻撃を防いだにすぎない。舞草の隠している真の能力を発動させたわけではない。
迎撃から攻撃への転換が速いのが舞草の長所だ。私は過去の経験からしてこの後間髪入れない反撃が来るはずとわかっているため、攻撃が来る前に避けることは容易だった。
跳んで、空中で一回転して建物の屋根に降りつく。私の立っていた場所は抉れ、アスファルトの下にある砂石が露出していた。予測通り、である。

「むう……ちょこまかと！」

舞草が私に向けて衝撃波を横一文字に放つ。
だが、この距離は舞草の能力の有効射程から数メートルだけ離れている。元々精密度のない攻撃ゆえ、避けるまでもなく衝撃波は私から逸れていく。
……ハズだったのだが。衝撃波は思ったほど軌道が変わらず、私は回避を余儀なくされた。
前へはもう間に合わない。私は後ろへ退いて建物の下に飛び降りる。
衝撃波はそのまま進み続け、進路上にあった観覧車に直撃した。

「……はっ？」
「なっ！」

観覧車は衝撃波を受けた部分から二つに分かれ、上部が落下し始めていた。その落下地点に、先ほどの少年がいる。少年は呆然としていて避けようとする素振りすら見せない。

「くそっ……！」

私は考えることもなく全力をもって駆け出す。間に合うか……！

能力発動中の私でもあわや、というところだった。少年を助けようとして巻き込まれてしまったのでは全てが無意味だ。

少年の下にたどり着いたときには観覧車は少年に命中寸前だった。観覧車に挟み込まれると思ったが、押し潰されるのを滑り出るようにして逃れた。

観覧車の起こした砂塵を利用して舞草から離れ、物影へと移動する。抱きかかえていた少年は気絶してしまっていた。

これでは戦えない。

動けない人一人を庇いながら戦えるほど舞草は生易しい相手ではない。

「こちらアプロディテ。作戦区域にて一般人一名を保護……しましたが、舞草との戦闘継続が難しい状況に」

『……逃げられそう？』

「舞草はこちらを見失っているようですから、どうにか」

『じゃあ、帰還しなさい。死んじゃったら駄目だし、一般人に見られたのなら事後処理もあるから』

「……了解」

不本意ながら逃げるしかなさそうだ。爆薬に信管と導火線をセットし、近くの石ころにそれをくくりつける。

導火線に火をつけ……投げ上げた。

爆薬といっても、ドアを爆破して突入するための隙を作るための爆薬だ。威力はそこまでなく、殺傷範囲は爆心から数メートルが限界。

そのかわりに爆発した瞬間に強烈な閃光を生み出し、敵の目を眩ますことができる。

投げ上げた爆薬が爆発して期待通りの閃光を放った。舞草の注意は上空に向いているはずだ。
私は少年を抱きかかえて、閃光が作った影と影を縫うようにしてこの施設から脱出した。

追撃はない。無事に逃げおおせたか……。
あと少しで舞草を捕まえることができたかもしれなかった。もしかするとこれが最後のチャンスだったのかもしれない、が。
さすがに他者の命を危険に晒すことは……私のルールに反する……それは、言い訳だろうか。

第九話　プロローグ，２（後書き）

次からは再び主人公の視点です。

第十話　記憶の回生

「あ、え？」

今のは一体なんだったのだろう。

（今のはリリちゃんの……あ、そうか、夏神ちゃんの記憶ですよ）

「……ペネロペ？」

（あう。ごめんごめん、ついうっかり……）

記憶……何か思い出せそうだ。僕は自分の頭を抱えた。

……。

……。

……ああっ！

（思い出したー！？）

そうか、夢だ。今朝見た夢。夢だと思っていたけれど夢じゃなくて、昨晩の記憶だったんだ。

全部思い出した。夏神をどこかで見たことがある気がしていたけど実はその通りで、あの時の女の子が……夏神だったのか。

（ふう。無駄に時間喰ったわね。さてさて、本題に入りましょうか）

「ってか、あんたたち何者！？　まさか、本当に僕を殺ふぐがふ」

また夏神に口を塞がれてしまった。つい大きな声が出てしまったみたいだ。

（ちがうちがう。それなら夏神ちゃんと左座君が二人きりになった時に殺っちゃってるからねー）

それはそうだ。じゃあ何故？

（その逆なのよ。左座君を守るため）

どういうことだ？

（ほら、昨夜全てを見ちゃったでしょう。そんでもって舞草にも顔を見られた。舞草……ああ、記憶を見たからわかるでしょうけどあの狂った男ね。そいつは抜け目のない男だからね。顔も能力も見られてしまったら、恐らく生かしておきたくはないでしょう。だから、左座君を殺しにくるかもしれないの）

僕を、殺しに？

（そう。そして昨夜のことはこっちとしても口外されるとね、困るのよ。よって、我々の組織が口封じ兼警護をすることになってわけだー。そしてその任務を遂行するのが夏神ちゃんの役目ね）

……よくわからない。そんなことをするくらいなら僕をいっそ殺してしまったほうがいいのではないだろうか？

（うへ。勘がいい子。うん、確かにそうなんだけど……）

……ええっ！　心が読まれた！？
（気付くの遅いな！）
「私たちの組織は……面倒な人間だから切り捨てる……なんてことはしない」
しばらく黙っていたので目の前にいても空気みたいになっていた夏神が言った。相変わらず僕の口を押さえ続けている。
（そのとーり。私たちは正義を背負ってますから）
声だけの女性はエッヘンと、偉そうに言った。
それにしても、もし僕が昨日のことを覚えていて、今日の学校で話していたらどうしたわけ？
（ああ、大丈夫。私がいつでも狙撃可能なポジションにいたから。それに話しても信じられないでしょ）
さいですか……。
（何か訊きたいことは？）
いっぱいあるんだけど。疑問だらけでわからないことがたくさん……。
（よしわかった。今日は二つだけ答えてあげましょう。言ってみよーか）
……二つだけ？　けちだな。
（むっ。何にも答えてやらんぞ！）
すみませんでした。えっと、その、夏神とか貴方が使っているのは、超能力、なんですか？
（……ええ、そうですよ）
「答えて、いいんですか？」

夏神が口を挟む。

（気にしない気にしない。これが原因で何か起こったらお上が処理してくれるでしょう。それで、続きですけどね。夏神は身体能力を強化する能力を持っています。ただ欠点があって、能力使用後には使用時間の二十倍のクールタイムが必要っていう使いにけー力ですよ）

「ペネロペ……教えすぎでは」

（これは知っておいたほうが守られる側も気を付けれるから、いいんです。で、私の能力は心への干渉ですから、心を読んだり、他人と心をリンクさせることだってできます、いやほんと、使いやすい！）

女性はけらけらと笑って夏神をおちょくっているようだ。冷静を装う夏神の表情がわずかに崩れる。

（あと一つだけ答えてやろう）

舞草ってどういう奴なんです？　命狙ってる相手のことくらい知っておきたいなーなんて。

（そうねー、彼は舞草兵駕。年齢は二十九歳。私たちの組織の元構成員で……手から衝撃波を放つ力がある能力者なんだけど……それで、巷で有名な連続無差別殺人事件の犯人でもあるんだけど……）

……？

（それ以外は一切不明なの。素性も知れない奴をよくうちの組織は受け入れたと思うわ）

なんですか、それは。あんまりだと思いますけど。

（彼については夏神ちゃんのほうが詳しいわ。でも今日はここまで。子供はきちんと眠りなさいな。ばあい）

「うぐっ！」

後頭部に一撃を受けたのかと気付く頃には僕の意識は完全に落ちて行った。

第十話　記憶の回生（後書き）

これで今まで書きためていた分を出し終えてしまいました。
でもこの時期は暇なので結構更新できるかと。
つたない文章ですみませんが、これからも見てやってくれるとありがたいです。

P．S．
どなたかわかりませんが、お気に入り登録していただけるとは。うれしいです。

第十一話　登校する、二人で。

「ん……」

僕は寝ている。寝ているつもりなんだけど、実際は目を閉じているだけなので起きていると言った方が正しい。

今朝はやけに早く目が覚めてしまった。目覚ましが鳴るまで布団の中にいようとしてはみたものの、一度完全に覚醒すると再び寝付けない体なのだった。なので本当に低血圧なのかどうかわからないのが正直なところ。自分で勝手に思っているだけ、かもしれない。

まぶたを持ち上げてみる。

カーテン越しに朝日が入ってきて明るい。夏が近づいてきているからだろう、近頃日が昇るのが早くなっている。

「ふう」

目覚まし時計を手にとって時間を確認する。なんだ、後五分で鳴るところじゃないか。さっき見たときは後一時間あるとか思ってたけど朝は時間の流れが早いな……。

目覚ましのスイッチを切り、思い切って布団を蹴り飛ばした。足を使ってベッドから降りる。

いつもみたいに這いずってではなく、ベッドより抜け出してからドアまで歩いて行くなんて久しぶりだ。でもこれが普通なのか。

廊下に出て階段を下りる。するとそこには……

「おはよう、左座君」

にっこりと天使のような笑顔を振りまく、何処からどう見ても地

上に降り立った天使――つまり転校生夏神紫杏がテーブルにあるパンを取るのを止めて僕に挨拶した。

「お、はよう……」

僕は懸命に返す。

テーブルまで近づくと既に座って新聞を読んでいた父さんの横の椅子に腰掛けた。この位置だとちょうど夏神の目の前に位置することになるけど、まさか隣に座るわけにもいかない。なるべく目線を合わせないようにして自分の分のパンを取った。

変化って急に訪れるものなのかなぁ。

別に昨晩のことだけを思い出しているわけではない。朝食が格段においしくなっていたり、父さんがトイレでなくテーブルで新聞を読んでいたり……妹がもう起きて朝食を食べていたり、とか。しかもそれが妙に隔てがましい雰囲気を作っていたりだとか。

夏神は制服に着替えていて、朝食が食べ終わればいつでも出発可能状態だった。

「はあ……」

「おい。朝っぱらからため息か。何か嫌なことでもあったか？」

あからさまに父さんの口調が、いやぁこんな美人さんが家に来てくれるなんてこれ以上の幸せはないだろ、的なものだった。

そりゃそうだ。普通だったら、ね……。

できれば夢であってほしかった。あ、やっぱり夢オチかー、というエンドだったらどれだけましだったろう。

ため息を合間合間に混ぜながら朝食を食べ終わり、二階の自分の部屋へと戻る。
どんなことがあろうと学校は休ませてはくれない。親も理由もなしに休ませるはずがない。
クローゼットから制服を取り出して着替え、途中でやっぱりため息がでて、机の上においてあった鞄を見やった。
あの中にはお守りが入っている。さすがの事態に効力もきかなくなったのだろうか。ってか元々お守りって持っている人の気分で効果がかわるよな。持ち主がいい気分だと効果が絶大に感じるし、どん底だとただの邪魔なものだと感じる。
カッターシャツのボタンを留め、ズボンを穿き、チャックを閉め、ベルトを締め、襟を調節し、そして上着は暑いからいらない、というわけにもいかない。
薄い鞄を持って、時計を見るといつもの登校時刻より二十分ほど早いことに気付く。別にいいや、もう行こう。
一階に下り、玄関へと足早に向かう。

「もう準備が済んだから、行ってきます」
「お、おお、そうか。いってらっしゃい」
「いってらっしゃい」
「……」

早起きの妹は返事については相変わらず、だった。これで終われば日常の一コマなのだが、

「私も行きます」

ここには夏神（イレギュラー）がいる。

夏神と共に玄関を出て僕は愛車のシティサイクルの鍵を開け、夏

神のほうを見ると……表情が変わって、あ、変わってないや。二人だけだし昨日の夜のような表情になると予想していた。

「あの、左座君」
「な、なんでしょうか」
「その……自転車一緒に乗ってもいいかしら？」

これはこれは願ってもない頼みだ、普通なら、ね。

「……どうして？」
「昨日、ここに来る道中で思ったんです。歩いて通うには多少、遠いなって」
「でも、二人乗りは校則違反というか……」
「先生たちが見張ってないところまでいいので……お願いします」

くっ、この夏神を見ていると昨夜の夏神はまったくの別人ではないかと思い始めてきた。絶妙な上目遣いを駆使してくる……くそっ！

「わかったよ。いいよ、別に」
「ありがとう」

朗らかな笑顔。たとえ彼女が社会の裏に住む組織の一員であったとしても、この笑顔を持ち合わせている相手に男子は抵抗できない。んんん。本当にあの夏神なのか？　実は昨夜の出来事はすべて夢であったりして。

自転車に跨ると、後ろの荷台に夏神が座って両手を僕の腹部に回してきた。

「ううわっ」
「……？　どうしたの、いきましょう？」

わざとだ、絶対わざと、故意にやっていやがる、そうでなければ今現在の僕は精神的にも心拍数的にも耐え切れずに死んでしまう！

「りょ、うか、い」

二人分の重さが加わると一人のときより明らかにペダルを漕ぐ力が要る。体力はある方ではないのでしんどい。

しばらく進んだ後にある上り坂なんて死ぬ思いで足に力を入れ、額から汗が湧き出すほど。汗の粒は頬を伝って顎先から落ちる。

「ぜぃぜぃ……あのさっ」

上り坂が終わって下り坂になり、スピードが乗ってきたところで僕は夏神に聞いてみた。

「何？」

「昨日のことって夢じゃ、ないよね？」

「そうだけれど何か」

あっさりと……おっしゃいました。一片の望みだったのに即座に叩き折られてしまった。

「いや、特に何もないです」

「嘘」

「え？」

「訊きたいことが山ほどあるんでしょう？」

「……今、いいのか？」

「だめです」

「……」

久しぶりに他人に対してあきらめの感情を抱きました。
僕は下り坂が終わってしまっても、得たスピードをうまく活かしながらできるだけ速く学校へと向かった。

第十二話　弱い決意

学校から五百メートル前ぐらいで夏神を降ろし、僕は一足先に学校へ行こうとしたのだけども夏神が「道がわかりません、連れて行ってください」などと言い、ざけんなとも思いつつ彼女に逆らえず（魅力に負けたわけではないぞ！）目的地まで導き、そして、

「ええ！　夏神と一緒に登校してるの……左座じゃね！？」
「うっそー」
「まじかよ」
「どうやったんだあいつ、羨ましいな」
「くそう、左座の野郎」
「生かしては……おけぬな」
「昨日立ち上げた、ファ、ファンクラブの会長はボ、ボクなんだぞ！」

想定していた最も悪い状況へと移行していった。これを機に僕に不利益なことが起こってくるだろう。
そうなってはほしくないけれども、自分にこの場をうまく収める手立ては一つもありはしない。お守り効果ないな……どうにもならないっていうのか。
遊園地では生き死にで腹をくくったけど今回は別の意味で腹をくくらねばなるまい。

「おーす。お早いな、左座ー」

振り返ると上下ウインドブレーカー姿の雀部が走ってくる。

「おうおう、囲まれてるなぁ。何した？」

巨人雀部がやってくると僕を包囲、殲滅せんとしていた輩達がいささか後退りする。雀部は夏神がいることに気付くと高速でそちらに体を向け、その勢いで僕は吹っ飛ばされた。

「おやまあ、おはよう、紫杏ちゃん」
「おはようございます、雀部さん」

雀部がちらりと地面に倒れている僕を一目して、ははーんと声を出した。

「夏神ちゃんとここまで登校してきたな……先を越されたぜ」

にやにや雀部は笑っている。朝から夏神と会えてうれしいのだろうけれど周りをよく確認したほうがいい。
僕が夏神と登校してきたより、“紫杏ちゃん”の一言の方が絶大なパワーを秘めていたようだぞ。

「紫杏ちゃん……だと？」
「うっそー」
「まじかよ」
「うっわーすげー」
「雀部のにゃろう！」
「この世にのさばらせては……おけぬ」
「ど、どいつもこいつも、抜け駆けしやがって。ボ、ボクがファンクラブの会長だぞ！」

僕を敵対視していた奴らが今度は同じ視線を雀部に向けている。ナイスタイミング、雀部。お前にとってはバッドタイミングかな。今のうちにありがたく教室へ逃げさせてもらう。

発生した敵たちを雀部にまかせて僕はその場を後にした。
教室に入れば朝礼まであと三十分以上の空き時間があるためか、ちらほらとしか生徒が登校していない。
僕は席に着いて色々と疑問に思うことを考えてみて、それをメモ帳に記入していく。次に質問の機会が与えられれば訊こうと思うものリストだ。
しかし、書き込む手が止まった。

『そいつは抜け目のない男だからね。顔も能力も見られてしまったら、恐らく生かしておきたくはないでしょう。だから、左座君を殺しにくるかもしれないの』

脳裏に蘇る女性の声。そういえばペネロペなんて呼ばれてたな。
……殺される、か。実感が沸きます、なわけないだろう。つい一昨日まではただの高校二年生だったのが、只今超能力者に殺されそうになっている一般人です、って……もう一般人じゃねえ。
そうだ、超能力者だ。あれは一体どういった存在なのだろうか。地球外生命体だったりして！
でもさすがにその想像は出来ないなあ。

『えっと、その、夏神とか貴方が使っているのは、超能力、なんですか？』
『……ええ、そうですよ』

超能力者……本当にいるんだ。この目で見てしまったし信じないわけにもいかない。ドッキリでは……もはやその可能性はないに等しい。ここまで手の込んだことをする暇人がいるわけがない。

『夏神は身体能力を強化する能力を持っています。ただ欠点があって、能力使用後には使用時間の二十倍のクールタイムが必要ってい

う使いにけー力ですよ』

僕を守ってくれるのがあの夏神紫杏。美少女も美少女、とびっきりの。そして彼女も超能力者か……。

『で、私の能力は心への干渉ですから、心を読んだり、他人と心をリンクさせることだってできます、いやほんと、使いやすい！』

未だ見たことのない夏神の上司。どんな人だろう。

そして正体不明の僕を殺そうとする能力者。

『そうねー、彼は舞草兵駕。年齢は二十二歳。私たちの組織の元構成員で……手から衝撃波を放つ力がある能力者なんだけど……それで、巷で有名な連続無差別殺人事件の犯人でもあるんだけど……それ以外は一切不明なの。素性も知れない奴をよくうちの組織は受け入れたと思うわ』

どう心構えをしておけばいい。わからない。殺しに来るかもしれない、と言葉を濁していたけれども護衛をつけるぐらいだから相当確信があるんだろう。

『彼については夏神ちゃんのほうが詳しいわ』

僕はハッとする。悩んでいてもしょうがない。自分から知りに行こう。そうでなければ彼女たちは教えてくれそうにない。

よし、と決意したのは良いものの、それが心の中だけでそうそう行動に起こせないものなのだと悟るのにほとんど時間は必要としなかった。だって真後ろに平然と座っていた彼女に話しかけることが出来なかったし。

第十二話　弱い決意（後書き）

結構な矛盾が発生している気がしましたが、何処だったか忘れてしまいました（何

もし見つけた方がいたら教えていただきたいです。

第十三話　友達

ほんの二日しか経っていない。

全ての元凶となってしまったあの事件からたった二日、その間に僕の周囲の環境は急変した。これは不幸だ。

世界には数え切れないほどの人間がいて、他と干渉しあいながらそれぞれが一切異なる人生を送っているけれども（とある有名な本のフレーズを引用）、僕の遭遇した不幸と同じ体験をしたことがある人がいるかどうか……。

僕はかくのごとく教室の自分の席を追われ、屋上という誰もいない避難場所へと移動していた。ベンチに横たわり、パンを食べていた。購買で購入してきたパンは手に持っていない分を腹部に置いている。地面に置くよりはましだと思うから。

唐揚げをサンドした唐揚げパン。唐揚げの油分でパンがべとべとになってしまうのを防ぐためだろうけど、フランスパンに挟まれているので硬くて食べにくい。でも現代人の顎の力が衰えているって聞くし、硬いのは悪い事ではないかも。

食べかけの唐揚げパンを見つめながらどうでもいいことを考えていると、キラリと僕の目に眩しい光が入った。

首を起こして僕のほかに人がいるかと見回すけれども認めることはできない。ビルのガラスか何かが太陽光を反射して、それが偶然やってきたのだろうと結論付けた。

その時である。

上空に向けていた僕の視界に黒い物体が横切った。

何事かと思ってパンが落ちないようにしながら僕は上体を起こす。

横切った方向を見遣るとそこには夏神が立っていて、乱れた髪を整えているところだった。先ほどまでいなかったはずなのに。
推測できるのは、
「まさかとは思うけど、五階ある校舎の屋上にジャンプしてきたわけじゃないよな」
ということ。夏神が対して言うのは、
「あいつらを振り切るにはそれしかなかった」
否定しないのか。超能力者って何でもありなんだと改めて認識する。
じゃあ、さっき見たのは夏神で、……、僕は下から見上げていたわけだから……、不可抗力ながら“中”を見てしまったのか。
しかし、しかしだ。太陽の影でうまく目視できなかった。それに速くて目が追いつかなかったというのもある。
だ、だから謝罪は要らないと、
「ごめんなさい」
そういうのは甘いな。ありがとうございました、にはならないので謝る方が正しいだろう。
「……？」
夏神が訝しげな視線を向ける。
相手が知らないから胸中にしまって黙っておくというのは僕の性に合わない。かといって説明することもない、自己完結。

「あの……」
夏神が遠慮深げに声を出しながらこちらに近づいてきた。
そして、ぐう、と鳴った。お腹が。僕のではなく、彼女のが。
「パンを一つ、くれないか」
「何も食べてないのか？」
「そんな隙を、与えられなかった」
僕を見ていた目を別方向へと逸らし、ほんのりと顔を赤らめる。
恥ずかしがっている？　冷酷そうな夏神もやはり、少女なのだった。
口調も冷静さを欠いていて演技が剥げ落ちそうになっている。
僕はそんな彼女を見て、思わず噴き出しそうになった。
「いいけど。これでいいかな、メロンパン」
夏神はメロンパンを受け取ると僕とは少しばかり距離を置いたもう一つのベンチに腰を下ろした。メロンパンを厳かに頬張る。演技が復活したようだ。
唐揚げパンの残りを一気に口の中へ放り込み、もぐもぐと咀嚼する。噛む力を意識すると顎が疲れる。
ガチャリ。
滅多に人の来ない場所である屋上のドアが開かれた。そこから現れたのは一人の女子。髪はセミロングで茶色がかっている。身長は夏神と同じくらいで、眼鏡を掛け、どこか暗い感じのする生徒だった。
僕と夏神という男女のペアがいたからだろうか、あ、と小さな声を出して奥へ引っ込んでいってしまった。
しまった、勘違いされてしまったかも知れない。もし言いふらされでもしたら、今度こそ理不尽な憎悪たちから逃げられないかもし

れない。

「……もぐ」

「……」

「……じぃ」

その女子生徒はこの場を去るものだと予見したのだけれど、ドアを数センチだけ開けてこちらの様子を伺っているようだ。もっと面倒だな。何を期待しているのだ。

相変わらず夏神はメロンパンをちょびちょびと齧っているし、僕は焼きそばパンを食べ始めた。一言も言葉を交わさないところから君の考えが勘違いであったと思って去ってくれ。

そんなことを願ったとしても伝わるはずがなく。

僕は気に留めないように振舞おうとするけれども、なお注意がそっちへ行ってしまう。焼きそばパンなんて軟らかくて食べやすいのでものの一分で完食。夏神は……まだ一個のメロンパンも食べ終わらないのか！

その隙に女子生徒が意を決してドアを開き、この場に公式に参上した。ドアが自然に閉まり、閉じられた空間となった屋上に僕を含め三人が残る。

女子生徒はどうするつもりなのだろうかと思い巡らせてみたが答えは出ない。予測がつかない。

拳を強く握った女子生徒は夏神にゆっくりと歩み寄っていく。夏神はメロンパンを食べるのを止め、女子生徒を見つめる。

「あ、あの！」

「何でしょう？」

「と……と、友達になってください！」

不意を突かれた。まさか夏神に真正面から向かっていけるほどの

奴だったとは。
　周りの奴らが夏神を追っかけ回しているだけで友達になろうと言わないのは、夏神と自分たちとに大きな隔たり、違いがあるのを無意識に感じているからだ。なぜそう思うのかといえば、僕もそうだからだ。
普通に付き合ったのでは元々ある差（魅力とか学力とかその他もろもろ、夏神の特異性）が自然に上下関係を作り上げてしまう。だからこそ、何か対等の立場で付き合っていけるきっかけを探している。で、僕はそのきっかけを望まずとも掴んでしまった訳ですが。
　それを無視して声をかけれるのは、雀部のような馬鹿か、心に強い芯を持つような大きな人間だけだ。

「私には、友達がいなくて、その……夏神さんも転校して来たばかりで……友達も少ないと思いますし……」
「いいですよ」

　夏神は笑みと共に答える。

「ほ、本当ですか！？」
「ええ。貴方のお名前は？」
「あ、すみません。私は明日喜万里（あすきまり）といいます。同じクラスです」
「宜しくお願いします、明日喜さん」
「こ、こちらこそ！」

　名前を聞いて思い出した。確かに同じクラスに属している女子だ。どんな子なのかはほとんど見かけたことが無かったので忘れてしまっていた。
　体が弱くよく入院しているという病弱な女子だ。そのために学校にあまり姿を現さない。友達がいないというのも頷ける。
　となると、端から目的は夏神だったのか。友達を作りたいとして

も女子には女子のグループがあって、そのグループの中に入ろうとしても壁があるものだ。よくは知らないけど多分そういうものが理由で友達が作れないでいたのだろう。

転校してきた、どのグループにも入っていない夏神なら友達になれると考えたのかもしれない。とは言っても夏神が一人だけで浮いている存在であるのに、それに声を掛けるなど僕には真似できないことだ。勇気のある奴だなと思った。

第十三話　友達（後書き）

ええ、ありがとうございます。
アクセス３０００越え、ユニーク１０００越えです。
この小説（と呼べるかは別として）を見ていただいて感謝感激です。
まあ……トップのほうはもっと凄まじい数字なんでしょうが。
近づけるよう精一杯、精進してまいります。

第十四話　疑問と答え

学校を終えて帰宅した。陸上部の部活動が再開されたので雀部は一緒に帰れず、どうしようもないほど悔しがっていた。

今日は、普通に帰ると見せかけて追っ手を撒いた夏神と後に合流してから帰った。夏神は「護衛目標をなるだけ一人にしておくことはできないから」こんな手の込んだことをしたそうだ。

それには同じ家に夏神が泊まりこんでいるというのを悟られないようにしたいという僕の要望があった。いつかはばれてしまうだろうけど、すぐに知られるよりかは幾分マシではないかと思うし、ばれるまで変わらないだろう。

夕食を終え、風呂にも入り、僕は自分の部屋で久しぶりに予習でもしてみるかと思い立ったけど自分の集中力を過大評価していたらしく、すぐに飽きてしまった。

落ち着いていられない。

ごちゃごちゃと様々な思考が脳内を埋め尽くしてしまっていて他の事柄が入ってくるための余裕、スペースがない。知りたいことがあるのにそれを知らないというもどかしさで、胸がむかむかする。

手の上で玩んでいたシャープペンシルを机の上に置き、開いたままのノートをそのままにして僕は椅子から立ち上がった。屈伸、伸脚、前屈を数回繰り返して体をほぐして本日二度目の決意を行う。

「よっしゃ！」

僕の部屋から出て廊下に誰もいないのを見ると、つい先日まで空き部屋だったはずの夏神の部屋に早足で向かった。

ドアの前にたどり着くと心臓の鼓動が大きく、速くなる。深呼吸をして、かっかと熱くなる体を冷まそうと試みるけれどもあまり効

果がない。
仕方ない、いくら待っても変わらないのなら、と僕はドアを二回ノックする。
「どなた？」
「左座だけど」
「この家では皆さん左座ですよね？」
「あ、ごめん。僕だ、誠人」
「いいよ、入ってきても」
失礼しまーす……、と言って部屋の中へ。職員室にでも入るのかと自分でも突っ込みたくなったけど、ぐっと堪えて恥ずかしさと拮抗させる。
「ここは貴方の家でしょう？　そんなにかしこまらなくても」
「うっ。そうですね」
……押さえ込んでいた恥ずかしさが全身に流れ込む。顔が熱くなっていく。
僕が俯いて突っ立ているだけだったからか、夏神がドアを閉めた。
「……用件は？」
椅子に腰掛けた夏神が冷たく、流し目で見ながら尋ねてくる。僕も多少は我を取り戻して答える。
「聞きたいことがあるんだけれど」
「少し待って」
夏神は机の上に置かれていた折りたたみ式の携帯電話を手にとっ

てダイヤルした。多分、あのペネロペさんに連絡を取るのだろう。

「……了解」

携帯をたたみ、それを再び机の上に戻す。夏神は小さく息を吐きだし、

「許可が出た。答えることが可能な事柄には、答えてやる」

こちらのほうが自然なものなのだろうか、突然に口調が変化してしまうのはついていけない。感情を察するのが難しい奴だ。

僕は一緒に持ってきたメモ帳を取り出し、ペラペラとめくってリストから質問を選ぶ。

「夏神って、遊園地で俺を助けてくれたんだよね？」

「そうだが」

「あの時は銀髪じゃなかったっけ？」

始めということで、どうでもいいようなことを訊く。

「ああ、染めた」

「じゃあ、素で銀髪？」

「そうだ」

外国人のハーフだと言っていたけど、日本人以外の血も流れていることは間違いなさそうだ。

「出身は？」

「日本だが」

それは夏神としての、偽の出身地だろう。
「そうじゃなくて、本当の出身地はどこ？」
「知る必要があるのか？」
ギロリと夏神に睨まれてすくみ上がってしまった。僕は夏神の顔から目線を逸らして、
「いや……別に」
我ながら気弱である。
「……実を言えば、私も知らないんだ」
「あ……そう」
答えないと思っていたので意表をつかれたのと夏神の答え方があまりにも神妙で重たい様子だったからか、これ以上そのことを聞くのが躊躇われた。
それでは別のことを。
「それと……事件があってからの展開が急すぎやしませんかね」
「対応が早いと？」
「一日で転校して来た訳だし……」
「それは勘違いだ。私があの学校に転校することは前から決まっていた。この地域で左座誠人に最も近い組織員が偶然私だっただけだ」
「どんな組織なんだ？」
「私もよくは知らない。末端だからな、私は」
早くも二度目の“知らない”だ。でもなんとなく、嘘は言っていない気がする。そう見せるのがプロの技なのかもしれないのだけど。

「あー、えっと、能力者って実際何なの？」
「……通常人間が持っていない力を行使する者達の総称だ」
「どうやったら能力者になれるんだ？」
「……知らない。そのメカニズムを研究している人はいるが」
「へえ……」

能力者と夏神のいる組織についての質問が早い段階で“知らない”と切り捨てられた。そこから派生する質問ばかり考えていたのであまり訊く事がない。

「僕を護衛するのは君だけ？」
「いや、私の上司と、特殊部隊一小隊が護衛に当たっている……が、優先順位は舞草の捕縛が第一位、二位が左座誠人の護衛だ」

いざって時には僕は捨てられるのかい。

「私には優先順位が逆に設定されているから、心配しなくていい」

頼れるのは夏神だけ……って気分があまりよろしくないのは気のせい、ではない。夏神といえばあの夜のイメージの方が普段の夏神より強い。

月を背景にこちらを振り返った夏神のあの目は……蒼い瞳だったけど、今の瞳の色は茶色。カラーコンタクトだろうか、などと想像していると夏神の携帯の着信音が。

夏神はすばやく携帯を取る。

「はい、私です。……はい。了解です」
「どうかした？」

と訊くと、やはり流し目でこちらを見て、

「舞草が現れたらしい。私も応援に向かうが……貴様はもう寝ていろ」

「ええ！？」

夏神は学校鞄の中から何故か入っていた靴を取り出して履き、窓を開けた。

「鍵を掛けて自分の部屋にいろ」

そう告げて夏神は外へ飛び出した。ここは二階ですけど、と注意するまもなく行ってしまった。そういえば今日、一階から五階まで飛んできたことがあったっけ。それと比べるとまだまだ小さいことか。

ってか、寝てろと言われてもね……。

僕は夏神の出て行った窓を閉めて部屋の電気を消し、自分の部屋に戻った。

第十五話　屋上にて

眠さから僕は午前中の授業をほぼ寝て過ごした。昨日は、いつ夏神が帰ってくるかな、と思いながら起きているとなんと徹夜してしまったのだった。

明日になれば学校も休み……そう思っても耐えることができなかった。

四時間目終了の印であるチャイムが鳴ると相変わらず、大量の人が押し寄せてくる。物量に潰されてダメージを受ける前に自陣から退却する。

さすがにその人の群れは初日に比べれば減ってはいる。特に女子の割合はほとんどなくなり、男子だらけでむさ苦しさレベルが上がっている。夏神もお気の毒に。

僕は他人に夏神とどういう関係なのかと問い詰められる前に購買に行き、今日の分のパンを買って屋上（ひなんじょ）へ向かった。今日のパンはチョココロネやクリームパンなどの菓子パンにカレーパンやかつサンドなどのメインもいつもより少しばかり多めに買っておいた。

屋上に着き見渡すとやはり誰もいない。どうしてこの場所は人気がないのだろう。昔何かあったのだろうか。

ベンチにパンを置いて空を見上げ、待ってみる。

ああ、やっぱり来た。

ストッ、と着地音の大半を殺して、この屋上に降り立ったのは夏神だ。

「また大ジャンプして来たのかよ」

「いや、今度は四階から上がってきた。大したことはない」

四階の窓から蹴り上がって一階上にやって来たと。十分に凄いんですけど。

「それにしてもあの集団は何なんだ……」
「一目見てファンになったんじゃないのか」
「ファン？」

手を顎に当てて考え込む。嫌がっているような表情はしていなかったので満更ではないのかもとちょっとばかり思った直後に夏神は顔をしかめた。

「厄介だな……あまり“友人関係”が多くなるのは好ましくない」
「でも昨日は明日喜さんと友達になったじゃないか」
「……同性の友人がいないのはおかしいため、一人ぐらいは、と」

あれだ、夏神は人との交流が苦手なのかー……完璧な人だと確信していたのに弱点はあるもんだ。一人許したら皆迫ってくるものだと知らないのだろう。

「ところでさ、昼食とった？」
「まだだ」
「じゃあ、パン食べる？」
「……ああ。頂く」

僕はパンを数個夏神に手渡してベンチに座り込み、パンを受け取った夏神は前よりは僕に近い所に座った。
三個入りかつサンドの一つを食べ、気になっていた昨日のことについて訊いた。夏神はホットドックを一口した後に答えた。

「舞草が発見されたのはいいが、また取り逃がした」

夏神の顔には悔しさが滲んでいる。
「現在は部隊の連中が捜索中だ」
「そうか……夏神は大丈夫だったのか？」
「……私か？　特に怪我はないが」

気遣われたのがよほど意外だったのか、怪しむような、驚いた口調で答えた。

「それなら良かった。そういや、夏神の記憶を前に見せてもらっただろ？」
「ああ。記憶を取り戻させるために」
「あの時に舞草って奴から攻撃を受けたみたいだったけど、それも大丈夫？」
「どうして知る必要がある」
「別に理由はないけど」
「……肋骨にひびが入っただけだ。さすがに完治には時間を要するが任務に支障はない。気にするな」
「大丈夫じゃないだろ、それ」

刺々しい言い方をして僕の興味を削ごうとしているのかと思いきや、普通に答えてくれる。いちいち……面倒な。
突然、眠気が再びやってきて欠伸がでる。くっ……ねむたい。

「……どうした」
「目が閉じそうだよ。夏神は眠くないのか。昨日寝てないだろ」
「私は一週間ほどならば睡眠をとらずに作戦行動が可能なように訓練を受けている」
「さいですか」

スーパーマンか。

僕はパンに齧りついて眠気を晴らそうと努力する。噛む力を意識していれば眠らないはずだ。

端から見ればやけくそにパンを食べている様に見える僕を一瞥して、夏神は左手首につけている腕時計を見た。

「そろそろか」

夏神が呟くと屋上のドアが開いた。そこから登場してきたのは昨日会った女子、明日喜さんだった。

「あ……こんにちは、えと……左座くん」

明日喜がこちらに礼をしてくる。あわてて僕も挨拶し返す。

「お、お邪魔します……」

明日喜さんは夏神の隣に座り、両手に持っているナプキン包まれた弁当箱を開いた。夏神は瞬時に演技の仮面を被ってしまい、表情が優等生夏神紫杏になっていた。

男子対女子比率が一対二になってしまったために話し辛い。空気が女子の場になってしまった。

にもかかわらず、（言っては悪いけど）根暗っぽい明日喜さんは話し出すきっかけを掴めず、もう一人は他人との交流が苦手（であろう）な夏神なのでしんとしたまま沈黙が続く。なんだこれは、辛い、居るだけで辛い。

夏神はパンを次々に口へと運び、明日喜さんは夏神をちらちら見ながら弁当に箸をつける。僕は食べたパンが呑み込めない。

屋上から逃げ出そうかな。でも出て行くのも出て行くので勇気が必要だ。パンを食べ終えたのなら理由として使えるだろうけどパンが喉を通らないので無理みたいだ。
いや待て、もし僕がここで居なくなったら二人で会話することがあり得るだろうか。ほぼ十割がた沈黙が継続して、それで昼休みが終わりそうな気がする。
僕が会話を作ってやるしかないのかな……。

「……あの、さあ」

明日喜さんに声を掛ける。

「は、はい！？」

明日喜さんは動転して上擦った声を上げた。弁当が落ちそうになる。何もそこまで驚かなくても……近くにいる訳だし。

「明日喜さんって元気になったの？」

彼女について僕が持っている数少ない情報で、訊けるのはこれくらいだ。ここからどうにか話を展開させていければ。

「……は、あ、ええ、まあ」

……。

……。

……そこで止まるなよ。

これ以上は不可能だ。精一杯の勇気で訊いたのに。
夏神に視線を向けて合図を送ってみる。話をここから続けてやってくれと。通じたのか夏神が口を開く。

「ご病気なんですか」
「……はい。一週間前に、体調が良くなったから退院していいってお医者さんが。完治したかは不明なので様子見の仮退院なんですけどね」
「お辛いですね」

ここで話が止まったかと心配したけれども、

「……あのう」

と明日喜さんが会話を引き続かせるために話題提起する。

「……一緒に居るみたいですけど、二人は知り合いなんですか」

来るものが来たかと苦い気持ちで、心の中の僕は額に手を当てた。大勢の前でこの質問をされるよりかはだいぶマシだと自分に言い聞かせる。まだ運が良い方だ。

「一緒に住んでますから」
「え、ちょっ！？」

ななななんなん何を言ったんだこの人は！　僕は身を乗り出して止めようと手を伸ばすと、パンが地面に落ちた。

「一緒に……住む？」

明日喜さんは出し抜けに出た答えに戸惑っているようだけども、おいおいおい。夏神って何者だ！？

「……ええっ！？」

意味を理解した明日喜さんは両手を口に当てて驚き、飛び上がるように立ち上がった。そして膝上に置いていた弁当が地面に落ちた。

「お二人は兄妹（姉弟）だったんですか！？」

……おお、そう結び付けたか。

「違いますよ。ホームステイのようなものです。親が私を寮に入れたくないらしくて」

「は、はあ。そうなんですか。で、それが偶然左座くんの家だったと」

「そうです」

「それは……知り合いになっちゃいますよね」

すぐさま明日喜さんは落ち着いて、再びベンチに腰掛ける。

「ねえ、明日喜さん」

「……何ですか？」

「このことはしばらく黙っておいてくれない？」

「……ええ、いいですけど。ほかの人に知られたら左座くんが酷い事になりそうです。推測できます」

「ありがとう」

……物分りの良い子で助かった。雀部とかだとどうなっていたことか、想像すると鳥肌が立つ。

不幸中の幸いか眠気が吹き飛んでいってしまったし、昼休みも終わりそうだし、パンを……って、あ。

「ああ……パンが」
「あぁ……お弁当」

僕は落としたかつサンドについているゴミを払い、入っていた容器に戻す。他の落としたパンたちは袋に入っているからまだ食べられるし、かつサンドも完全に食べられなくなったわけじゃない。でも明日喜さんの弁当はしっちゃかめっちゃかになってしまってさすがにもう無理だろう。
弁当の中身を片付け、ふうと明日喜さんは肩を落としてしまった。

「良ければ、無事なパン……食べる？」
「いえいえ、そんなこと」
「何か食べなきゃ体に悪いよ。はい、あげるよ」

僕は菓子パンを明日喜さんに渡した。明日喜さんは渡されたパンを数秒見つめてから顔を上げ、

「いいんですか？」
「別にいいよ。秘密にしてくれるって言ってくれたし」
「……ありがとうございます」

明日喜さんは笑顔になって軽く頭を下げた。なんだ、暗い感じでやだなぁと思ってたけど、案外顔は可愛いのか。夏神のような完璧な美ではなく、小動物のような愛くるしい可愛さだ。

「あの……友達になってくれませんか」

明日喜さんが小声で呟いた。もしこれが教室なら他の喋り声にかき消されてしまうだろうというほど小さかった。けれど聞き取れた。
女子から友達になってくださいなどと言われたのは人生初の経験だったけど断る理由もない。

「うん、いいけど」

パアッと明日喜さんの表情が明るくなった。友達のいないらしい明日喜さんだから男子の友達なんてのは勿論初めてだろう。ほぼ面識のない僕に友達になろうと提案してくるとは、僕にはまねできない。勇気のある奴だ……もしかして彼女のような人が巷で噂の肉食系女子……とは違う。

「おお、いたいた。ああ！　また左座か！」

聞き慣れた大声の主は雀部だ。屋上のドアの前に肩で息をして立っていた。

「お前……こんなに積極的にアタックする奴だったとは、油断していた」

雀部が汗だらけで息が荒いところを見ると学校中で走り回りながら夏神を探していたのか。それとも“紫杏ちゃん”の件で追われていたのか。お疲れなことで。

「紫杏ちゃん！　屋上で飯を食うのなら誘ってくれれば良いのに。友達だろ？」
「ごめんなさい。雀部さんも次からご一緒に」
「謝ることはないよ。ありがとうな。ん……明日喜さんも？」
「あ……」

明日喜さんを知っているとは、前に言っていた「女子なら全校生徒知っているし、全員に声を掛けて見せる！」宣言は嘘ではなかったらしい。

「私の友達の明日喜万里さんです」

「なるほど、紫杏ちゃんの友達……俺は紫杏ちゃんの友達だから、友達の友達だ！　つまりは友達と同意！　よろしく、万里ちゃん」

いきなりテンションの意味不明なぐらいに高いのに加えて頭の中の理論が崩壊している雀部に名前で呼ばれ、明日喜さんはビクリとしたけれど雀部の差し出した手を握り返して握手をした。身長差が五十センチ近くある握手は子供と大人がしているようで、似つかわしくない。

「は、はあ……どうも」

「よし、それじゃあ明日！　皆で遊びにいこうか！」

雀部との付き合いが長い僕でさえ、突拍子もない申し出に驚き入ってしまった。

「と、突然だな」

「ラブストーリーはそんなもんさ！」

……？　ほんとに意味がわからん。

第十六話　休日

というわけで、僕と夏神と明日喜さんは待ち合わせ場所の駅前にいた。

明日喜さんの家まで二人で迎えに行って、それから三人でここまでやってきた。会話がほとんどなかったのは言うまでもない。

通行量の多い大通りがあり、ビルやらデパートやらが沢山立ち並んでいる。歩行者の数も相当なものだ。

完成すればそのビルたちを大きく超えることになるだろう建設中のビルもあるけど、今日は休日なのか工事の音はなかった。

「やあやあ、時間ぴったりに登場、雀部です」

雀部が突然後ろから声をかけた。

「うお。お前どこから来た」

人ごみの中から来たのなら長身の雀部は目立つはずで、見つけられないわけがない。

「ああ、早く着いちまったから駅の中で時間潰してた」

「……待たせちゃった？」

明日喜さんが恐る恐る雀部に尋ねる。

「そんなことはないよ。俺のせいだからさ」

雀部が笑って、不機嫌ではないと確認できたのか明日喜さんはほっとしたようだ。

「それで雀部、今から何処へ行こうというんだ？」
昨日約束したのは待ち合わせ場所だけでその後どうするかは、雀部は言わなかった。
「ふふふ。ここでいつも行っているような店に行くのは勿体無い……両手に花だし」
「お前の中で、僕はいない扱いか？」
僕のツッコミを無視して雀部は続ける。
「題して、マイナーな店めぐり！」
「……？」
夏神が怪訝そうな表情で雀部を見つめ返した。
「ここにある皆さんが知られていないだけで、実はすごいお店を、この案内人雀部健太郎がご案内いたします」
すごいって何がすごいのかわからない。
誰も雀部のノリに付いていけていなくて、ぼーとしてしまっていた。けれども、雀部はそれに気付くことなく、さあ行こうと急かした。
「お、おう……」
夕日が沈みかけていて、辺りは薄暗い。大通りから道路一本奥に

入るだけで、通行人はかなり少なくなる。

「それで……どうでしたか。この雀部が案内した知られざる名店の数々」

まあ、正直全くもって期待なんてしていなかったけれど、今回は良いほうだろう。

ビルに隠れてしまってわからなくなった骨董品店とか、寂びれた雰囲気の喫茶店とか、どうやって見つけたのか訊きたくなるような本当に知らない店ばかりだった。

喫茶店はメニューのどれもが一流店のようにおいしく（ただし客は僕たちだけ）、骨董品店では思わず、あっ、と言ってしまいそうになる懐かしい品物があって会話が弾んだ。明日喜さんはそこで気に入ったクマの人形を、夏神も宇宙人が残したオーパーツとかいう怪しげなものを雀部に買ってもらっていた。値段は高校生でも普通に買えるぐらいだった。

最後に行った絶対当たるらしい占い屋も確かにそのとおりだった。

「おもしろかったです」

「……私もです」

僕は答えられない。

「おいおい、落ち込むなって。財布を失くすって占いさ、当たっただろ？」

「当たってほしくないね」

今月分の小遣いを全部失ってしまったからだ。まさかの大損。占いなんてやめておけばよかった。別に占いのせいではないだろうけど……気持ちの問題だ。

「ははは っ。ほんと、左座の持ってるお守りは効力ねえな」
「うるさい」

肌身離さず持ち歩くこのお守りは占い屋の告げた運命を変えるほどの力はないようだ。無駄に重い上に近頃ご利益がなくなってきているので、いっそ捨ててしまった方がいいのかもしれない。

「……でもあの占いよく当たったよね」

始めはあまり口数のなかった明日喜さんも次第に打ち解けていた。そこに学校での暗いイメージはない。

「だろ？　この雀部さんのおかげだ」
「ありがとうございます」
「わ、紫杏ちゃん、こちらこつあ」

噛んだ。
雀部は夏神に話しかけられだけですぐにテンパった。わかりやすい人間だ。明日喜さんはクマを抱き、その様子を見てくすくすと笑っている。

「なあ……そろそろ帰ろうぜ」

最後の最後でテンションを落とされたので僕はブルーのままだ。

「そうか、そうだな。最近物騒な事件が多いし。まあ、その時は二人とも俺が守ってやるけどな」

実際にそうなったら守ってもらうのは雀部、お前だと思うけどな

……。

「それでは近道して帰りますか」

「近道？」

「いいから付いて来いよ」

そう言って雀部は工事現場まで歩いていき、何の躊躇いもなくそこへ入り込んだ。

「何やってんだよ」

「こっちからが一番近いんだ。今日は工事がないみたいだし、別にいいだろ。ほらほら皆さん来てください」

夏神は言われたとおりに雀部の後に続く。仕方なく僕も行くと、残されまいと最後に明日喜さんも入ってきた。

雀部は慣れた感じでさらに奥へと入っていく。組み立てられたビルとしての鉄骨が静かに立ち、その周りに鉄パイプなどで組まれた足場がある。地面は砂地で、資材やショベルカーなどの重機械もある。

なんとなく遊園地の時を思い出してこの場所にイメージを重ねてしまい、少し怖くなって歩調が早まる。悪い気配がした。

「今日は楽しかったぜ。紫杏ちゃんと万里ちゃんはどう？」

僕は雀部の横に並ぶ。後ろを向きながら雀部は問いかける。

「楽しかったですよ」

「……私もです」

「そりゃあよかったよかった。なんせ今回は俺自慢の――」

「……！　危ない！」

夏神が叫んだのと同時に僕は後頭部に圧力を感じて、次の瞬間には顔面を地面に強打した。

「ぐうわっ！」

「うっぷ！　何だ！？」

後頭部に触れているのは誰かの手のようだ。ゆっくりと手が離され、首の可動域が確保されたところで僕は辺りを確認した。

「雀部！」

地面に倒れているのは雀部も一緒で、何が起こったのかわからないといった、驚いた顔でこっちを伺っている。

「大丈夫ですか！」

明日喜さんの声がして、僕と雀部は立ち上がる。先ほどまで僕らが歩いていた場所には何本もの鉄柱が突き出て……いや、突き刺さっていた。

夏神は僕の隣に立っていて、砂埃を掃っていた。

明日喜さんが鉄柱の奥からこちらに走ってくる。

「大丈夫だけど……これは？」

「いきなりこれが落ちてきたんですよ！　本当に無事なんですか」

建設中の建物を見上げて、ぞくりとした。あそこから落ちてきたのか……あんな物に当たったら即死だっただろう。

「夏神が……助けてくれたのか」

こくりと夏神は頷く。

「あ、危ねえ。もう少しで死ぬところだったぜ……ありがとな、し、紫杏ちゃん」

雀部が冷や汗を掻きながら、震えた声で言った。

「凄かったですよ、夏神さん！　咄嗟の判断が凄いです！」

明日喜さんは事故が起こったことよりも僕と雀部を救った夏神の働きに驚いているようだ。尊敬の眼差しを彼女に向けている。

「……まさか……」

夏神は上に視線を向けて、ピリピリとした空気を作り出していた。何かを警戒している？

「……戦闘時間を百二十秒に設定……」

ぼそりと呟きながら言った。これは、夏神が能力を使う時に使っていた言葉だったような……。

「カウントダウン……」

「どうしたんですか？　夏神さ――」

あ……！？

気づいた時にはもう遅く、僕は受身も取れずに地面に激突した。数メートルほど砂の上を滑って僕の体は止まり、しばらくの間体が痺れて動けなかった。頭がくらくらして、視界が歪んでいる。吐き

そう……。
頭を振って平衡感覚を取り戻そうと努めたけれど、そう簡単にはいかなかった。どうにかして四つん這いになり、周りを見渡す。皆は大丈夫だろうか。
ぼんやりとだけど誰かがいることは見える。

「左座君！」

明日喜さんだ。こちらを向いて叫んでいた。その隣には大きな雀部、そして上方を気にしているのが夏神。良かった皆無事だ。

「な、なんだこりゃあ！？　爆発でも起きたのかぁ！？」

雀部が素っ頓狂な声を上げた。

「黙って」

夏神が演技なしの口調で雀部を制した。雀部と明日喜さんは夏神が突然変わってしまった様に感じたのだろう、ギョッとした目で夏神を見つめた。そのこと自体は僕にとっては今更驚くことではないけれど、この状況が呑み込めないので混乱していた。

「な、何が……？」
「……舞草が来た！」

第十七話　襲撃

「えっ……？」

まさか。

「上だ。この建物を利用して潜んでいるんだ！」

夏神がこんな大きな声でものを言ったのは初めてだった。それだけ状況が緊迫しているということだろう。

立てるほどに回復したので、急いで夏神のもとに駆け出そうとした。しかし、

「動くな！」

と夏神の一言で僕の足が止まる。

「どうして！」

「とにかく今は動くな！」

そう言いながらも夏神が注意しているのは建設中の建物の方だ。舞草がこの中に隠れている、とすれば鉄柱の落下も舞草の攻撃なのだろうか。待ち伏せされていた……？

夏神は携帯を取り出して連絡を取ろうとする。

「……圏外？　馬鹿な」

首をくるりと動かして夏神が僕を見る。

「来るっ！」

夏神が視界から消えて、続いて僕の視界がぐるりと一回転して光景が移り変わった。

これが僕を抱えて移動したのだと理解できたのは後々のことで、今はその場の流れで気に留めなかった。

舞草の衝撃波が地面を抉り、風圧で飛んできた砂埃で僕は目を閉じた。怖い、直撃したらと思うと。

「貴様……一体何だ！？」

「はっ？」

目を開いて確認する。夏神が肩で息をし、汗を掻いている。そして怒っている。

怒っている？　僕に対して？

「どうしてこんなに重いんだ！」

「え？」

意味がわからなかった。でもそんなことを気にしている時じゃない。

「えっと、雀部と明日喜さんは？」

「……そこにいる」

夏神は衝撃波から僕を守るために雀部と明日喜さんを置いて来てしまっていた。

「二人を放っておくのか！？」

「私だけでは三人も一緒に運べない！」

そうか、どんなに超人的な力が出せる夏神と言えど両手で持てる数には限度がある。けれどそれでは同時に狙われたら、二人は救えない。

「舞草は二箇所を同時に攻撃できない。広範囲攻撃をすれば関係ないが、それでは自分も巻き込まれるだろう」

僕の心中を察したのか夏神が的確に言った。

「だから助けられないことはないが……それではこちらから攻撃できない。協力してもらうぞ」

「きょ、協力？」

「そうだ。私の能力には制限時間があるのは知っているだろう。時間が経てば不利になるのはこちらだ」

「どうすれば……？」

「囮になってもらう」

またか。あの時は逃げていろと言われていただけだったけど、こう直接言われると気が引ける。

「舞草をビルの外へと誘き出す。あちらへ走れ」

夏神は雀部たちのいる方向とは逆を指差した。

「いいか、助かりたければそうしろ」

そう言って夏神が居なくなった。

今度は舞草が雀部たちを攻撃したのだった。衝撃波が命中する前

に高速で二人を運び、退避させる。夏神たちは鉄柱の横まで移動していた。
僕との距離が離れた。次に狙われるのは僕……ええい、畜生！
夏神が示した方へ走り出した。何処まで行けばいいのかわからないけどもう知ったことか。走れるところまでいってやる！

「よし」

指示したとおりに走り出してくれた。
私の後ろには一般人が二人。舞草のことだから、時間稼ぎに、一人になった左座誠人を攻撃するのは間違いない。
この建物の構造上、あの位置にいる目標を攻撃するには少なからず外に体を出さなければならない。目測が誤っていなければこの場から奴が見えるはずだ。
案の定舞草は左座誠人を狙い、ほんの僅か、腕だけだが姿を見せた。場所さえわかれば攻撃方法など幾らでもある。
私は地面に突き刺さっていた鉄柱を引き抜き、構えて、舞草に投げつけた。

ゴオ！　と新幹線が通過したような音がして、ハッと建物を見上げた。舞草がいた。
そこに鉄柱が飛んできて今まさに当たってしまうかというところで、舞草は右手を振るって弾き返した。凄まじい、金属同士が激突した轟音の後、弾かれた鉄柱はクルクルと回転しながら軽い枝なんかみたいに飛んでいってしまった。

流石に鉄柱ほどの質量を持つ物を弾くとなると衝撃を相殺できないようで、足場からバランスを崩して地に落ちだした。
鉄柱は、多分夏神が投げたのだろう。彼女以外にそんな芸当ができる人間がいるとは思えない。沢山いては困る。
落下した舞草は空中で体位を整え、足からゆっくりと着地した。ふわりと。
鉄柱を投げられ、それを難なくかわし、十メートル以上ある場所から落下して無傷。こんな奴……倒せるのかよ。
しかも舞草が着地したのは僕のすぐ傍だっ。なんて運の悪い！
逃げなくては……！
僕は夏神のところに行こうとするけど、

「小僧……また会ったな」

僕を凍りつかせる声。冷や汗が噴き出し、足が動かなくなった。身の毛がよだつとはこのことだ。体が、痛いほどに硬直した。

「しまった……！」

夏神が駆け出すけど、その瞬間に舞草が衝撃波を雀部たちに放って動きを封じる。

「……お前から死んでもらう」

全力で振り返り、舞草を目視した。右腕で僕に狙いをつけていた。やられる……。

「……」
「さよならだ」

地面を吹き飛ばすような一撃を喰らったら、それこそ僕は……死ぬ？

くい、と舞草の右手に力が込められる。

ああ、終わった……。

「なんだと！？」

どうした。

「小僧……お前は何者だ！」

「はっ？」

あれ？　さっきも同じことを言われた。夏神に……どうなっている？

衝撃波は来ず、舞草が驚愕の表情で僕を睨んでいる。

しかしもう一度僕に腕を向ける。

「またか！」

な、何が？

「左座君！　早く立って逃げて！」

明日喜さんの声だ。立って？

気付くと僕は知らない間に地面に座り込んでいた。逃げるには立たないと。けど足に感覚がない。ちゃんと足は付いているから、竦み上がってしまったのか。小心な！

そこで舞草が僕を見ていないとわかった。舞草の目は夏神たちに向いている。何かを見咎めたのか、呟いた。

「あれは……」

夏神を見ているのか？　にしてはおかしい。今の今まで認識していなかったような驚きが、舞草にはあった。

舞草が奥歯をかみ締める。そして再び僕を見た。けれども、瞳が違った。

「お前は……“左座”なのか」

「……何？」

次の言葉は僕の予想を遥かに超えていた。

「……両親は……健在か？」

「はい？」

全く話が掴めない。何が言いたいのだろう。僕はつい敬語になってしまった、僕を殺そうとしている相手に対して。

「舞草ァァアアア！」

夏神が突撃していた。

両手で鉄柱を振りかぶり、空中に跳び上がる。舞草は瞬時に防御体制へと切り替え、振り下ろされた鉄柱を容易に両断した。

「むっ！」

夏神は鉄柱を投げ捨て、僕の首根っこを掴んで後退した。

「うげっ！！」

僕を助けるために仕方ないとは言え、首だけを持たれていれば急に動かされた時に衝撃がそこへと集中する。首に激痛が走った。

「ぐう……」

「すまない」

夏神は僕を持って雀部たちのいる場所まで跳んで移動していた。僕は痛みで首を押さえる。後ろから、大丈夫か、と雀部の心配する言葉が聞こえた。

「これは……」

三人を同時に運べないという理由で、僕と二人を散けて置いておいたというのに合流してしまった。

もし攻撃されれば、三人とも助けるのなら夏神が盾にならなければならない。それができないのなら、多分夏神は二人を見捨てるだろう。それは……駄目だ。

舞草は追撃の大チャンスだというのにどうしたことだろうか、自分の右手を見つめていた。どうかしたのならこちらが逃げるチャンスかも。

と思いきや、夏神も自分の右手を凝視していた。戦闘のプロである彼女がこの機を逃すなんてこととは……ないよな。

「なあ、今が逃げる好機じゃあ……」

ドンッと目の前の地面が吹き飛んだ。礫が飛び散って、僕たちに当たってしまう。けれど死ぬほどのものじゃない。

「……うわっ」

「きゃあ！」

「のうわ！」
「くっ！」
舞草はどうもしていない。まだまだ戦闘を続けるつもりだ。雀部と明日喜さんも見られてしまったのだから、僕たち全員が標的だ。容赦がない。
「ここで仕留めてくれる！」
どうも流されてしまっている感じがして、殺されそうになった時でさえも、ぼんやりとした気持ちだった。舞草が意思表示し、それで舞草が僕を殺そうとしていると漸く実感が沸いた。
ぐっと両手に力を入れる。どう考えても今の状況は絶望的だ。何か打開策はないのか……？

こんな時には、助っ人がやって来る。
戦隊物とか、ヒーロー系の特撮やアニメでの展開は、そうだ。だけど、ここはそんなテレビの中じゃあない。
でもここには超能力者とか、あり得ないような人間が二人もいる。となれば、あり得ないことがあり得ることだってあってもいいだろ！
すがる物がもう何もないのだから……、いや、ちょっと待て。
僕はポケットからお守りを取り出した。袋の中に何が入っているのかは知らない。木か何かで、なんの効力もないだろう。
僕の家庭は神道ではないけれど、神様、どうか、助けてください！
ギュッとお守りを握り締めた。
『その願（ザー）……聞き届（ザー）……り！』

「えっ？」

心の中に直接、声が聞こえたような気がした。

「何？」

夏神が上空を見上げる。

キラリ。紺青の空が一点だけ煌いて、そこから何かが急降下してきた。そしてその速度を保ったまま、謎の物体は舞草の頭上へと落ちていく。

「なっ！」

さながら隕石でも落ちてきたのかと思った。舞草は飛び退いて物体をかわし、物体は地面にめり込む。風圧のような物理的な現象は発生しなかった。物体はゆらゆらと浮き上がって、めり込んだ部分が全て抜けると空中に静止した。

落ちてきたのは、正八面体の形をした赤い物体。表面には赤と少し黒ずんだ赤で幾何学模様が画かれていた。

「エイトセンス……！」

舞草が一歩後ずさる。

『ふう……（ザーザザッ）で間に合……（ザー）ぜ。っ……（ザザ）、ブロ……（ザザッ）ムめ、人使……（ザー）荒い……と、俺は人じゃ……（ザザ）ったな……（ザー）はは』

「お前がいるということは……」

「そうね、私がいるということよ」

僕の後方から女性の声がして、それは聞いたことのあるペネロペ

さんのものだった。
僕は振り返る。
そこにいたのは、身長は小学生並みの少女だ。いや、女性？
肩まで届くブロンドの髪に、不似合いなスーツ。子供が背伸びして大人に見せかけようとしているようにしか見えなかったけど、手に持っている黒い短機関銃がそうではないと示している。

「ハァイ。お久しぶりね、海藤。じゃなくて、舞草兵駕」
「チェリー、ブロッサム……」
「あら？　リリちゃんは本名で呼ぶのに、私はあだ名なの？　悲しいわ」
「お前が本名を明かしていないだけだ」
「そうだっけ」
『そ……よ』

エイトセンスと呼ばれた物体は音を発することなく、僕の心に自分の声を伝えているようだけれどノイズのようなものが邪魔してうまく聞こえない。他の人の反応から見て、多分この場の人間全員の心に語っているのだろう。どうやら、僕に対してはいい加減みたいだ。

「どうしてお前がここに？　私の陽動に引っ掛かっているものとばかり思っていたが」
「あんなちんけな陽動に？　馬鹿言わないでね。まあ、部隊の連中はどうだか知らないけど」
女性は僕たちの隣まで歩いてきた。
「大丈夫だった？　夏神ちゃん。舞草が電波の妨害工作をしていたから危険を伝えられなかったわ」

「はい。ペネロペ」

やっぱりこの人がペネロペなのか。

「左座君も、友達も無事ね。急いで駆け付けて良かった。間に合わなかったら私の責任だろうし」

『勿……お前……任だ』

「五月蝿いわよ」

なんでペネロペさんはこんなに余裕なのだろう。そしてあのエイトセンスとかいう奴もよくわからない。

「ねえ、私がここにいるということは、わかるわよね」

「む」

「すぐにでも応援がやって来るわよ。それでもいいのかしら？　それとも私と夏神ちゃんを相手にしてみる？」

「いや……よしておこう」

舞草はそう言うと、自分の足元を攻撃して砂煙を巻き上げた。風が全方位に吹き荒び、僕は腕で目を覆う。少しでも気を緩めると吹っ飛ばされそうだった。

『目晦……だ！　追……！』

「……いえ、いいわ。事後処理があるしね」

煙が晴れると舞草の姿はなく、エイトセンスはペネロペさんの隣に移動していた。

「護衛対象がまた増えちゃった。はあ……そろそろ本部から応援を呼ぼうかしら」

ペネロペさんが雀部と明日喜さんを横目に、ため息混じりに言った。

「これからちょっと時間あるかしら。二人にも説明しなくちゃならないだろうしね」

「ええ……」

「ああ、あるけど……」

二人がおずおずと答える。

「そう、よかった。ここは部隊の奴らに任せて、そこのファミレスにでも行きましょう？」

第十八話　迷惑な客

ファミレスでは客が全席の五割ほど入っていて、僕らは店内の角の席に座っていた。
僕の隣には雀部、その隣に明日喜さんが座り、僕の席は窓際だったので外を眺めていた。ペネロペさんが二人にすべての事情を説明している間が暇だからではなく、もしかして逃げたと見せかけた舞草がまた襲ってくるのではないのかと不安で、気を張っていたのだった。
夏神はテーブルの向かいに、ペネロペさんの隣に一言も話すことなく座っているだけだ。でも、僕と同じように外を警戒している感じがした。

「……というわけなのよ。と言って一発で理解できるかしら」
「む、難しいですね」

雀部が言って、コップの水を一口飲んだ。

「でしょうね。ややこしいからね」
「それじゃあ、俺と万里ちゃんも危ないということですか」
「そうなるわね」

雀部は注文してあったフライドポテトの一本を取って、食べた。

「雀部君はあんなことがあったのに結構落ち着いてるのねぇ」
「ああ、あまりに突然なんで、よくわかってないだけです」

そう言いながら雀部は手前にあった鳥の照り焼きを一口大にナイ

フで切って、フォークで口に運んだ。こんな状況でよく物が食えたものだと僕は呆れながら、計り知れない雀部の図太さに感服もしていた。

「明日喜さんは大丈夫かしら？」

雀部を挟んだ隣にジッと座っていた明日喜さんの顔はペネロペさんを向いているけれど、目の焦点は合っていないようだ。何か考え事をしているみたいだった。

「明日喜さん？」
「はいっ！？」

瞬きを数回して、明日喜さんが我に返った。ペネロペさんは心配そうに声をかける。けれど明日喜さんは、お気になさらずにどうぞ続けてください、とさらに気になってたまらなくさせる台詞を言って、別の方向を見つめた。

「ショックが大きいみたいね……医者を呼びましょうか？」
「いえ、いいんです。ちょっとだけ……疑問があるだけですから」
「疑問？　言ってみて」
「……どうせ、言ってもわかりませんよ」

えっ？

明日喜さんが今までにないような冷たい口調で言った。確かに暗い女子ではあるけど、優しい強い奴だと思っていたのに。

ペネロペさんもそれ以上追及せず、オレンジジュースをストローで飲んで、雀部に対して続けた。

「だから、二人に護衛をつけることにしました。部隊の三班と四班

をそれぞれ貴方たちの傍に潜ませます。その分舞草捜索の人数が減るけど、本部の応援を悠長に待っていることはできないし」

ペネロペさんはポテトを一つ摘む。

「夏神ちゃんは引き続いて左座君の護衛ね。何か質問があるかしら」

はい、と雀部が手を上げる。

「どうぞ」

「お名前は何ですか」

「ああ、そう言えば名乗ってなかったわね。私はアイリッシュ。ファミリーネームは秘密」

僕は即座に偽名なんだろうなと気付いた。舞草や夏神に本名を教えていなかったのに、一般人にそう易々と教えるわけがない。それにペネロペさんの顔立ちは純東洋系でハーフのようには見えなかった。まあ、推測であって確証はなにもないんだけど。

「後もう一つ。アイリッシュさんは……年上なんですか」

その質問にペネロペさんが顔をしかめて、不機嫌を露にした。

「ええ、そりゃあ、体は小さいし、胸も、お尻も小さいですよ。ガキに見えるだろうけどね、私は二十四歳、ＯＬ、独身、彼氏大絶賛募集中だよ！　くそが……ふざけんなよ、そんなにガキに見るのかよ！　私は一人前の女じゃあ！！」

ペネロペさんが突如キレたので、僕はビクリと背筋を伸ばした。ペネロペさんは両手をテーブルに叩きつけ、その衝撃で食器が数セ

ンチほど浮いた。辺りが静まり返り、鼻息荒く怒っていらっしゃるペネロペさんを夏神が宥めた。本当に大人なのか……？

「す、すみませんでした」

雀部が素直に謝る。

「うむ……私も大人げなかった。これからは、女性に年齢を訊くのはタブーだと知れ」

「はい……」

うな垂れる雀部。ひそひそとこちらのことを他の客が話している、ような気がするのは気のせいではない。

「僕も質問があるんだけど」

「あん？」

うっ、と僕は引いた。ペネロペさんは怒っているのだろうけどその表情が小さい子供が駄々をこねているようにしか見えないのだ。僕は気にしない風を装って、

「舞草が、僕に何だか不思議なことを言ってきたんですけど」

「それは？」

“両親は健在か”と聞いてきたんです」

ペネロペさんは一瞬目線を下に向けて、そして元に戻して、

「わからないわね。一体どういうことかしら」

と惚けた。

惚けた……？　どうしてそう思うのだろうか。ペネロペさんは何かを知っているけれど、それを隠している。そんな気がしてならない。

「……そうですか」

「もしかすると、両親を人質に取るぞっていう脅しだったのかもしれないわ」

あの僕を必ず殺せる場面でそんな脅しをする必要が何処にあるというのだろう。でも結果的に僕を殺しはしなかったし……。

「それと、舞草は僕を殺せたはずなんです。なのに殺さなかったんです」

「どういうこと？」

「舞草は左座誠人を殺すことができるチャンスを得ていた……にもかかわらず、能力を使わなかった」

夏神がここに来て初めて口を開いた。

「ふーん……なんでかしらね。推測もできないわー」

心なしか口元が微笑み、台詞が棒読みだった。

「あー、左座君と夏神ちゃん。そんなに神経を尖らせていなくても大丈夫よ。私のエイトセンスが常時見張ってるから」

「エイトセンスって何ですか？」

僕は気になって尋ねた。すると若干苦い顔をしてペネロペさんが答える。

「私の能力」
「……？　前に言ってたのは心をリンクする能力とか何とか」
「それはちょっとだけ嘘。それはエイトセンスの能力」
「……？」
「鈍いわね。私自身の力は“エイトセンスの召還”であって、“精神干渉”自体はエイトセンスの力なの」
「……はあ」
「理解してない顔ね。いいわ、実際にやってみれば早いでしょう。エイトセンス」
『何や……（ザザザー）俺様はファミレス上……（ザザッザ）ートルに待機……（ザー）よっと』
「うわっ声が！」

雀部が過敏な反応を見せる。驚いて食べようとしていた鶏肉をフォークごと落としてしまった。

「……ええっと、よく聞こえませんけど」
「は？　よく聞こえない？　そんなことがあるもんですか。エイトセンス、もう少しボリュームを上げてみて」
『了……（ガガ）』
「ぐわっ！」

僕以外の全員が耳を押さえ、なにやら苦しんでいるようだ。一体どうしてしまったのか、僕は一人だけでアタフタする。
舞草の攻撃かと店内や外を見回すけれどもそれらしき姿はない。

「お、音量上げ過ぎだって……」
「耳塞いでも五月蝿ええ……」
「テレパシーだから防ぎようが……」

「おい、どうしたんだよ皆」
『……んすま……加減が……いからな』

漸く苦しみから解放されたのか、皆は手を離して一度深呼吸する。ペネロペさんは虚空に向けて怒声を上げていた。そして他の客たちから再び注目を浴びる。そろそろ店員が注意しに来そうだ。これじゃ、ファミレスにきたのは失敗だろ……。

「ふう……まあ、これで本当にエイトセンスの声が聞こえていないことがはっきりしたわね」
「……そうですか」
「一つ聞いておくけど、左座君は能力者じゃないよね？」
「ええっ！？　そんなわけないですよ」
「それでは考えられるのは三つね。左座君が自覚しないタイプの能力、つまり自動発動系の能力者か……」

ペネロペさんは開いていた右手の人指し指を左手を使って閉じた。

「精神干渉系能力を持つ何者かが妨害しているか……」

次に中指を閉じる。

「“賢者の石”を所持しているかの三つなんだけど」

最後に薬指を閉じるけれど、小指を立たせたまま薬指だけを折り曲げるのができずに攣りそうになったのか、小さく声を出して右手をぷらぷらと振った。

「“賢者の石”ってあの有名な漫画に出てくる、等価……」
「違うわ」

雀部の言葉を間髪いれずに否定する。

「これは詳細を言うと絶対に、有無を言わさず私の首が飛ぶからあまり教えたくないんだけど……簡単に言えば、“能力を無効化させる石”のことよ」

「へえ……そんな物があるんですね」

「一番可能性があるのは三つ目ね。とにかく、今の持ち物をすべてテーブルに出しなさい」

「いいですけど」

僕はポケットに手を突っ込んで、財布がないことを再確認してしまい積極度が急降下する。

はあ。結局持っているのはこのお守りだけ……とテーブルにお守りを置く。

「これだけ？　うわー……これは怪しすぎるわ」

ペネロペさんはお守りを手に取り、重さを手で調べて、袋を開けようとした。罰当たりな！

『待て、ブロッサム！！　不用意にそいつを開けるんじゃない！』

僕にもはっきりと声が聞こえた。

「何？　何か言ったの？　エイトセンス？」

袋の開け口にペネロペさんが力を入れると、袋の中から光が漏れ出し……その光がペネロペさん目掛けて発射された。

第十八話　迷惑な客（後書き）

評価していただきまして、ありがとうございます。

そしてユニーク２０００とアクセス５５００を突破しました。本当に感謝です。

第十九話　賢者の石

「あべしっ」
「痛っ」
「うわっ」

僕は出し抜けに起こった出来事に、無意識に身をかがめてテーブルの中へ逃げ込もうとしてガラスに頭をぶつけた。
店内は静まり返って、他人の息を飲む音さえ聞こえるほどだった。
まさか最悪の事態になっていたら、僕は百二十パーセントトラウマを抱えるだろうな……。かといって見ないのも、もどかしい。
ゆっくりと頭を上げ、差し向かいにいるはずのペネロペさんへ視線を向ける。

ペネロペさんは無事だった。

でも……本当に無事かな？　ペネロペさんは夏神の掌底をまともに食らって仰け反っていた。もちろん命中する直前に頭から逸らせるためなんだろうけど。
壁には、ペネロペさんに当らなかった代わりにバスケットボール大の黒く焦げた穴が開いていた。本当に最悪の事態でなくてよかった。
まあ、さすがにこれ以上は無理だろう。ここにいるのは。
店の奥から初老の店長らしき男がこめかみに青筋を浮かべながら、どすどすとやって来た。

「私は、子供じゃないっての……」

「何時俺が皆の保護者になったってんだ？」

ペネロペさんと雀部がうな垂れている。

店から追い出されて近くの公園に行くことにしたのだけど、着くやいなや二人はブランコを占領してブルーモードに移行。

雀部ほどの身長の男がブランコに座っているのは非常に不似合いだ。逆にペネロペさんは奇妙なほど様になっている。

僕と夏神と明日喜さんはどうしようもなく、ただ二人の精神的回復をベンチに座って待っていた。

回復したのは日が暮れて暗くなった後で、無駄に時間を過ごしてしまった。

「やっぱりコレは賢者の石だわ」

「そうなんですか？」

「だって持った途端に気だるくなったもの。能力者が持つとそうなるの。となると、さっきのアレは誰かに石を取られないようにするための防衛機能だったのね」

ペネロペさんはお守りの中に入っていたいぶし銀の十字架のペンダントを弄くりながら言った。神社のお守りの中に十字架を入れるとは、さすが日本。宗教の隔たりなんて関係ないようで。

「……それにしてもここまで作りこんである賢者の石は初めて見たわ。石っころの形のやつしか知らなかったから」

「珍しいんですか？」

「それは、もう。賢者の石はとある場所で無尽蔵に取れるのは取れるんだけどね。人体に有害で、その毒素を取り払うのが難しいの。しかも毒素を取った後の石を加工するのは、国家機密レベルの技術と国防予算数年分の費用が必要なのよ」

「へえ……」

僕はなんというものを持っていたのだろうと少し身震いした。
「で、どこで手に入れたわけ？　拾ったってわけじゃないでしょう」
「さあ……覚えていないんです」
ペネロペさんは目を細めて僕を見てから、空を見上げた。
「……だろうね」
ぼそり、とペネロペさんが呟いた。
「え？」
「ん？　何でもないわよ」
冷たい目で見放しながら言った。
どうしたのだろう、様子がおかしい。まさか何か知っているのだろうか。
「何か、僕に隠してません？」
「別に何も。私思わせぶりに発言するのが癖だから、気になったのならごめんね」
追及を逃れるための言い訳。わかりやすい。
「そうですか……」
でも僕にはわかっていてもそれ以上踏み込む勇気がない。こういうとき、本当に、自分が嫌になる。

「はいこれ、返しておくわ」
ペネロペさんが差し出した賢者の石を僕を受け取った。ネックレスなのかチェーンが付いているので僕はそれを首から掛けた。
「さて、と」
ペネロペさんはブランコから立ち上がって、背伸びをした。
「雀部君と明日喜さんは私がエアーバイクで送ります。夏神ちゃんと左座君は二人で家に帰ってね。護衛部隊が見張ってるから大丈夫」
「エアーバイクって何ですか？」
ブランコから降りた雀部が首をひねりながら訊いた。
「今呼ぶから待ってて」
ペネロペさんはごつい腕時計についているいくつかのボタンのうち、赤いボタンを押した。するとしばらくした後、上空から何かが落下してきた。
それが地面に近づくとヘリコプターでもやって来たのかというほどの風が起こり、僕はその風が巻き上げた砂埃の直撃にあった。ついでに口の中にも入った。
「おお、すげえ！」
「でしょう」
そこにあったのは、なんと言えばいいのか、タイヤのない黒いバイク？　が地面から数十センチの空中に浮遊していた。全体的に丸みを帯びた形で、前部にはバイクのものと大差ないハンドルが付い

ている。後部は大き目の座席があった。

「特別に三人乗りバージョンを呼んでみました。さあ、乗って乗って」

ペネロペさんは慣れた感じでエアーバイクに飛び乗ると、雀部と明日喜さんを手招きした。雀部は瞳を輝かせながら、明日喜さんは嫌々ながら、バイクに乗った。

その体で運転できるのかと訊いたならペネロペさんに切れられるのは分かりきった事なので、あえて問わないでおこう。

しかしその心配は無用で、ハンドルが自動でペネロペさんの体の位置に合わせて移動した。つまり、ペネロペさんが運転するにはハンドルの位置が高すぎたので、下りてきたのだ。

「それでは、行くよー！」

「おう！」

ペネロペさんがハンドルを握り締めるとバイクが、にゅっと生えてきたガラスで覆われ、そのまま垂直に飛び上がった。そしてある程度の高さまで上がると、月にシルエットを映しながら空を駆けて行って消えた。

やはり起こった強風によって舞い上がった砂が、また僕の目に入ったことは大目に見ることにします。

「……なんか勝手だな」

「……すまない」

夏神が謝る事じゃないんだけどな……。

「とにかく、帰るか」

「そうね」

●

（素は鈍いくせに変なところで勘がいいのよね）

ペネロペはエアーバイクで空を飛行しながら左座誠人について考えていた。後方では雀部健太郎が奇声を上げて興奮しているが、明日喜万里がそれを止めさせようとしている。

（あの賢者の石……やはり渡したのはあの人たちか……）

ペネロペはハンドルを回して、速度を上げる。

（賢者の石がきっかけで記憶を取り戻したりすると厄介だわ。やっぱり鍵を閉め直すか……でもそれはそれで面倒だし。それに、何時までも隠しておけるものでもないからねー。どうしたものかなー）

第二十話　無事、帰還（前書き）

後半の視点は夏神です。

第二十話　無事、帰還

「なんだか長い道のりだった気がする」

僕は家の前に帰還していた。舞草の襲撃のせいで肉体的にも精神的にもへとへとだ。早くソファーにでも座って休みたい。

「あれ」

玄関のドアノブを回そうと掴んだけれども、鍵が掛かっていた。

「母さんはいないのか……ってまさか！」

母さんのいない理由、それを思い当たって僕は玄関の傍にある傘立ての下を確認する。……玄関の鍵が置いてあった。

それを手にとって僕は少しだけ安心した。家族の決まりで、誰も家にいなくなる時には鍵をここに置いておくのだ。それがなされているということは、母さんは自分の意思で出かけたということだ。

舞草に連れ去られたのかと思ったけど取り越し苦労だった。でもやっぱり気になる。自分で出かけたとしてもその後に襲われることだってある……。

「どうした？」

「あ、いや、なんでもない」

夏神は僕が鍵を持ったまま立っているだけなのを見て、気になったのだろう。

「言っておくが、お前の家族にも護衛が付いているからな？」
びっくりした。夏神も心が読めたのかと思った。前も思っていることを先読みしたような言葉を言ったし、もしかして……。
「読心能力があるのか……？」
「何を言っている。能力者に能力は一つが原則。私には心を読む力なんてない」
「でも今、僕は家族の心配をしていたんだけど」
僕はドアの鍵を開けた。
「お前の顔を見ればよく分かる。はっきりと表情が変わるからな」
「なるほど……ってそんなに？」
「ああ」
本当かよ。僕って心が顔に出る人間だったのか。
僕は新事実に首を傾げながらドアを開け、入ってすぐにあるスイッチで真っ暗な廊下の明かりを点けた。
靴を脱いで自分の部屋に向かう。今日はもう疲れたので寝たい。
「休むのか」
夏神が訊く。
「勿論。夏神はいいのか……ああ、いらない質問だったな」
「私が見張っておくから大丈夫だ」
「……いつも有難うございます」
僕は自分の部屋に入るなりベッドに倒れこんだ。疲労がピーク…

…もう寝てしまおうか。
仰向けになり、瞼を閉じる。ああ、吸い込まれてく……。

●

ふむ。戦闘中に左座誠人の体が異様に重かったのは賢者の石のせいだったか。
私の身体能力強化が打ち消されていたようだ。賢者の石に直接触れていないために能力を弱められただけだろうが、それでもあれは十分に有用だな。
私はリビングのソファに腕と足を組んで座り、少し考え事をしていた。
しかし……噂に聞いていたとはいえ、実際に見ることができるとは。あれがあるだけで護衛の労力が違ってくる。この次戦うことになれば、反撃の手も考えておかなければなるまい。

ん……？

私は自分の着ている服のにおいを嗅ぐ。
……汗臭い。シャワーでも浴びようか。
現在、左座家の人間は左座誠人だけだ。家族一人につき二人護衛がついているとして、今は四人ほどがここを見張っているはず。四人いれば奇襲を受けることはない。
私は立ち上がって、風呂場へ向かった。
まずは風呂の中に入って洗われている事を確認する。この家では几帳面な主婦がいるため、掃除は隅々まで行き届いている。
脱衣所に戻って服を脱ぐ。脱いだ服は洗濯機の中に入れておく。正直、この洗濯機というものがよく理解できない。手で洗えばいい

のではないか？　ただグルグル回すだけのこの機械が人の手の動きに勝るとは如何しても思えない。
たまに機械音痴だと言われることがあるが、それのせいだろうか。
風呂場に入り、シャワーの栓を開いた。

う、冷たい。

肌に当る水は温かくなく、冷水だった。冷水など訓練で幾度となく浴びてきているが突然であればやはり驚く。
お湯が出るまで暫く浴び続けてみたのだが一向にそうならない。
そういえば給湯器を起動していなかった。
私は一旦風呂場の戸を開き脱衣所に出る。
その途端、脱衣所と廊下を隔てる扉も連動して開かれた。

「……！？」
「あ、夏神さん」

即座に取っ手にかけられていたバスタオルを自分の方へ引き込み、そして入ってきた人物を見て、安堵のため息をついた。

「妹さん……」
「シャワーでも浴びていたんですか？」
「い、いや」
「給湯器のスイッチ入れ忘れたとか」
「ええ……」

目線を彼女から逸らした。

「じゃあ、私が点けますからごゆっくり」
「ありがとうございます」

「いやあ、それにしても綺麗な体ですね」

彼女はそう一方的に呟いて、この場を去ってしまった。

……。

綺麗？

か、顔が熱い。

ど、動揺しているのか！　私が！

私はバスタオルを落としてしまったのにも気づかず、数秒間固まっていた。

給湯器の必要はなかった。

結局私はその後、冷水で体を冷やすことにしたからだ。

第二十一話　はったり

あたりの暗さとは真逆に、橋の上が明るく鮮紅に染まっている……のが辛うじて見える。ちらちらと揺らめいているのは炎だろうか。なら事故でも起こったのか……？
あれ……僕は何処からこれを見ている？
橋は僕の頭上、少し前面にある。橋が造られているのは大抵、下に川など道を寸断する水路があるからだ。ということは……僕は……

ゴボッ

視界が途端に霞んだ。光は先ほどより淡くなり、僕の周りは青い空間で包まれている。……これは、水の中か！
その事実に気付いた瞬間に、僕は水面へ向けて全力でもがいた。息が苦しい。水が入ってきて鼻がつんとする。状況が呑み込めずに水中で一度空気を吐き出してしまった。もう自分の中に残っている酸素は少ない。
手で水を押す。足で水を蹴る。とにかく無我夢中で水面へ手を伸ばした。

「プハッ！」
僕は何とか意識が途切れる前に再び空気を吸うことが出来た。でも安心したのもつかの間、体は元いた場所へ沈んでいこうとする。それに抗って必死で浮いていようとする僕。
今し方見えていた橋の影が遠くに移動している。いや違う、僕が流されているんだ。
僕は残り少ない体力を使って、自分が大切に思う人たちを呼んだ。

「お父さん、お母さん！　ぐっ……」

口に水が入ってきて咽る。浮くバランスを崩したので危うく溺れそうになった。

「ぁっ……！　……おじいちゃん！　……おばっ、うわっ！」

爆音。発生源は燃え上がっていた橋だ。爆風は凄まじく、それが水面を掬い上げて小さな津波を起こした。

小さいとは言っても僕が水面以下に追いやられるのには十分すぎた。顔面に直撃を受け、体は下へ引きずり込まれる。

もう一度浮上する力は、ない。そこで僕は生存することを放棄して、没してゆくことに逆らおうとはしなかった。差し込む光が、次第に消滅していく。

……僕は終わりだ。意識が遠のいていく。

……。

……。

……？

――世界が、ぐらりと、回転する。

「この子は……イグナティの……、まさか！？」

ああ、息ができる。

そう思った瞬間に口から大量の水を吐き出した。どうやら誰かに

助けられて地上で横になっているようだった。

「大丈夫！？　生きてる！　この子を死なせないで。いいわね！」

聞いたことのある声だ。この独特の高い音は……誰だったか。

僕は声の主の姿を目視する。歪んでいたはずの視界は、彼女を捉えると瞬時に視力を取り戻した。

金髪の髪に黒いスーツ。身長は低く、でも僕より高く、子供みたいだ。僕と同じ。

いや、何か違う。

あの人は大人なのだ。でも、どうして知っているのだろう。

それは、僕はあの人と会って、話をしたことがあるから。

上体を起こし、名前を呼ぶ。

「ペネロペさん！」

しかし、ペネロペさんは振り返りもせず炎を乗せた橋へと駆けていく。聞こえていないのかともう一度叫ぶ。でも止まってくれない。

どうしようもないので、ペネロペさんを追おうとするけど足が動かずに頭からこけてしまう。

その時、受身で地面に突いた自分の手を見て気づいた。

小さい。幼児並だった。もしかしてと体を見ると、体も同様。僕は縮んでいた。違う、幼くなっていた。

「これは……？」

僕はどうなってしまったんだ！？　僕の体は、こんなに小さくなんて、ない！

「くそっ、元に戻れ！」

そう叫んだ途端に僕の体はいつもの、高校生の体型に復元された。
これで走れる！
ペネロペさんが走っている方向に、僕も向かった。

「……あっ」

僕は飛び上がった。そしてベッドから転げ落ちる。

「うぐあ。……痛いなぁ」

……夢、か？

僕は、どうしてだか自分でも分からないけど、懐かしい気持ちがして胸から下げていた賢者の石を握り締めた。

●

「私はなんということをしようとしたのだ」

海藤こと本名、舞草兵駕は頭を抱えて木製の箱に座っていた。

「だが……すでに引き返しのつかないことを……」

彼がいるのは左座たちの住んでいる町の郊外にある、一つの廃ビルだった。賢者たちが作り出して、その後放置され、もはや遺跡と言っても間違いではない場所だった。そうはいっても数百年間整備

なしで崩れもしないこのビルは、壁に腐食もなければ骨組みの金属に錆びさえもない。
それゆえに気味悪がられて再利用が躊躇われているのだ。賢者たちの残したオーバーテクノロジーの一つだった。

「まさか、口だけではない、心の通った約束……それさえも忘れていたとは」

舞草は後悔していない。しないと十年前に決めている。決めていたのだ、先ほどまでは。

「……始めからわかっていたじゃないか。犠牲は付き物だと、それでも……」

誰かに語りかけるように、許しでも請うかのように、ただ一人ぽつりと呟き続けていた。

「……全く、人とは変わってしまうものだな」

座っていた箱から立ち上がる。

「犠牲は必要だった。我侭であることも分かっていた。それだからこそ、無用な犠牲は払わないはずではなかったのか？」

舞草は、“左座”とかいう少年のことを思い出していた。能力で殺そうとした、あの少年だ。だが出来なかった。
理由は知れない。だが、よくよく考えてみれば、それも頷ける。

“誠人”だったのだ、彼は。

舞草はそれで正気を取り戻した。しかしながら、引き返せないことだけははっきりとしている。
それに、実は彼はもう目的を達していた。
「後やるべきことは一つ」
舞草は座っていた箱を蹴り飛ばす。箱は舞草の足が当った瞬間に、跡形もなく消え去ってしまった。
「けじめだ」

●

そう、夢。たわいない、非現実。
でも本当にそうかな。前は夢だと思っていたことが、過去の記憶でしたってことがあったし。
僕は明かりはつけず、カーテンを開けて月の光を入れることで代用していた。
あまりにリアルだった。息が出来ずに苦しいところとか、怖さとか、あの遊園地での体験とよく似てる。
ベッドの上に胡坐を掻き、左手で賢者の石を握っている。
けれど、もし、もしだけど……あの夢が僕の体験なら、僕は前にペネロペさんにあったことがあることになる。
それだと、ペネロペさんは僕を忘れているのか、それともあえて知らないふりをしているのかのどちらかになる。
「……ああ、どうなのかな」

どうせ教えてくれることなんてないだろうし、もしそうだったとしてもしらばくれるのは目に見えてる。

僕は、どうする。

ふと、前に決意したのを思い出した。『自分から知りに行こう』だ。

睡を飲み込んで、目覚まし時計の時間を確認する。午後十一時を五分ほど過ぎたところだ。

出来るだけ音を立てないように部屋を出ると、廊下は暗く、下からも光は差してこない。家族は皆寝てしまったようだ。好都合。

僕は夏神の部屋の前まで行き、小さく二回ノックする。すると勝手にドアノブが回り、夏神が僕を中に招きいれた。

「どうした？」

「なあ、僕と夏神は前に会ったことはあるか？」

「……何を訊いている」

パジャマ姿の夏神はベッドに座り、僕は椅子に座った。

「そのままの意味だよ。あの遊園地で会う前に会った事があるかってこと」

「ない」

「そう……」

ぴしゃりと夏神は言った。

「それじゃあ、ペネロペさんに連絡を取ることは出来る？」

「できるが……どうかしたのか？」

「できるの？」

僕は自分の意思がぶれない様に、必要なことだけを、端的に訊いた。

「……ああ。少し待っていろ」

夏神は僕の決意を感じ取ってくれたのか、電話を取り出してコールした。僕は思っていることが顔に表れるっていってたけど、今はどんな顔をしているのかな。あの回りくどい夏神をさっと行動させることができる表情、って何だろう。

今現在は結構、僕は僕に自信を持っていた。

「……ええ。彼が話たいと。はい。かわります」

夏神の携帯を受け取り、耳に当てる。

「もしもし」

『それで、何の用かしら』

ペネロペさんは眠たげな、欠伸混じりの声で言う。

直接的に訊けば絶対に彼女は答えてくれない。分かってる。

「全部思い出しました」

『……！』

電話の奥でペネロペさんが息を飲んだのが聞こえた。

もちろん、全部思い出したと言うのは嘘だ。

はったり。心を読まれるかとも思ったけれど、読心能力はペネロペさん自身のものじゃないと言っていたので通じるかもしれない。

僕は一呼吸おいた。

「ペネロペさん、前に会ったことがありますよね。どうして黙っていたんですか？」
『……何を言ってるのかしら』
「今回ははぐらかそうとしても無駄です！　教えてください。あなたは、誰なんですか」

ペネロペさんの重いため息が聞こえ、

『……本当に知るの？』

と声音の全く違う真剣な口調で、僕に訊いた。

「ええ、僕にはその権利があるはずです」
『わかった。今すぐ、夏神と外に来なさい。そうね、左座君の家の近くにコンビニがあったわね。まずはそこに来て頂戴』
「わかりました」
『……あと、夏神ちゃんにかわって』
「はい」

夏神に携帯を返し、しばらく携帯を耳に当てたまま夏神はジッとしていたけど、「了解」と一言だけ発して通話を終了した。

「行くぞ」

僕は夏神に頷いた。

第二十二話　過去1

僕は外出着のままだったので着替える必要はないけど、夏神はパジャマなのだからと僕は部屋を一旦出た。と、その直後に夏神も部屋を出てきた。

あれ？　と思って振り返ると夏神は既に着替え終わっていて「行け」と手で急かしている。服は今日着ていたものとは違うようだ。一瞬で服を着替えるマジシャンがいるけれども夏神もそういった類か？

そっと家族の誰も起こすことなく家を出る。外に出ると大きな物音も立てずにここまでやって来れたことに胸をなでおろす。そしてゆっくりとコンビニへ歩き出した。

歩きながら、これから一体何がわかってしまうのか、ほんの少しだけ不安に思った。ペネロペさんの口調は計り知れない、巨大な決断を迫られたようだった。もしかして……いや、これ以上考えたって無駄だ。どうせ分かるんだし。

街灯がぽつぽつとしかない道でも月明かりのおかげで見通しがいい。

隣の夏神を見遣ると、なにやら夏神は重たい表情だった。

「どうしたんだ？　表情暗いぞ」

「……お前が言うことか。お前の表情がうつっただけだ」

「え、僕？」

顔を両手で撫でる。そんな顔をしていたのか……うーん、自分の表情筋の制御に自信がなくなってきた。

「それにしても……あのさあ」

「どうした？」
「お前お前って呼ぶけどさ、僕には左座誠人って名前があるんだけど」
「……それでは、誠人と呼ぼう」
「……いきなり名前かよ」
「左座と呼んでは、家族内で区別しにくい」
「それはそうだけど……わかった。名前で呼んでいいから、最低でも君は付けてくれよ」
「了解した。誠人君」

自分で言ったのは何だけど……いざ名前で呼ばれると体がむずむずする。夏神が異性だからだろう。女の子から名前で呼ばれるのは初めてだし。

「……す、すまん」
「何故謝る。誠人君」
「それ語尾にするなよ」
「……要求が多いな。誠人君？」

夏神の表情わずかに綻んだ。ふう。夏神がずっとあんな雰囲気だったら近くにいるだけで滅入ってしまうな。

コンビニに到着すると、そこの入り口近くにコーヒーを飲んでいるペネロペさんが立っていた。

「来たわね。こっちよ」

コーヒーを飲み干し、ごみ箱にそれを投げ入れてからペネロペさんは僕たちを誘導した。
コンビニの裏に回るとそこには前に雀部たちを乗せた、エアーバ

イクが停められていた。真っ先にペネロペさんはバイクに跨った。

「乗って」

「どこへ行くんですか？」

「いいから、乗りなさい」

鳥肌が立った。ペネロペさんはその容姿に見合わない凄みを醸し出して、今にも空気が爆発してしまいそうな緊張を作っていた。

僕と夏神は無言で乗り、ペネロペさんは即座にエアーバイクを発車させた。足元からガラスがせり出してバイクを包み込む。

数分ほど空中を走行した後、ペネロペさんは様子を伺うように下を覗き込み、バイクを包んでいたガラスを解除した。同時に猛烈な強風が僕に衝突した。

「うおっ」

バランスが崩れて落下しそうになったけれど、夏神が後ろから支えてくれていた。

「た、助かったよ」

「しっかり掴まっていろ」

「ご、ごめん」

掴まれと言ったって前には背の低いペネロペさんしかいない。掴まろうとすれば肩を持たなければならず、安定性に欠ける。もしくは胸に手を回すか。さすがにそれは。

「ほら、二人とも降りて」

僕が落ちそうになっていた間にエアーバイクはもう着地していた。

場所は……見渡しても近くに明かりがない。人もいない。ここは、どこかの川の土手のようだった。草が土手を覆っていて、砂利と砂で河原の境目ができていた。

「見覚えがある。ここは……」

そう、夢で見た場所だ。ということはと、目を凝らして辺りを見回すと夢で見たものと全く一緒の橋を見つけた。

「あれは……」

「あの橋は覚えてるようね」

ペネロペさんは土手に座り込み、腕時計をいじった。するとエアーバイクはひとりでに動き出し、どこかへ飛んでいった。

「座りなさい、二人とも」

僕はペネロペさんと一メートルの距離を開けて座った。近づきたくないと思うほどに近寄りがたかった。これでも努力したほうだ。夏神はペネロペさんを挟んだ向こう側に座った。

ペネロペさんは目を閉じ、すっと息を吸い込んで、

「二人に聞いてほしい」

と力強い芯の通った声で切り出した。

「始めに言っておくわ。これは世界でも知る人間はほとんどいない特S級の機密情報よ」

「……？」

「……つまり、知っているというだけで常にあなたの周りに監視が

つく。口外でもしようものなら抹殺されるわ」
「……え？」
「こう見えても私は組織の中でもトップのほうの人間だから、監視はないんだけど。それでも地位が降格するのは間違いないわね」
僕はあまり意味が分からず、首をひねった。どうしてそんなことを言うのか。
「あなたのプライベートなんてものは完全になくなる。それだけじゃない、家族や友達まで監視される。この情報を持つものは世界の危険因子だから。それでも……聞く？」
ペネロペさんは目を見開いて僕を睨み付けた。
卑怯だ。
僕が好奇心だけで聞こうとすれば、周りの人たちにまで被害が及ぶ。聞くなと、最後の最後で、ここまで連れてきておいて、脅しているのだ。それでも、それだからこそ、何故それほどの情報が僕に関係があるのか。それを知る権利は消えてはいない。
「……それでも、聞きます」
ペネロペさんは深くため息をついた。
「いいのね？」
念を押す。
「はい」

答えは変えない。

「はあ～あ、左座君は怖気づくと思ってたのに。ま、いつかは話さなければならないことではあったけど」

ペネロペさんは土手に寝転んだ。今までの雰囲気は僕を威圧するためだったのだろう、開き直った彼女からは凄みが無くなっていた。

「それと、夏神ちゃんはどうする？」

「私には元々、プライベートなどありません」

「そう言うと思った」

ペネロペさんは体を起こし、頭を掻いた。

「どこから話そうかしら。そうね、現在から数百年前、賢者たちがまだ生きていたころから話さなくてはね」

「賢者？」

「そう、賢者達。全六人。そのたった六人で世界を掌握したのだから並の奴らじゃないのは分かるでしょう」

「ええ。それは」

一応、歴史の授業で習っているからわかる。……持っている知識が正しいかは自信がないけど。

「そして彼らはほぼ同時に、全員死んだ。そうよね」

「だと思いますけど」

ちょうど数日前に復習したところだ。

「じゃあ、その六人のうち、既婚者は何人いたか知ってる？」
「……知らないです」
「ゼロよ」
「皆独身だったんですか？」
「そう」

こんな知識、雑学を無駄に勉強した奴ぐらいしか知らないことだろう。

「でもね、彼らには子孫がいるのよ」
「……？」
「正確に言うと、彼らの体細胞クローンね」
「クローン……って禁止されてるはずじゃあ」
「そうよ。今も昔も人間のクローンは国連で絶対禁止令が出てるわ」
「無視したんですか？」
「ええ。でも仕方がないことだったの。そうでもしなければ世界中の生き物が死に絶える。もしかすればそれ以上。太陽系がなくなる危険もあったの」
「い、意味が分かりません」
「賢者達はね。これまでに類を見ないほど強力な力を持った能力者だったのよ」
「……！」

賢者達は科学者かもしれないということは知っていた。けれど、能力者だった？

「じゃあ、賢者達の発明や研究は？」
「能力があったからこそ。あらゆる物理法則を操る能力者がいたみたいだし」

……知っていることが全然違うことだといわれると、どうにも納得できない。第一、能力者というのが非現実的……だと思う。隣の二人を無視すれば。

第二十二話　過去１（後書き）

題名を付けるの忘れてました＾＾；

第二十三話　過去2

「賢者達の力は異常だった……一人で世界が滅ぼせた、と聞くわ。そこで、一つ問題が出てきたのよ」

「問題？」

それほどの力を持った人間たちが六人もいて、解決できない問題などあったのだろうか。

「そう。賢者達はまず自分たちの行使する力は一体どこから来ているのかを研究したわ。でも、判明したのは別の何かから力を借りているわけではないということだけ。となれば、その強大な力は己の中に内包しているとしか仮定できなかった」

ペネロペさんは左手で膝を抱えて体勢を変えた。夏神はペネロペさんを直視したまま動きもしない。

「では、死んでしまったらどうなるか。体の中のエネルギーは一体どこへ行くのか。賢者達はその結論に至ったわ」

「……それは？」

夏神も興味ありげで、しかし表情や姿勢は崩すことはない。

「生命活動が停止した賢者の体から、そのエネルギーが放出されてしまうという結論だったわ。何度、導き出しても変わらなかった。一人だけで世界を破滅させるエネルギーが六人分。これは地球上に存在する全核兵器よりも脅威だったの」

人一人が核兵器以上の脅威。僕はその現実味のない一言が理解で

きなかった。

「勿論、それを知って賢者達は対策を練ったわ。まず不老不死の研究。これはどうしても成功しなかった」

「どうしてですか？　賢者達ならできそうですけど」

「さあ。それは謎。できなかったということしかわからないわ。でも寿命を何万年も延ばすことは可能だったらしいわ」

不老不死が不可能だということに違和感を感じたけれど僕程度の人間じゃ知れないことがあったのだと無理矢理納得させてみた。次第に話がややこしくなってくるようだったので、そうでもしないと置いて行かれそうだ。

「エネルギーを宇宙の彼方に飛ばすという方法や離れた恒星にエネルギーをぶつけて相対消滅させる方法も考えたらしいけど、彼らのエネルギー量が演算不能だったからこれも失敗したわ。そして最後に一つだけ案が残った。それは、一旦エネルギーを別の場所に移して安定させて、そのエネルギーから先に消費していくという方法」

「それは不可能では？」

夏神が疑問を口にした。

「エネルギーの絶対量が判明していないのにもかかわらず、それを移すなど……」

「そうね。だから、全部一気にではなく一部ずつ移し変えることにしたわ。これは九十九パーセント成功すると数字が出た。ではこれをどうやって消費するかということになるわ。でも消費する方法が発見できなかったの。そこで彼らは苦肉の策を取るわ」

「……」

僕と夏神は続きが気になってペネロペさんを見つめる。

「人間たちにそのエネルギーを分配することにしたのよ」

力を分け与える。賢者達でさえどうするか考えあぐねているような力を？　そんなものくれたところでどうすればいいんだ。

「……大丈夫なんですか、そんな意味不明なエネルギー」

「大丈夫じゃないわよ。一定量を超えるとエネルギーに耐えられずに人間は死ぬわ」

ペネロペさんは当り前のように即答した。

「だから、ここでクローンが必要になったのよ。賢者達のクローンは彼らほどではないにせよ、通常の人間よりかは遥かにエネルギーを蓄えられる。彼らはクローンを大量生産したわ」

なるほど、と頷こうとしたところで僕はふと変に思った。

「エネルギーって量がわからないんですよね。ずっと貯められるんですか？　限界が来たら……」

「その限界を回避するために人間は進化したわ。それが……能力を使用することでエネルギーを消費することができる、いわゆる能力者よ」

「まじですか」

「まじです」

それが理由だったら、人類全員能力者になるかもしれないってこと？　雀部や明日喜さんや……僕も！？

「それではもしや、エネルギーの一部を一時的に移動させておく場所というのは……あれですか」

夏神は夜空を指差した。その指の延長線上には、例の異様な、巨大な月。賢者達の作り出したと言われる、あの月だ。

「その通り」

ペネロペさんは月を見上げ、話に一段落がついたと言うように小さく息を吐いた。

「それで」

夏神が手を下ろして言う。

「それだけではないですよね。誠人君や私に話すことは」

「……誠人君？」

ペネロペさんが僕を見て若干にやけた顔をしたようだったけど、すぐに顔を戻してしまったのではっきりとはわからなかった。

「……ええ。そうよ。ここまでは前置き。知っていなければこれから話すことは到底理解できないもの」

ペネロペさんは真剣な面持ちを取り戻した。

「賢者のクローンが大量に作られた、というのは言ったわね」

「はい」

「そのクローン達は賢者達の後を継ぐことなく一般社会に溶け込み、そして子孫を残した。その子孫達は通称“賢者の遺志”と呼ばれて

いるわ」

賢者の石ではなくて、賢者の遺志。ややこしいけど、どこかで聞いた気がする。と、突然夏神が立ち上がった。

「その言葉……舞草が使っていました」

ペネロペさんを見下ろしてすごんでいる。

ああ、と僕も思い出す。舞草が夏神に向けて言っていた。『貴様を殺れば“賢者の遺志”は私を含め残り二人となる』と。でもこの意味は……。

「舞草の目的は恐らく、“自分以外の賢者の遺志を殺すこと”だもの」

「では、私も、賢者の遺志なのですか……？」

「……そうよ」

夏神が顔色を変えた。賢者の遺志だと言うなら、夏神には曲がりなりにも賢者の血が流れているということだ。

「でもこの言い方じゃ少し語弊があるわね。正確に言えば舞草の目的は“自分以外の賢者エリーゼの遺志を殺すこと”ね」

「どういうことです……？」

夏神は誰が見ても怒りだすのを抑えているようにしか見えなかった。今にもペネロペさんに殴りかかってもおかしくない。何故怒りそうなのか僕には不明だった。

「クローンは賢者のエネルギーを多く許容できるけど、条件があったわ。それはクローンの元となった賢者のエネルギーしか蓄えられ

ないことね」
「……それと何の関係が」
「舞草はどうやったか知らないけどこの機密を知った。それと同時に、過去に行われたある実験データも入手したわ」
ペネロペさんは夏神のただならぬ様子を知りながらあえて無視している。
「賢者の遺志が死ぬと、持っていたエネルギーを同じ血を持つ他の賢者の遺志に分配するというデータよ」
「では……まさか」
「賢者の遺志が少なくなればなるほど、一人に分けられるエネルギーは増える。もし残り一人になれば、力は一人に収束する。これを利用しようとしたのね。無駄に男って力を欲しがる生き物だし、最強の能力者にでもなりたかったんじゃないかしら。例の連続無差別殺人事件はこれのせいなのよ」
夏神は手を握り締め、拳を震わせた。
「私が聞きたいのはそんなことじゃない」
声まで、震えてる。
「どうしたんだ、夏神」
「黙っていろ」
夏神の瞳は初めて出会ったあの時、舞草に襲われ、僕を助けようとした時、その時の青白い瞳だった。
「夏神ちゃんが聞きたいことはわかるわ」

ペネロペさんはおもむろに立ち上がり、夏神に向き直った。
「だから答えましょう。夏神ちゃんの考えたとおり、舞草とあなたは血縁関係です」
ペネロペさんが吹っ飛んだ。
僕は飛んできたペネロペさんを両手で受け止め、反動に押されて地面に後頭部を打ちつけた。
「……ありがとう。左座君」
ペネロペさんの口からは一筋の赤い線、血が流れていた。夏神が殴り飛ばしたのだ。
「何をするんだ、夏神！」
「五月蝿い！　そいつは私に家族はいないと言った！　孤児だと！　嘘を言ったんだ！」
夏神が声を荒げていた。こんな夏神を一度たりとも見たことがあるだろうか。
「だからって……」
「そして、そいつは！　舞草を、血の繋がった家族を、殺せと命じたんだぞ！　私に伝えること無しに！」
夏神は僕が知る限り、こんな感情的になる奴ではない。つまり、それほどのことなのだ。僕だって家族を殺せと言われればそんなことはできない。まして今まで家族のいない生活を送ってきた夏神に

とっては自制のできなくなるほど、身を切られるほどやるせないことなのだろう。

「……ごめんなさい。黙っていて」

「くっ……」

夏神は僕らを背にして肩を小刻みに震わせた。泣いている。僕より何百倍も強い夏神が。

ペネロペさんはスーツの袖で口の血を拭い、僕に預けていた体勢を戻した。

「これで、夏神ちゃんの分は終わったわ。次はあなたの番よ、左座君」

「えっ？」

つい疑問の声を出したけれど、元々は僕の過去について聞きに来たのだから当たり前だ。僕はどんなことを言われても堪えられるよう、身構えた。唾を飲み込んだ。

「単刀直入に言うと、あなたも賢者の遺志よ」

僕は大きく咳をしてしまった。

第二十四話　過去3

「ゲホッゲホッ」

驚いて飲み込んだ唾が気道に入り込んでしまったみたいだ。咳が落ち着いたところで、確認した。

「聞き間違いじゃないですよね？」

「いいえ。左座君も賢者の遺志の一人よ」

ペネロペさんは流し目気味で僕に視線を投げる。

「でも、僕、ほら、能力者じゃないですし」

「賢者の遺志だから能力者、なんてこと言ったかしら」

僕は言い返せなくなって言葉に詰まった。そんなことは確かに言ってない。

「じゃ、じゃあ……その、えと」

何か訊こうと頭いっぱいに思いをめぐらしても、なぜか分からないけど、言葉になって出てこない。

ペネロペさんは大きくため息をついて、やれやれと言うように肩を竦めた。

「動揺しすぎよ」

そんなことを言われても……あまりにも突飛な事で驚かないほうがおかしい。ペネロペさんの言っている事はつまり、僕は賢者達の

血を受け継いでいる人間だということだ。今時、冗談にも使わない。

「あなたが知りたいことは何なのか、もう一度整理しなさい」

整理……確かにそうだ。僕は今、冷静でない。落ち着かなければ。

僕は夢を見た。

その夢は妙にリアルでただの夢だとは思えなかった。遊園地でのこともあるし、もしかして僕自身の記憶なのだと思った。その理由は、知らない場所で、知らない事が起こっているのに、そこに知っている人が出てきたからだ。

もし夢が僕の記憶だとしたなら、僕とペネロペさんは前に出会ったことがあることになる。僕は夢が過去なのか確かめるために、記憶を取り戻したかのような芝居を打った。ペネロペさんは芝居に乗った。これで夢は本当にあった出来事なんだと思った。

では、ペネロペ会った事があるのにどうして黙っていたのか。そしてペネロペさんは何者なのか。知りたいのはこのことだ。

「ペネロペさん、どうして前に僕に会った事があることを黙っていたんですか」

「正解」

ペネロペさんは唐突にそう言って、続ける。

「それが最初の目的でしょう？　私はあなたを試していたのよ。本当に記憶を取り戻しているのかどうかを確かめるためにね」

僕はピクリと眉を動かしてしまった。もしかしてペネロペさんから手がかりを得ようとして逆に相手に覚(さと)られて、さらには罠も仕掛けられていた……？

「何の脈絡もない事を話しながら重大な情報を聞かせ、当初の目的を忘れさせて様子を伺う。はぐらかすのは私の専売特許だし。それにわかっちゃたんだけど、どうやら記憶を取り戻したって言うのは嘘みたいね」
「……」

ばれた。

「あなたは小さい頃から賢者達に興味があって、彼らについて学んでいた。記憶を取り戻したのなら知っているはずの事もあなたは知らなかったわ」
「……」

ずっと賢者の話をして様子を伺っていたのか……、してやられた。

「それは……確か五歳の時だったかしら」
「五歳？　そんな幼いときにそんなこと……」

さすがにそれは冗談だろうと僕は聞き流そうとする。

「賢者の血を受け継いでいるからでしょうけど。それにしても左座君ってかなり鈍い子ね」
「え、鈍い？」
「夏神ちゃんをナイフのような感覚の持ち主としたら、あなたはこんにゃくってとこね」

例がよくわからない。ナイフを例えに使うのは分かるけどこんにゃくって。夏神をナイフで例えるなら、せめて僕も錆び付いて刃こぼれした包丁並み、ぐらいに例えて欲しかった、って自分で例えて

も意味がわからない。

「……私は言った傍からまたはぐらかしているんだけどねー」

「……！」

またやられたってことかよ。

「今度はあなたの過去を話して質問から逃げてみたわ」

口で争うと百パーセント勝てない。かといって力でも勝てないだろう。ペネロペさんは能力者だし。打つ手はなし、お手上げだ。

「……ひどい顔ね。途方に暮れてるって丸分かりだわ」

「ペネロペさん……はぐらかそうとするのはもう止めて下さい」

こうなったら目的の事以外は気に留めずに、それだけを聞くしかない。

「あら。これは本当よ。左座君はもろに顔に出るタイ――きゃっ！」

ペネロペさんの後ろに突っ立っていただけの夏神が鬼としか形容できない形相で、ペネロペさんの襟首を掴んで持ち上げた。

「……ふざけるのも大概にしろ」

「凄い殺気ね。今の状況を他の隊員が見たら勘違いしても仕方ないわよ？　それとも……本気なのかしら」

夏神は眉間によりぐっとしわを寄せ、ペネロペさんを放り投げた。ペネロペさんは坂になっている土手を転がることなく上手く受身を取った。

「いつまで馬鹿げたやり取りを続けるつもりだ……」

夏神が冷たく言い放つ。嫌々ながらペネロペさんは土手の一番上まで上がり、そこで服についた草を払った。

「さすがに夏神ちゃんも相手に回ると厄介ね。でもね、私は危惧しているの」

「……危惧？」

「夏神ちゃんは強いわ。能力があるからじゃなくて、心が。だから事実も伝えられた。けど左座君はどうかしら。あなたと同じように伝えられたら人として再起不能になるかもしれないわ」

自分が精神的に弱いと間接的に言われた僕はかちんときた。二人は、なにやってるんだ。僕は膝をついて立ち上がった。

「なんで二人だけで話してるんですか。僕が、自分の意思で知りたいと言ってるんです」

ペネロペさんは後悔した表情を浮かべ、

「……そうね。言う相手を間違えたわ」

僕を真正面に捉えるように向き直り、右手を軽く腰に当て、左手は下げたまま、体の重心を右側に寄らせた。瞳ははっきりと僕の瞳を覗き込んでいた。

「……黙っていた理由は……、あなたの親と約束したからよ」

ズキッ！

体が凍った。胸にひび割れでも起こったのか深く、鋭利な痛み。癒えかけた傷が再び開くような。

「僕の……？　どういうことですか！」

「鈍い！」

また言われたけど、気にしない。話を逸らされては困る！

「だからなんですか！」

「言ったでしょう。あなたは賢者の遺志だと。なら、子が受け継ぐ血はどこから来るの！」

総毛立った。そこまで言われたら僕も理解できる。つまり……。

「僕の両親も……賢者の遺志、ですか？」

「そうよ」

なるほど、僕は鈍い。最初に言われたときに気づいておくべきだった。じゃあ、その前は？　死んだおじいちゃんやおばあちゃんも？　両方ともでなくても最低どちらか片方は……。

「僕の家族は全員、賢者の遺志……」

ペネロペさんは今日初めて、哀れむと言うか、沈痛な面持ちになった。

「ごめんなさい。それは……違うの」

そういった瞬間に夏神も僕を向く。

「……違わないですよ。遺伝子的にそれは――」

……ハッとした。ペネロペさんが言わんとしようとしたことが、真実が漸く認識できた。

僕に伝えるべきでない訳も。知らされなかった訳も。

「――父さんと母さんが僕の本物の親じゃない……？」

至った現実を否定してほしかった。けれど、ペネロペさんはゆっくり、小さく首を縦に振った。

手がわなわなと震える。意識に関係なく。止まらない。止められない。

「私はあなたの母親の友人であり、かつての仕事仲間だったわ」

「……仕事仲間？」

「私や夏神ちゃんの所属している組織、あなたの母親もその組織の構成員だったの。特に私はよく覚えてる。相棒として組んでたから……」

ペネロペさんは遠い目をする。

「その……その人は今どこに……？」

つい、真の母親であるはずの人に、その人、と言ってしまった。

「死んだわ。殺されて」

ミシィ！

胸の痛みが深く、広がった。

「どうして！？」
「どうしてと言われてもね……私にも分からないわよ。でも犯人の目星は付いてるわ。あなたの母親が賢者エリーゼの遺志の一人だということから考えるとね」
「それって……ま、い、く、さ、が？」

痛い。胸が痛い。痛いけど熱さは全くない。むしろ冷たい。体中の血液が集まってくるはずの心臓が凍ってしまったみたいだ。
立っていられないほどの痛みで、右手で胸を押さえながら地面に倒れこんだ。再び上体を起こそうと努めるけど、左手が草を握り締めるだけで動けない。

「左座君！」

ペネロペさんが駆けつけて来る。

『この子を死なせはしない』

甦る声。

『お前が誰だか、私は知らないが、家族を、やらせはしない……！』

そして映像。

僕は車の中に座っていた。
すぐ隣にはお母さんが、運転席にはお父さんがいる。
お父さんは運転中で、お母さんは僕の顔をじっと見つめて微笑んでいた。そんなに僕を見て楽しいの、と訊くと、とっても楽しいわ、

と言う。もしかして顔に何か付いているのかと触ってみるけど特に変わったところはないみたいだ。それを見て、お母さんはさらに幸せそうに顔を綻ばせる。
車で家に帰宅する途中で、確かおじいちゃん家に行ったんだっけ。辺りは暗くて、もう既に夜みたいだ。

「何だ……？」

不意に乗っている車の速度が徐々に落ちているのに気づいた。しばらくして僕たちの乗った車は橋の上で完全に停止した。

「どうしたの？」

不思議に思った僕は尋ねる。お母さんも同じことを言いたげにお父さんに目を合わせた。

「人が、道の真ん中に」

僕とお母さんはフロントガラス越しに前を確認すると、道の真ん中に黒いスーツを着た人が立っていた。あんな所にいたら危ないのに。

「……私の知り合いだわ」

お母さんがぼそりと呟く。

「ほんとに？」
「……お前の？」

お父さんと僕は二人でお母さんを見つめた。お母さんは頷いて、

一人で車外に出た。
それを見たお父さんはシートベルトを外して、
「誠人は、ここに残っていなさい」
と言って同じく外に出ようとする。
ところがお母さんが手で制して、歩み寄ろうとしていたお父さんはドアを開けたまま車の傍で待機することになった。
「お久しぶりです。朱音（あかね）さん」
「久しぶりね、舞草君。何の用かしら」
道に立っていた男の人とお母さんは会話をし始めた。どうやら本当に知り合いみたいだ。
「一つ、確認しておきたい事があります」
「言ってみて」
男の人は俯いてお母さんの顔を目視せずに、
「朱音さんは、賢者の遺志でしたよね？」
と、問う。何のことを言っているのだろう。賢者の石って知ってるけど、あんなもの映画の中で出てくる石っころだよ。
「ええ。それが？」
「……すみません」
男の人が声を震わせて言うと、お母さんが突然、消えた。続けてものすごい突風が吹き付けてきて僕の乗っている車が大きく揺さぶ

られた。

「むっ」

お父さんも何が起こったのか分からない様子で、右腕で直接顔に風が当るのを防いだだけだった。

「どういうことかしら……舞草君」

消えたお母さんはどういった手品か知らないけど車の横に移動していた。ドアを開けて、僕を外に連れ出す。

「……賢者エリーゼの遺志を殺さなくてはなりません。朱音さんと、その子供を」

お父さんとお母さんは両方とも顔を顰めた。僕はあの人が酷いことを言ったのかと思って、男の人を睨み据えた。

「何故か教えてくれる？」

「……できません」

お母さんはお父さんに僕を預けて、なにやら二人で男の人に見えないよう合図を取り合っている。

「舞草君が訳もなしに人を殺す事なんてないから、それ相応の理由があるんでしょうけどね。でもこんな理不尽は許されないわ」

「……わかっています。けどもう、これしかないんです！」

男の人はついに泣き出した。大の大人が人前で号泣するところな

んて見た事がなかったので面食らってしまった。逆にお母さんたちが悪い事をしているのではないかとちょっとばかり思うほどに。

「それならそれでいいわ。私は家族を傷つけようとする人は許せない。だから、あなたを倒すわ。引退した身とは言っても舐めないでね」

お母さんがお父さんにウインクをして、アイコンタクトを送る。その瞬間、お父さんは僕を抱きかかえて車から離れるように駆け出した。

「……！」

突如、大きな炸裂音がした。お父さんと僕は吹っ飛ばされて地面を転がったけど、お父さんが僕をギュッと抱いてくれていたので怪我はなかった。後ろが見えないように抱っこされていたので様子がわからない。

「お母さん！」

お母さんが心配で僕は叫んだ。お父さんの腕を押しのけて間から覗き見た。僕たちがついさっきまで乗っていた車は炎上していて跡形もない。一体どんな事をしたらああなるのか想像もつかなかった。

「あなた！　逃げて！」

炎を潜って男の人が歩いてきた。ありえない。そんなことをしたら絶対火傷してしまうのに、スーツに焦げ一つなかった。あの男の人が人間じゃない気がして、僕は恐怖を感じた。

男の人へ向かってどこからか現れたお母さんが突撃して行く。

お父さんは返事をすることなく立ち上がって再び走り出した。でもまた突風を受けて前のめりに倒れてしまう。お父さんに守られて僕は全然痛くなかった。

「きゃあっ！」

僕たちの横にお母さんが飛ばされて来て、一回地面に跳ねてから止まった。

「朱音！」

お父さんが心配そうに声を上げる。僕も声を出そうとするけど声が出なくなってしまっていた。なんで？　僕は喉を押さえる。

「……大丈夫」

お母さんは何事もなかったかのようにすっくと立ち上がる。でも、右手からは血が流れていて、その腕が力なくぶら下がっていた。

「やせ我慢はよせ……！」

お父さんは僕を地面に置いて起き上がった。

「お願いします……抵抗しないでください」

ゆっくりと歩きながら距離をつめる男の人はありえないことを言う。それに対してお父さんは怒ったような表情を見せた。僕は生まれて初めてお父さんが殺気立つのを感じた。

「馬鹿げた事を……！」

「……この子を死なせはしないわ」

お母さんは左手だけで構えを取った。よく見れば右腕だけじゃなくて頭や口からも血が出てる。これじゃお母さんが死んでしまう！けど、いくら遣っても喉は嗄れてしまったみたいに音は生じない……。

「お前が誰だか、私は知らないが、家族を、やらせはしない……！」

お父さんもお母さんの隣に並んで、男の人を睨み付けた。

「……それなら、私も全力でやりま――ッ！？」

空から何かが降ってきて、男の人が立っていたところに激突した。なんだかカクカクした形の、人工的に作られた大きな岩みたいなものだった。

『無事か？』

「エイトセンスッ……ということは桜ちゃんがいるのね」

『俺はあんたらを援護しに来たんだ』

お母さんはほんのわずかだけ安堵したように息を吐いた。あのカクカクは何だか味方してくれてるみたい。

「好都合。あなた！」

「何だ？」

「あの子にお守りを持たせて、川に投げ落として！」

突拍子もない事をお母さんはさらりと言った。

「……わかった」

一瞬だけ躊躇したお父さんだったけどすぐに僕に駆け寄ってきた。

「これを持て」

「……？」

「大事なもの、だ。お前に託す。絶対に無くすな。よく握っていろ」

声が出ないので僕は頷いて答えた。

「息を大きく吸え」

お父さんの言ったとおりに僕はめいいっぱい空気を肺に送る。でも待って、もしかして……。

「死ぬな」

まさか――お父さんは僕を橋から突き落とした。

「じゃあ、ここがその橋……」

取り戻した記憶の波浪から我に返れば、目の前に見とめるのはあの橋だ。

川幅自体は目測で十五メートルそこらだけど川原や土手まで含めれば四十メートルはありそうだ。橋は二車線と歩道があるので想像していたものより大きかった。

「左座君……」

憂慮な顔をしてペネロペさんが横から僕を見遣っていた。
「どうして僕はここに？」
「あなたが、急に立って歩き出して……」
「そ、そうですか」

やっぱり僕は精神的に危ない状態なんだなと薄笑いが出てしまう。それと同時に心に笑うだけの余裕が生まれている……いや、違う。余裕じゃない、穴が開いてしまったみたいだ。

「はは。全部思い出しました。これは、本当です」

辺りを見渡せば橋の一部だけが他の部分と比べて新しい。あそこが車の爆発したところだろうか。
記憶と現実が噛み合っていくのを感じる。ピースのなくなったパズルが、長い時をおいて完成した。
振り返ると夏神とペネロペさんが同じ表情をしている。

「僕も、賢者エリーゼの血が流れているんですよね？」
「……ええ」
「それは……」

夏神がペネロペさんに詰め寄ろうとしたところで、ペネロペさんは首を横に振る。

「舞草と夏神ちゃんは血縁関係だけど、左座君とはそうではないわ」
「……そう」

ぎすぎすした空気が一帯を覆いつくしていた。

「あの……もう帰りましょう？　知りたい事は知ったわけだし、もう時間も遅いし、明日も学校だし」

僕は手を握り締めてペネロペさんに言う。

「……わかったわ」

ペネロペさんは腕時計を操作してエアーバイクを呼び寄せた。
エアーバイクに乗るペネロペさんを夏神が睨みつけている。夏神の傍に寄ると今度は僕を睨んだ。

「あ、何？」
「……なんでもない」

重たい雰囲気のまま、僕たちはエアーバイクで飛び立った。
何時もの僕ならこんな状況、胸が詰まるほど苦しくなるはずなのに、今だけは心地が良いとも思った。

第二十五話　登校、拒否。

朝だ。

カーテンで差し込もうとした日光が遮られ、淡く弱弱しい光だけが入ってくる。大抵この時間には聞こえてくるはずの鳥の囀りは何故か一切しない。

あんな事実を伝えられた後だから、普通なら一睡もできなくて当然のはずだ。でも僕は昨晩はぐっすり熟睡してしまった上、今朝の寝起きがとても良い。一年に一度あるかわからないほどに体調が良好だった。

起床の予定時刻を告げる目覚まし時計を、鳴る前に予約を解除しておく。

これでやることは終わった。あとは勇気を出して、リビングに下りていくだけ。

でも、これができない。何だか嫌だ。僕は布団を抱きしめて顔をその中に埋める。

しばらくして何時もの時間を過ぎてしまえば、父さんが僕を起こしにやって来る。その前には覚悟を決めるつもり……。つもり、じゃあ多分無理だろう。意思が希薄で惰弱だと自覚している僕には、何もしようとしない自分が容易に想像がつく。

僕は動けなかった。

部屋のドアを誰かがノックする。来た。

「誠人。もう時間だぞ、起きてきなさい」

「……」

うん、と首を動かした。

「おい。返事をしなさい。……入るぞ」

ガチャリとドアが開く音がしても僕は布団から顔を上げられなかった。

「熟睡中か？　それならその布団を奪ってしまえばいいな」

布団が掴まれて上に持ち上げられる。けど必死で僕はしがみ付いた。

「おい、本当は起きてるだろう」

「……」

もう一度首を縦に動かした。

「頷いてるのか、それは」

父さんは呆れたように言う。すると、先ほどとは比べ物にならない力が加えられ、布団が剥ぎ取られて僕は床に転げ落ちた。

「……気分が悪いのか？」

「……」

うつぶせに倒れたまま、首を小さく横に振った。

「それならどうしたんだ。もういい。早く仕度をしなさい」

父さんはドアを開けっ放しにしたまま、僕の部屋からどすどすと足音を立てて去った。さすがにこの状態になっては寝ているわけにもいかない。両手をついて起き上がり、寝巻きを脱いで制服に着替える。

そして机の上に置いていたお守り、ではなくて賢者の石を手にとって……見つめた。ペネロペさんの話を思い返す。僕の記憶を思い出す。どう考えても、これが、あの人たちの形見なんだ。

一度瞼を閉じ、数十秒間両手でそれを僕の全握力をもって握り締める。目を開けてからそれをポケットの中に放り入れた。放り入れて、やっぱり思い直して、アクセサリーみたいだし首から掛けることにした。

一歩廊下へ出てみる。

昨日まで当たり前だった光景が今では余所余所しい気がする。更に一歩進むと床が、ぎしっ、と音を立てた。ここは床が脆くなっているようで昔から変な音が出る。知っているのに、おかしい。何がどうおかしいのか言葉にできないけど、何かが違う。

廊下を歩いて、階段に差し掛かる。こんなに急勾配だったっけ？踏み外して落ちたら絶対に怪我する。

階段をより慎重に下りれば、もうそこはリビングだ。夏神、父さん、母さん、妹。全員揃っている。

ただ、夏神に視線を送ると不意に逸らされた。表情は優等生のままで、でも心なしか不機嫌そうだ。その理由は僕にはわかるけど、今の僕には面と向かって見ることができる相手は君しかいないんだよ。

一つ開けられた椅子に僕は腰掛ける。今日は夏神の隣に母さんがいて、僕の右隣には妹、左隣には父さんがいる。幸運な事に対面に座っているのは夏神だった。

「気分、悪いの？」

母さんが心配そうに僕に尋ねる。

「……いや……」

捻り出した声のほとんどは吐き出した息だった。

「……それならいいけど」

今日は和食だったので箸を持っていただきますの挨拶をして、ご飯を一口食べた。鮭の塩焼きを食べやすいように箸でほぐす。

いや、そうじゃない。このままでは何の気なく朝が過ぎて行ってしまう。言いたいこと、言うべきことを心に抱えて僕は今日を過ごそうっていうのか。そんなことできるのか。していいのか。

鮭を一旦ご飯の上に置いて、一息ついてからご飯ごと口に入れる。よく咀嚼して飲み込む。口を動かしながらリビングを見渡した。

父さんは僕より早くご飯を食べ終わって、ソファに座って新聞を広げていた。

制服に着替えていた妹はゆっくりと朝食を食べている。もう三日目とは言っても妹はまだ夏神がいる事に緊張しているようだ。

母さんは自分自身と父さんの食べた皿を片付けようとしていた。

それらの様子を目に留めて、僕は茶碗の上に箸を置いた。かちゃん、と優しく鳴った。

まるでその綺麗な高音を合図にしたのかのように、一瞬だけこの家から生活音が消え去った。ほんの僅かな間ではあるけれど、時間が止まって別世界に転移したかのようだった。

「今日は……学校に行かない」

別世界が無意識に行動させていた。誰がしゃべったのか、すぐには把握できなかった。

「何だって？」

父さんが僕に対して聞き返してくる。ああそうか。これは僕が発した言葉だったんだと、遅れて気づいた。

「今日は学校に行かない」

今度は意識的に同じことを言った。

「やっぱり体調が悪いのか？」

「そうじゃないよ」

父さんと母さんが本当の両親じゃないなら、二人は僕が本当の子でない事を知っていないはずがない。ペネロペさんが隠していたように、二人も隠しているんだ。

「質問があるんだ」

「言ってみなさい」

父さんは新聞紙を折りたたんでテーブルに置いて僕を見据えた。

「僕の、両親について何だけど」

皿が割れる音が響き渡り、その音が家中に吸収されてしまうまで

誰もぴくりとも動けなかった。

「……そうか、知ってしまったんだな。それとも……思い出したのか」

父さんがソファから立ち上がって夏神の隣に再び腰掛ける。

「ど、どうしたの……？」

妹は状況が呑み込めず、一人あたふたとしていた。キッチンの方を見れば、母さんが皿を持っていたときと同じ姿勢で硬直している。妹はただならぬものを感じてか母さんに駆け寄った。

「お母さん、大丈夫……？」

「……ええ」

茫然自失した母さんを妹は気遣って、ソファまで肩を貸して運んだ。僕と父さん、夏神をそれぞれ一瞥して、

「わ、私は学校に、行ってくるね……」

と言って学校指定鞄を手にとってリビングを出て行こうと、早足で玄関に向かう。

「待ちなさい」

間髪いれずに父さんは妹を背にしたまま言って、その場に引きとめた。

「だって、その……そうだ、夏神さんも一緒に学校へ……」

「お前も家族の一員として聞いておく必要がある」

常日頃は威厳がなく頼りなかったはずの父さんが、皆を圧倒する気迫を持ってそこに佇んでいた。

「質問とは、お前の出生についてのことだな」

僕は気圧されそうになるのを堪えて、

「うん」

「それに質問と言うよりは、確認だな？」

全て、お見通しのようだ。呼吸を整えてから、僕は答える。

「うん。……父さんと母さんは……僕の本当の親じゃないんだよね」

三人とも微動だにしなかった。ただ、妹だけはばね仕掛けのように首を動かして僕を凝視した。

「そうだ」

数拍の間をおいて、ついに父さんが返答してしまった。

「え？」

妹が信じられないという顔で父さんに目線を移す。同時に手に持っていた鞄を床に落としてしまった。

「やっぱり、隠してたんだね」

何も知らない妹には悪いと思うけど僕は話を進める。

「……すまない」

きっぱりと父さんに謝られた。

「どうして、教えてくれなかったんだよ。それともまだ早いって思ってたのか」

つい僕の口調は強くなってしまう。

「そうではない。できるならお前に知られる事なくその事は墓場まで持っていくつもりだった」

「何でだよ！」

思いっきりテーブルを殴りつけ、椅子を倒しながら立ち上がる。だけど父さんは僕の言ったことをまるで聞き流したように無視し、後ろを振り返った。

「愛奈。母さんを連れて二階に上がっていなさい」

「何無視してんだよッ！！」

「五月蝿いッ！」

続けてもっと言おうとしけど僕は父さんの怒鳴りに押し留められた。父さんの方が僕より真に迫っている気がした。

「だ、だって……私……」

「つべこべ言わずに母さんを二階に連れて行け！」

肩をビクリと震わせて、妹は声を出さずに泣き出してしまった。
それでも父さんの命令を忠実に守り、母さんを連れて二階に上がっていった。

「そ、そこまで言うことないだろ……」

父さんが向き直る。

「母さんは心が弱いんだ。これ以上負担させるわけにはいかない。それに、ここからの話を愛奈に聞かせるわけにもいかない」

目が据わっていた。相手を、僕を殺すことも厭わないほどの覚悟かそこから滲み出していた。

「夏神さんはここに居たいのなら構わない。ペネロペから全て聞いている」

「……あんたも組織員なのか」

「ああ」

夏神の問いに隠す素振りもなく父さんは、いや、この男は答えた。
反射的に殴りかかりそうになるからだを寸前で我慢させる。

「十年前に引退したが」

「……ちゃんと話してくれ」

僕は男に詳細を求めた。

「わかった」

男は了承する。そして瞬きを三回した。

「私と母さんは組織に居た頃から夫婦だった。組織内では、コードネームイグナティ、お前の生みの親は私たちの友人だったよ。私たちは子供を欲していたが、残念ながら母さんが子供を授かりにくい体質だった。子供ができたら組織を辞めるつもりだったのにそうはできなかった。その時だ、ペネロペが私たちに接触してきたのは」

ごくり、と僕は唾を飲み込んだ。

「ペネロペは私たちに頼み事をしてきた。誠人、お前を養子に向かい入れてほしいという頼みだった。友人の子とは言え、子供の欲しかった私たちには願ってもないことだ。ペネロペは更にこう言った、『私ではこの子を守る力がないし、もし任務で私が死んでしまってはどうしようもない。イグナティが私との約束は、この子供をあなた達に預ける事。それと、この子供に何も知らせない事。記憶をなくさせる事。あなた達にこの子を渡すのはイグナティの願い。代わりにこの子供を幸せに一生を過ごさせることができるから。イグナティはあなた達を親友だと認めていたから、信じて託したの』と。それから私たちは自分の人生全てをお前に注ぐつもりで、組織を辞め、普通の家庭を持ったんだ」

ペネロペさんが語らなかったことをこの男が知っている。嘘だとは思えなかった。

「妹は……？」

「元々、私たちは子供が二人欲しかったんだ」

「妹も養子……？」

「そうだ」

なんてことだ。この家族は、誰一人として血が繋がっていなかっ

た。

「それは、どうして言わないんだよ」

「……愛奈はお前ほど成長していない。今伝えれば、最悪の場合、立ち直れ――」

「そんなのは、あんたらの勝手だよッ！！」

胸の奥から言いたい事が押し寄せて、止められない。

「真実を知らずに生きてくなんて、死んでしまうよりも惨めと思えないのか！」

「……」

「知ったら辛いさ！　僕だって泣きたくて堪らない！　でもそれが何故だかわかる！？」

男は身動き一つせずに僕の言うことをただ聞いている。

「それはね、親が親じゃないってわかると一緒に、自分が赤の他人に哀れまれてたってわかっちゃうからだよ！」

駆け出した。玄関の棚の上に置いてあった自転車の鍵を手に取り、乱暴に靴を履く。家から飛び出して、自転車に飛び乗って、僕は通学方向と間逆に自転車を進めた。

「誠人君！」

私が後を追おうとすると、誠人君の父親が右手を掴んだ。

「一人にしてやってくれないか？」

何を馬鹿な事を。彼が命を狙われているという事を忘れているのではないか。

「私は彼の護衛ですから」

手を振り払う。リビングの窓から誠人君が学校と反対方向に駆けて行ったのを見ていたが、学校に行かないとすると何処に向かうか想像がつかない。直ぐに追わなければ見失ってしまう。理由は不明だが、今朝は、いるはずの護衛部隊隊員がいないことを確認しているため、さらに追わないわけにはいかない。

「わけは本当にそれだけかい？」

父親が謎の質問をしてくる。私はそれを不快に感じた。

「……ええ」

「そうなのか。私ではあいつを追ってやれない。頼んだよ……」

私は玄関で靴を履き、

「……あなたは無責任ですね」

と、冷たく吐き捨てて、外へ。

第二十六話　意思

みんな嘘だったんだ。

その一つだけの事実が自転車のペダルを動かして進もうとする原動力になっていた。怒りに近かったけど、それとは違う。悲しさとか虚しさとか憎しみとか色々交じり合っていた。そしてほんの僅かだったけど、嬉しさもあったのは僕自身にも理解できないことだった。

何処かへ行きたいわけじゃない。でも何処かへ逃げたかった。

何から逃げるのか。それは……家族から。家族だった他人達から。

目の前がにじむ。

自転車を運転するにあたって視力が落ちるのは自分にとっても他の人にとっても危険極まりない。それでも、自転車の速度だけは上がっていく。

立ちこぎで全速力だった。あまりに視界が曇りすぎて道がどこかさえ見えず、さすがにと、僕は右手で目元を拭った。そのせいで自転車のバランスが左に傾き、気づいた時には既に修正不可能になっていた。

自転車が倒れこむのと、僕が放り出されるのとは、同時だった。

咄嗟に両手で頭を抱え、地面に叩きつけられる。勢いそのままに地面を転がり、止まろうともしなかった。

それはもう激痛だ。でも痛いの一言も出なかった。

「う、うう……」

止めようとする意思がなくても体の回転は勝手に止まってしまう。

すぐさま立ち上がるけどふらふらだった。ここは一体何処なんだろう。辺りを見回すと、先程のえも言えない感情のせいか痛みのせいかわからない涙で、確認できない。右手で拭おうとして鋭い痛みが走ったので、代わりに左手で拭った。

「ここは……」

何処をどう走行してきたのかは知らない。目前にあるのは大きな真っ黒の門。見慣れた、あの遊園地の門だった。

ただ一つ違うところはその門を封じていた南京錠が無くなっていることだった。そして代替に使われていたのが子供の力でも取り除けそうな黄色いテープ。ドラマなんかで見た事のある、警察の関係者以外立ち入り禁止のテープだ。

無意識に、罪悪感もなくテープを引き剥がし、門を内側に押した。まさか、簡単に開いた。

中に入って今度は門を閉める。振り返って見渡せば、誰もいない。朝早いからだろうか。それとも現場検証とやらは済んだのだろうか。危険な場所に施錠もなしで、これではなんだか無責任な気がする。

夜のときとは違う風景に、新鮮感を覚えた。

この前と一番違うところと言えば観覧車がないことだけど、光源が太陽か月かの違いもまた大きい。一般的な遊園地と言えば昼のイメージがあるし。

メリーゴーラウンドに向かって歩いていく。日陰があるのはそこだけだった。

目的の場所に着くと当たり前のように馬に座った。座って、何もする事がないと感じた。暇だった。
無意に時間を過ごすことは得意だ。授業中でも、ぼうとしていることも多い。それで先生に注意されることもしばしば。

日常を思い出した。ここ数日、疎遠になっていた。

思えば、まっすぐ家に帰ることを、勉強するのを嫌がったことから始まった。自業自得、にしてはちょっと罰がひどい。遊園地で舞草と夏神の戦闘に巻き込まれ、死に掛けて。助けてもらって、夏神が転校してきて、僕の家にやってきて。護衛だと言われて、みんなで遊んで、それで舞草に襲われて。記憶を取り戻して、過去を取り戻して。
たった数日の間にありえないほどの急変。付いて行けるわけがない。

深呼吸をする。遠くの木々のざわめきが聞こえる。なんて詩的なことを思ってみる。考えたくない事から思考を逸らすため。
それでも、現実に引き戻す鍵は、本人の意思に関係なく駆け付けてくる。

遊園地の門がはずみ良く開かれた。僕でさえ開ける事ができたとは言え、ある程度の重さを持っている門を家のドアみたいに軽く動かす事はできない。
短距離走のオリンピック選手並の速さで駆け寄ってくる人物を、僕は一人しか挙げられない。
長い艶やかな髪を靡かせながら走り、メリーゴーラウンドの周りにある柵をハードルの要領で飛び越える。着地した瞬間にもう一度ジャンプし、僕の真横に到達した。

「誠人君」

体がこそばゆい。名前で呼ばれることにまだ慣れていない。

「夏神……」

前髪をかきあげて、夏神は高い視点から僕を見下ろした。

「一人で出かけるとは、どういうつもりだ」

夏神は無表情で言った。

「別に……」

「死にたいのか。命を狙われているということを忘れるな」

「できれば、忘れたかったのに」

何、と夏神の眉間に少し皺が寄った。でも諦めたかのようにため息をついて、柱に寄りかかった。

「……そうだな。できればな」

ぎょっとして夏神の顔を見詰めた。初めて聞いた後ろ向きな発言。よもやそんなことを言うやつだとはこれぽっちも知らなかった。

「私には誠人君が感じていることを理解できない。それは、普通の人間としておかしいことだろうか」

感じていること。これは、もはや気持ちと言っていいのかさえ判断しかねる。僕自身でさえそうなのだ。事情だけ知っている他人がいたとしても、僕の今の状態が把握できるわけがない。

「それは……違う、かな」

小さく頭を振ってから、僕は言った。

「そうか。私は幼い時から組織に保護され、組織員としての教育を受けて育った。それ故一部一般常識に欠けているところがあったが、それが理由ではないようだな」

何気にさらりと言った。これも初めて聞いた。夏神の過去。

「……」

「……」

夏神に目を向けると彼女は僕の瞳を、睨みつけるでも覗き込むでもなく、ただ見ていた。夏神の瞳は冷たいものではあったけれど、一番彼女の感情が表に出ていると感じた。

また、どきりとする。前は何時だっただろうか。確か僕が“転校生夏神”に初めて出会った、彼女の転校日だった。そして同じく目が合ったときだった。

今の夏神は素の夏神で、転校生の夏神は仮面を被った演技だったはずだ。それでも彼女の瞳は同じ心を移している。どういうことだろう。

見詰め合ったまま、僕と夏神は動かない。

時が止まったって言えばべたな言い方だけど、それが最も正確に言い表せた。僕たちは止まった状態で、その時間の隙間で、僕は頭の中一杯に思考を巡らせた。

思考を邪魔する感覚、聴覚嗅覚味覚触覚が消えた。夏神を見ることだけができた。
真っ白で何もない空間に僕と夏神だけが漂っているかのような気分になって。

僕は気づいた。

僕は今、夏神のことを考えていた。家を飛び出した原因である家族の事なんてさっぱりと忘れてしまっていて、忘れさせられて、夏神のことだけを思っていた。夏神の存在のほうが家族なんかよりも幾倍も強烈だった。
悟って、それで、夏神のことが気になった。もっと知りたくなった。彼女のこと。心が引き寄せられる。

「あのさ……」

自然と自分から口を開いていた。

「何だ」

夏神はゆっくりと瞼を閉じて、開いた時には目線は別方向を向いていた。その瞬間に周りの色彩は元に戻り、僕は木々の葉が擦れ合う音、錆び付いた遊具の臭いを取り戻した。

「夏神の、昔のこと……教えてくれないかな。知りたいんだ君のコト」

そのまま直で言った。

「そう……いいけど」

てっきりいつものごとく、「何故そんなこと知る必要がある」とか言って否定してから結局答えてくれる、当回し返答をするかなと予想していたのに、意表を突かれた。
夏神は柱から離れて僕の隣に来て胡坐で座り込んだ。今度は僕の視点の方が高かくなってしまって、なんだか悪い気がして馬から降りた。僕は座高が残念ながら高めなので座った状態では、横の夏神より僕は大きかった。

「つまらないと思う」
「それでもいいよ」
「……わかった。何から、話そうか……。これといって思い出というのはないのだが……」
「何でもいいからさ」
「それでは、幼い頃から私は組織にいたということは言ったな。私は小さい時に親を亡くして孤児院にいた。親の顔も覚えていないし、悲しさも何もなかったが」

どこかを遠目で見ながら言う夏神の横顔は、話している内容とは対照的に楽しそうだった。僕がそう思っているだけで、夏神の表情はほとんど無表情だった。

「その孤児院は組織の経営下にあって、能力のあった私は五歳で組織側に引き渡された。それからは組織員になるための訓練三昧の日々だ。内容は詳しくは洩らせないが、訓練教官は厳しかったよ」

夏神は苦笑した。

「それから数年経って、十分に訓練期間を終えて、初めてチームを組まされた。その時の上官が舞草。コードネームは海藤玄馬だった。

ほとんどの任務を海藤と一緒にこなした。時には必要悪を行使する事もあった。その内にいつの間にか、師弟関係のようなものが生まれてな。私は、もしいたら兄とはこういうものなのか、と思ったものだ」

舞草と夏神の関係。ペネロペさんに怒りを露にした夏神の姿を思い出しても、その間には計り知れないほどに深いものがあったのだろう。それに、必要悪。言いまわしているけどそれは多分、人を傷付けたり、……殺したりしたこと。僕は改めて夏神の暗い面を見た。

「他にはだな……海藤がある日私にプレゼントをくれたんだ。他人から物を貰うなんて経験のないことだったから戸惑ってね。爆弾でも入ってるんじゃないかって、そしてそれの解体訓練だと思って爆弾解体ツールを取り出して、海藤に大爆笑されたよ。しかもそのプレゼントは熊のぬいぐるみで、テディーベアというんだったったか、とにかく私に不釣合いなものだったんだよ。変だろう？」

「……いや。いいんじゃないかな。可愛い女の子には似合うと思うよ」

「……」

僕は正直に思ったことを言った。夏神は少し顔を俯かせて、横目で僕を見た。

「ありがとう。誠人君で二人目だ、そう言ってくれたのは」

夏神はほんのわずかに口元を綻ばせた。僕が言った通りに可愛くて、目を逸らせなかった。

「今度は私にも聞かせてくれないか、誠人君のこと」

「え……？　あ、うん」

まさか僕に夏神が訊いてくるとは想像してなかった。僕はちょっと躊躇って、昔の家族を、今の家族も、両方の思い出を探った。

「じゃあ、話すけど……」

僕は嬉しかった。夏神が訊いてくれて。

何故かって問われたら、僕は彼女に、実は、一目惚れしていたようだから。

●

朝礼の時刻はとうに過ぎ、一時間目の授業が行われていた。

生徒は静かで、先生が黒板に書いていく内容をノートに書き留めることに必死で、チョークと黒板のぶつかる、かっかっ、という音だけが教室内に反響していた。

その教室で、雀部健太郎は落ち着きなく手の上でシャーペンを回しながら、空いた三席を気にしていた。

友人である左座誠人、雀部が恋愛アタックを試みている夏神紫杏、そして先日同じ事件に巻き込まれた明日喜万里。

左座と夏神は大丈夫だろうと彼は思っている。左座は長く友である故に信じ、夏神は精神力の強さを先日まざまざと見せ付けられた故に心配はしていない。

気がかりなのは明日喜だ。事件の後のファミレスで不審なことを呟いていた上、見た目や雰囲気からでは精神心的に強い人間には見えなかった。雀部は彼女と同じように非日常を垣間見たにもかかわらず、彼らを思いやる心の余裕を持っていた。

（無事ならいいんだが……）

●

「ぐがッ！」

男は前蹴りの直撃を受け、吹っ飛ばされて壁に叩きつけられた。その衝撃で男は気絶し、壁にもたれかかりながら、ずるずると地面に倒れこんだ。

そこはとある邸宅の、テニスコートほどはありそうな庭だった。芝は丁寧に刈り込まれ、スプリンクラーも設置され、石畳は大理石である。

しかし、見渡せば男女多数の人が庭の至る所に倒れ伏していた。全員相当な手だれで、中には能力者も含まれているのだが、それでも手が出ないほどの相手にやられてしまっていた。

その場に唯一立っている男、スーツをカジュアルに着こなしているその男は、舞草だった。

舞草は周辺に敵が潜んでいないことを確認すると、邸宅のドアの前に歩み寄り、能力で鍵を破壊した。手でドアを慎重に開き、罠がないかと気を張る。玄関には靴が一足だけあった。

土足のままで家の中を歩き回り、彼女を探す。様々な部屋を物色しながら、ついに一階のリビングへと忍び込んだ。

そこには後ろ向きの彼女がいた。手には数十センチほどの刃渡りの鉈が、全く似つかわしくなく、握られている。彼女は舞草が来る

ことを知っていたようだ。ぴくりと感じた彼女は振り返る。

「む」

「わぁぁあああああ！！」

彼女は鉈を上に振りかぶって、舞草に向けて突撃した。瞳には憤怒の色。目には涙。歯を食いしばり、攻撃範囲内に入った舞草に鉈を振り下ろす。

予想外の出来事に舞草は数歩下がりながら能力を振るった。鉈が、柄の部分を残して、消滅する。彼女の腕の動きは止められず、完全に空へ振り下ろした。彼女は驚愕して立ち止まり、刃が消えている事に気づき、闇雲に残った柄を投げつけた。舞草は能力を使うこともなく片手で弾き飛ばす。その隙に舞草の懐へ入り込んだ彼女は拳を舞草に向けて叩きつける。

が、その前に舞草によって手首を握られ、合気によりうつ伏せに床に叩きつけられた。

「ぐっ！」

即座に、腕に関節技をきめられて身動きがとれなくなる。彼女はどうしようもない不甲斐なさを感じ、血が出るほど唇を噛んだ。

「うっ……」

「さて、一緒に来てもらおうか、明日喜万里」

第二十六話　意思（後書き）

不定期とはいえ一ヶ月以上書き込みなしですみません。

おかげでお気に入りしていただいた方も一人いなくなってしまったようですし……。

受験生ゆえに更新が遅くなるかもしれませんが完結まで見守ってやってください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7091i/

賢者のいし

2010年10月20日14時11分発行